

アジア女性基金公開フォーラムの記録

日韓学生のフォーラム2005
**日韓・市民の時代を
どうつくるか**

●参加学生の大学

韓国: 関東大学校・延世大学校・ソウル女子大学校・
西江大学校・梨花女子大学校・全北大学校・
聖公会大学校・建国大学校・圓光大学校・漢陽大学校
日本: 十文字学園女子大学・中央大学・
法政大学・東京大学・早稲田大学

これまで「日韓」を主導してきた専門家、エリートを超えて、
一人ひとりの出会いと率直な対話によって未来を描く

2005年12月9日 SYDホール(東京・代々木)
7日・8日 分科会 主婦会館(東京・四ツ谷)

主催 財団法人 女性のためのアジア平和国民基金
後援 外務省
*日韓友情年2005 事業企画



財団法人 女性のためのアジア平和国民基金
(アジア女性基金)

アジア女性基金公開フォーラムの記録

日韓学生のフォーラム 2005
日韓・市民の時代をどうつくるか
韓流と「慰安婦」・歴史問題、未来への対話

2005.12.7～12.9

東京・主婦会館プラザエフ／S Y Dホール

パネリスト

韓国16人+日本13人の学生

日韓友情年 2005 事業企画

主 催
財団法人 女性のためのアジア平和国民基金
(アジア女性基金)
後 援
外務省



公開フォーラム会場には学生、主婦なども参加

目次 contents

写真————— 4

開催概要————— 6

学生の紹介・分科会（部分）————— 16

公開フォーラム

前半 過去・「慰安婦」問題を軸に————— 29

後半 現在から未来・文化・市民交流を軸に————— 73

学生の事後レポート————— 115

資料————— 197



日韓・これからの市民社会をつくるのは学生たち。
真剣で率直な対話をつづけた





「真実に対する情熱、純粋な心、温かい友情をもち
つづけてほしい」——李元雄教授（上の写真・右）



《日韓学生のフォーラム 2005》

日韓・市民の時代をどうつくるか

——韓流と「慰安婦」・歴史問題、未来への対話

主催 アジア女性基金

後援 外務省

* 「日韓友情年 2005」事業

趣旨

日本と韓国の学生が集まり、韓流、歴史を語り合い、未来を描く——これまで「日韓」を主導してきた専門家、エリート、権力をもつ人たちを超えて、一人ひとりが出会いと体験と対話を大事にしたい。

そこで、日韓双方で、「市民生活、市民社会」を基本としていく視点を、今回の主題とした。

「ワールドカップ」、「韓流」以後、日韓では互いへの興味、関心が高まり、相互往来、実体験が進んだ。報道、情報はインターネットや体験で検証され、日韓関係は生活・文化次元で変わりつつある。この“新しい風”を定着、深化させるために、どうすればよいか。

——自ら従来型の情報と思考を更新していける環境で、国家・社会、歴史問題を問い直すとともに、人びとが信頼関係を築いていくことが大切になっている。その主体は未来を担う学生。このフォーラムは、日韓学生たちの直接対話と共同行動として実施する。

일본과 한국의 학생이 모여, 한류, 역사를 말해, 미래를 그린다

지금까지 일한 을 주도해 온 전문가, 엘리트, 권력을 가지는 사람들을 넘고,인 혼자가 만남과 체험과 대화를 소중히 한다

제 3차 한일학생포럼 인사말

이 원 웅

관동대 정치외교학과 교수

금년에도 아시아여성기금과 일본 외무성의 전폭적인 지원으로 제 3차 한일학생포럼을 개최하게 된 것을 감사드립니다.

한일 대학생들이 서로 마주앉아 어렵게 꼬여 있는 역사문제를 솔직하게 토론하고 함께 해결책을 논의하는 것은 두 나라가 불행한 과거를 청산하고 새로운 관계를 열어 나가기 위한 참신한 모색이라고 말할 수 있습니다.

아무쪼록 한일 대학생들이 이런 상호교류의 기회를 통하여 서로의 차이를 인식하고, 서로를 배우고, 서로를 이해하는 성과를 가져오기를 기대합니다.

(訳)

第3回韓日学生フォーラムへのごあいさつ

李元雄

Professor LEE, WON-WOONG

関東大政治外交学科 教授

本年もアジア女性基金と日本外務省の全面的なご支援によって、第3回韓日学生フォーラムが開催されることに、感謝を申し上げます。

韓日の大学生が一つのテーブルについて、お互いに真正面から向き合い、難しく纏れている歴史問題について率直に討論し、ともに解決策を見いだそうとすることは、両国が不幸な過去を清算して新しい関係を開いて行くための、斬新な模索だと言えます。

願わくは、韓日の大学生がこのような相互交流の機会を通じてお互いの差を認識し、学び、理解する成果を上げるよう、期待しております。

第3回日韓学生のフォーラムに寄せる

横田 洋三

Professor YOKOTA, Yozo

中央大学法科大学院教授、アジア女性基金運営審議会委員

「日韓学生のフォーラム」を、李元雄先生のご協力を得て企画した一人として、いまここに第3回目のフォーラムを開催できて大変うれしく思います。

私もこの会合に出席し、みなさまのご意見やお考えを直接うかがうことを楽しみにしていましたが、日程の都合で参加することができず、まことに残念に存じます。

このフォーラムの目的は、日本による植民地支配という日本人として深く反省すべき関係があった日韓両国の関係を、次世代をにやう両国の学生のみなさまが一堂に会して、直接意見を交換し、お互いの理解を深めることを通して、新しい友好、信頼関係を築く契機にしたいということでした。幸い、李元雄先生の並々ならないご尽力により、第1回、第2回のフォーラムは、所期の目的を十分に達成することができました。

これから始まる第3回「日韓学生のフォーラム」が、さらに実り多い会合になることを願っています。ここに集まっている学生のみなさま、ぜひ、率直に考えを述べ、お互いを理解し、たくさんの友人をつくってください。

(翻訳)

이원웅 교수님의 협력을 얻어 「한일 학생의 포럼」을 기획한 한 사람으로서 오늘 이 자리에서 제3차 포럼을 개최하게 된 것을 매우 기쁘게 생각합니다.

저도 이 포럼에 참석하여, 여러분의 의견과 생각을 직접 들어보고 싶었습니다만, 사정이 있어서 참석하지 못하게 되어 매우 유감으로 생각합니다.

이 포럼의 목적은 일본에 의한 식민지 지배라는 일본인으로서 깊이 반성해야 되는 관계가 있었던 한일 양국관계를, 앞으로의 시대를 이끌어 갈 양국의 학생

여러분이 한 자리에 모여, 직접 의견을 주고받고, 서로의 이해를 깊게 하므로 새로운 우호와 신뢰관계를 구축하는 계기가 되었으면 한다는 것이었습니다. 다행히 이원웅 교수님의 큰 협조로 말미암아 제 1차, 그리고 제 2차 포럼은, 소기의 목적을 충분히 달성하였습니다.

이제 시작되는 제 3차 「한일 학생의 포럼」이 더욱 더 결실이 있는 자료가 되기를 기대하고 있습니다. 여기에 모여 있는 학생 여러분, 부디 솔직히 의견을 말하여 서로를 이해하며, 많은 친구를 사귀시기 바랍니다.

PROGRAM:

《日韓学生のフォーラム 2005》

日韓・市民の時代をどうつくるか

——韓流と「慰安婦」・歴史問題、未来への対話

12月7日・8日——相互紹介と準備・分科会

*日韓逐次通訳

◆分科会・1 過去——「慰安婦」問題を軸に

主婦会館プラザエフ（東京・四ツ谷）

市民社会と過去・歴史問題（「対立」の整理、検証）

▽再検証——「慰安婦」問題の対立（責任、補償）教科書、

ナショナリズム

▽市民の課題——政治やメディア、既成権威と自立する市民

◆分科会・2 現在から未来——文化・市民交流を軸に

主婦会館プラザエフ

▽韓流、ニッポンフィールド——市民交流の定着と政治・

過去問題の扱い方

国境を越える市民（実態から構造的変化をみる）

▽共有課題は何か——国家・歴史と教育・情報・市民社会と個人

▽日韓ができること（人権、自由、貧困、女性、環境…）

12月9日

◆公開フォーラム

S Y Dホール

分科会報告・提起と全体討論

*日韓同時通訳

PANELIST:

《韓國》

朴美姫(女) Park, Mi-Hui

関東大学校教育大学院修士、国際交流センター助教

李沘昇(男) Lee, Hyun-Seung

関東大学校政治外交2年、海兵戦友会活動

崔將虎(男) Choi, Jang-Ho

関東大学校政治外交2年、製菓製パン技術経験

申熙石(男) Shin, Hee-Seok

延世大学校経済学科4年、東亜・中央日報インターン記者

金光日(男) Kim, Gwang-Il

漢陽大学校経営学部4年、脱北大学生リーダーシップクラブ会長

鄭多訓(女) Chung, Da-Hoon

西江大学校人文学部中国文化3年、中国紀行・世界神話旅行著者

朴基聖(男) Park, Gi-Sung

関東大学校政治外交2年、校内ボランティア団体

權儒宣(女) Kwon, Yoo-Sun

梨花女子大学校政治外交3年、地球村大学生連合会会長

金宰勛(男) Kim, Jae-Hun

関東大学校警察行政学科2年、卓球同好会

金周希(女) Kim, Ju-Hee

ソウル女子大学校仏文学科4年、地球村大学生連合会

金河羅(女) Kim, Ha-Ra

梨花女子大学校政治外交3年、梨花北韓研究会青年の森

文銀英(女) Moon, Eun-Young

建国大学校大学院政治学科2年、清州民営放送記者・風物牌牌長

金旻廷(女) Kim, Min-Jung

建国大学校大学院政治学科2年、歴史同好会、校内放送記者

牟裕英(女) Mo, Yu-Young

聖公会大学校日語日本学科4年、大阪桃山大研修・通訳

朴智仁(女) Park, Ji-In

圓光大学校食物資源学科4年、圓光大総学生会04会長、NLC会長

盧永來(男) Noh, Young-Rae

全北大学校国文学科4年、全北大北朝鮮人權サークル代表

《日本》

井口 弘美 IGUCHI, HIROMI

中央大学法学部政治学科3年、アーチェリ一部所属

河西 智美 KASAI, TOMOMI

中央大学法学部政治学科3年

小宮 輝子 KOMIYA, TERUKO

中央大学法学部政治学科3年、JAZZ研究会

野田 真理 NODA, MARI

中央大学法学部国際企業関係法学科2年

吉濱 しずか YOSHIHAMA, SHIZUKA

中央大学法学部政治学科3年、5大学合同ゼミ参加

高木 理 TAKAGI, SATOSHI

早稲田大学第一文学部東洋史学専修3年、1984年1月生

岸 加那子 KISHI, KANAKO

早稲田大学第一文学部人文専修、1985年11月生

杉本 優 SUGIMOTO, YU

早稲田大学政治経済学部政治学学科3年、1984年9月生

唐木 優衣 KARAKI, YUI

早稲田大学教育学部教育学科生涯教育学専修2年、1985年生

嘉村 真裕子 KAMURA, MAYUKO

早稲田大学教育学部学際コース国語国文科3年、1984年6月生

古瀬 綾子 FURUSE, AYAKO

十文字学園女子大学社会情報学部社会情報学科3年、1984年7月生

古山 亮太 FURUYAMA, RYOTA

法政大学法学部法律学科3年 1984年1月生

脇田 俊輔 WAKITA, SHUNSUKE

東京大学法学部4年、1983年12月18日

PROFILE OF UNIVERSITY :

(韓国)

関東(クァンドン) 大学校 Kwandong University

1955年、江原道江陵市に創立されたプロテスタント系の総合大学。8学部
を有する。

西江(ソガン) 大学校 Sogang University

カトリックの修道会の一つイエズス会(Society of Jesus)によって1960
年ソウル市に創立。6学部を有する。上智大学とは姉妹校。

ソウル女子(ソウル ヨジャ) 大学校 Seoul Women's University

1923年に基督教長老派によって設立が決議されたが、植民地支配や朝鮮動
乱のために果たされず、1961年によりやく設立されたミッション校であ
る。設置学部は人文学部、社会科学学部、自然科学学部、情報メディア学
部、美術学部で、ソウル市内東北部の蘆原(ノウォン)区にある。

漢陽（ハーニャン）大学校 Hanyang University

1939年に東亜工科学院として創設された。1948年に漢陽工科大学として4年生大学に昇格。現在は理系・文系を合わせて22学部で、ソウルキャンパスの他にソウル近郊の京畿道安山市にもキャンパスを持つ。

延世（ヨンセ）大学校 Yonsei University

1885年に設立されたセブランス医科大学校と1915年に設立の延禧専門学校が1957年に合併して発足したプロテスタント系ミッション校。ソウル市内新村にある本部キャンパスに15学部、江原道原州（ウォンジュ）市にある原州キャンパスに4学部を擁す。

梨花女子（イーファ ヨジャ）大学校 Ewha Womens University

1886年、米国メソヂスト教会宣教師のスクレントン夫人によって創設された、韓国・朝鮮における女性専門教育機関の嚆矢である梨花学堂を基とする。現在の設置学部は15学部。

建国（コングク）大学校 Konkuk University

1931年に設立された社会営中央実費診療院を基にする。1959年に総合大学建国大学校に昇格。ソウルキャンパスに14学部、忠清北道忠州（チュンジュ）市の忠州キャンパスに7学部を持つ。

圓光（ウォングワン）大学校 Wongkwang University

韓国仏教の一派である圓佛教（ウォンブルギョ）によって1946年に韓国南西部の全羅北道益山（イクサン）市に創設された。1971年、総合大学に昇格。19学部を持つ。

全北（チョンブク）大学校 Chonbuk National University

全羅北道の道都である全州（チョンジュ）市にある国立大学。1948年に開校した道立裡里農科大学を母体として、1952年に国立全北大学校に改編昇

格。現在は14学部を擁する。

聖公会（ソンゴンフェ）大学校 SungKongHoe University

1914年、ソウル北西部の江華島に設立された聖公会（Anglican Church）の聖ミカエル神学校を母体とする。1989年に聖公会神学校、1992年に聖公会神学大学に改編され、1994年、聖公会大学に校名を変更昇格した。3学部、7学科。

（日本）

中央大学 CHUO UNIVERESITY 私立

早稲田大学 WASEDA UNIVERESITY 私立

十文字学園女子大学 JUMONJI UNIVERSITY 私立

法政大学 HOSEI UNIVERSITY 私立

東京大学 TOKYO UNIVERSITY 国立

準備会・自己紹介

2005年12月7日、主婦会館プラザエフ

* 韓国の方たちの姓名、大学名はカタカナを基本としました。

漢字表記は前のページをごらんください。

基金 ビデオをご覧ください。ご存知のようにアジア女性基金については韓国では大変批判が強い団体です。10年の活動を経て、来年解散することが決まっております。その10年の歴史の記録、また日韓関係の現在をビデオでみていただければと思います。

-- ビデオ上映 --

未来に向けた解決の契機として

李元雄教授 私は韓国のクァンドン大学で国際政治を教えている李元雄（イー・ウォンウン）と申します。日本にも関東大学がありますが、日本と韓国で同じ名前の大学があることをうれしく思います。

今日、この集いの目的ですが、日本と韓国の大学生が難しい歴史の問題をどのように解決するのか、また、未来に向け、皆さんのこれからの後世の人々にとって日韓の関係をいかによくしていくかを見つける契機にしてほしいです。

韓国から16人の大学生がきました。16人、皆が日本社会や日本の大学生の皆さんにとっても好奇心を持ってきました。この集いは皆さんのためのつどいであって、未来のための集いです。ディスカッションのテーマや内容も皆さんが決めなければなりません。発言も自由ですし、すべて皆さんの手作りの集いにしてほしいと思います。

分科会は二つのテーマに分かれて行う予定です。二つのテーマはお互いに関連があります。一つは、過去についての問題、特に先ほどビデオにもありました「慰安婦」問題をめぐって両国の間の認識がどう違うのか、どのようにそれぞれ知っていることが違うかについてです。私たちは、何も過去の問題について日本と韓国の学生の考えを一つにし、結論を導き出す

ためにこの議論を行うわけではありません。お互いに自由に知っていることについて、または知りたいことについて議論していただけたらと思います。

二つ目のテーマは、文化や両国の間で日増しに増えている交流の問題です。皆さんが知っている日本や韓国の文化、それらの二つの文化が出会ったときに、和合という場が設けられます。そういう建設的な場にしたいと思っております。

私は、いわゆる既成世代、大人です。皆さんは未来の世代です。私たち大人は歴史問題を解決することに失敗しました。皆さんは、この過去の問題に対してより賢くアプローチすることを望みます。より異なった環境、平和で成熟した環境のもとで議論をし、両国の平和と共存と反映が築かれることを望みます。

それでは、まず、出席者の紹介からしたいと思います。私がマイクで話していますが、韓国側のやり方で、紹介を進めたいと思います。韓国ではホスト側で自己紹介をして、それからお客様が自分の紹介をすることになっています。ここでもホスト側で紹介をしていただきたいと思います。ですから、日本の学生から左から右へと行き、それから韓国の学生を紹介します。学校の名前と自分の名前と簡単に一言、例えばどういったきっかけでここに参加したか一言おっしゃってください。

《日本》

○こんにちは。東京大学法学部4年の脇田俊輔（わきた しゅんすけ）と申します。このフォーラムに参加したきっかけは、去年東京大学の大沼先生の慰安婦問題のゼミに参加して、それを通じて慰安婦問題をきっかけとして来年から国際法を研究することになって、このフォーラムに参加しました。

○早稲田大学の文学部3年の高木理（たかぎ さとし）と申します。僕は出身が青森なので、先ほどのねぶたの映像をみて、すごくうれしくてちょっと心が躍る感じでした。今回のフォーラムもねぶたのように皆さん

と交流することで盛り上げていきたいと思います。

○早稲田大学政治経済学部3年の杉本優（すぎもと ゆう）と申します。今学校でも東アジアの国際政治のゼミに所属していて、うちの大学の知っている先生から紹介されてこの場に出られましたが、とても喜んでおります。よろしく申し上げます。

○早稲田大学教育学部2年の嘉村真裕子（かむら まゆこ）です。私は韓国に興味があって、韓国に行ったこともあります。ほかのアジアの国も訪問をして、アジアの歴史問題について興味があって、このような会に参加しました。皆さんと話したいのでよろしく申し上げます。

○早稲田大学教育学部の2年の唐木優衣（からき ゆい）です。私は来年韓国の高麗大学というところに留学することになっているので、私ももともと在日問題や歴史問題に興味があって、先生の紹介でこのようなフォーラムに参加することになりました。よろしく申し上げます。

○十文字学園女子大学、社会情報学部社会情報学専攻の古瀬綾子（ふるせ あやこ）と申します。私が現在、橋本ヒロ子先生の女性学のゼミに所属していて、その先生から紹介されてこのフォーラムに参加しました。「慰安婦」問題についてもとても関心があります。同時に友人や母親などで韓国に熱心なファンがいるので、そういったことでも関心があるので、今回は楽しみにしています。よろしく申し上げます。

○中央大学の国際企業関係法学科2年の野田真理（のだ まり）と申します。この会に参加するきっかけは今年の夏に国連の人権小委員会で横田洋三教授のインターシップをさせていただいて、そちらの関係でこの会に参加することになりました。学生の立場から交流ができるということで、今回、これだけ大人数の人でお話ができるのはいいことだと思いますし、このような機会を設けてくださった、主催者の皆さんに感謝しております。楽しみたいと思います。三日間宜しく申し上げます。

○中央大学法学部3年の井口弘美（いぐち ひろみ）です。今回参加したきっかけは野田と一緒にです。一度韓国にいったことがありますが、そのときは観光とか食べることばかりでしたが、今回は勉強をしたいと思います。

よろしくお願ひします。

○中央大学国際企業関係法学科3年の河西智美（かさい ともみ）です。私は横田洋三教授のもとで国際人権法を専攻しております。その関係で慰安婦問題にも興味をもっていて、この会に参加させていただきました。こんなふう若い人と一緒にしゃべれることを嬉しく思っております。あと、キムチが大好きなのでキムチの作り方を教えてください。よろしくお願ひします。

○中央大学法学部政治学科の小宮輝子（こみや てるこ）と申します。大学では国際協力や国際関係について勉強しています。このフォーラムに参加したきっかけは皆さんと同じで夏にインターンシップをさせていただいた横田洋三教授の紹介で参りました。韓国は行ったことはありませんが、興味があるので、同世代の人と話せるのでとても光栄です。韓国に行ってみたいと思っております。色々教えてください。よろしくお願ひします。

○はじめまして。私は中央大学3年法学部の吉濱しずか（よしはま しずか）と申します。静かには英語でサイレンスという意味なんです、実際は全く違うので、そういうつもりで接してください。これに参加したきっかけは右の四人と同じですが、あとはゼミで5大学の合同ゼミに所属しておりまして、東アジアのことを一年間研究しております。よろしくお願ひします。

《韓国》

◎皆さま、こんにちは。私はソガン大学で中国文学を専攻しておりますチョン・ダフンと申します。私は中国語関連の催しやフォーラムには参加したことがありますが、日本関連はこれが初めてです。これに参加したきっかけは、こちらの李元雄先生の紹介です。三日間有意義な時間になると思うので、よろしくお願ひします。

李元雄教授 ここで、一言だけ付け加えたいと思いますが、今のチョン・ダフンさんは韓国では大変有名な作家です。すでに二冊の本を出していますし、20か国以上を旅行した韓国では名の知れた作家です。

◎皆さん、こんにちは、コングク大学の大学院で政治学を研究しておりますキム・ミンジョンと申します。大学生の頃から歴史には興味があって、サークルで慰安婦問題などを扱ってきました。今回をきっかけに皆さんと心から対話をしたいと思っております。お互いへの理解を深めるきっかけにしたいと思います。先ほどキムチの作り方を教えてくださいというリクエストがありましたが、実は私はたこ焼きやお好み焼きが大好きなので、美味しいお店があったら教えてください。よろしくお願いします。

李元雄教授 キム・ミンジョンさんは学校内の放送記者を勤めておりまして、メディア論を専攻しておりました。

◎皆さん、こんにちは。私は、チョンブク大学で国文学を専攻しておりますノ・ヨンレと申します。私は学校以外に北朝鮮の人権改善の取り組みを行っております。今回日本は初めてですが、昨日、日本についてメンバーと色々な話をしましたが、頭に浮かぶ日本語という話をしました。韓国社会に残っている日本語で弁当や割り箸やたくあんなどの単語が出ましたが、まだまだ日本に対する我々の理解は足りないなあと実感いたしました。今回三日間の日程ですが、お互いの考え方のギャップはあると思いますが、それを近づけていけたらと思います。

◎皆さん、こんにちは。私はパク・ジインと申します。ウォングァン大学で勉強しています。現在、私は韓国で未来のリーダーを夢見る大学生の集まりであるNACの代表を務めております。今回学生だけの集まりということですので、熱い思いをお互いにぶつけ合いたいと思います。

李元雄教授 パク・ジインさんは韓国の仏教系の古い大学ですが、その大学で学生会長を務めた大変偉い方です。

◎私はムン・ウンヨンと申します。韓国のコングク大学の学生ですが、このようなメディアを通じてではなく、顔を合わせてお話できることを大変嬉しく思っております。どのような形でもかまいませんが、本当に身の回りの話でも雑談でも、堅いテーマの討論でも良いと思いますが、こういう話を直接する機会は大変貴重なものだと思います。また、このような集まりを一回限りにするのではなく、どういう形でもいいですが、今後発展さ

せていけるようなきっかけにしたいと思います。

李元雄教授 ムンさんはチョンジュ民営放送の記者を務めたこともありますし、また韓国の伝統音楽の専門家です。

◎こんにちは、私はモ・ユヨンと申します。韓国の聖公会大学で日語日文学科で勉強しております。韓国の李元雄教授にご紹介いただきまして、参加することになりましたが、専攻が日本語ということで日韓に関する様々な問題を扱っている授業を受けていて、「慰安婦」問題や靖国問題や竹島問題などについて学ぶことができました。それらの問題は、今までは韓国の学生とだけ話をすることができましたが、ここでは、日本の学生たちとお話できるということで大変うれしく思っております。今年は日韓友情年ということで、演劇部門においていろんな通訳をやってまいりました。今回韓流ブームについては面白い議論になると期待しております。よろしく願います。

李元雄教授 モ・ユヨンさんは経歴をざっと拝見すると日本の文化関係の通訳をかなりこなしていらっしゃるということで、実際私がテストをしたわけではありませんが、日本語がお上手で、皆さんともコミュニケーションがうまくとれると思います。

李元雄教授 すでに時間が大部たちましたので、10分くらい休憩を挟んでほしいと思います。大変、ハンサムで美人の学生に期待してください。お菓子とコーヒーがありますのでセルフサービスでどうぞ。

◎皆さんこんにちは、イー・ヒョンソンです。韓国の観光客が最近、大変多いですが、日本も最近観光地の中心地として浮上してきていると思います。実は私の希望は観光都市の市長になりたいと思っています。今、観光マーケティングについて勉強しているところです。私は「慰安婦」問題について興味がありまして、李元雄先生の推薦で今回嬉しい心で日本に来ることができました。こちらに向かってくるときは冷静な気持ちでしたが、帰りはあたたかい気持ちで帰れることを期待しております。今回は、日本で開催していますが、次回は韓国で開催できたら良いと思います。よろしく願います。

李元雄教授 イー・ヒョンソンさんは韓国の海兵隊で過ごしました。いわゆる韓国の特殊部隊ですが、日本の”神風”に比較できるかもしれません。顔を大変優男ですが、実は荒っぼいところもありますので、ちょっと注意してください。(笑)

◎皆さん、こんにちは、私はシン・ヒソクと申します。ヨンセ大学で経済学を学んでおります。実は私は、人権問題に大変興味がありまして、人権問題のNGOの北朝鮮の市民連合という活動も取り組んでおります。今回そちらの関係で、李元雄先生にご紹介をいただいて、こちらに来ることになりました。昨日、成田に着いたところ、お天気がよく暖かく、大変よいスタートだったと思います。日曜日までよい時間にしたいと思います。また皆さんとお付き合いもこの場で終わるのではなく、今後も続けたいと思います。よろしくお願いします。

李元雄教授 実はシン・ヒソクさんは韓国でもかなりメジャーな日刊紙である東亜日報、中央日報でインターン記者を勤めたこともあります。また、英語も大変べらべらです。将来記者になるかどうかはわかりませんが、本当に有能な学生です。

◎皆さんこんにちは、韓国から来ましたパク・キソンと申します。クェンドン大学政治外交学科2年生です。今回、日本は初めてですが、韓国の町と変わらないという印象を受けました。町の人も元気だという印象を持ちました。今回いただいた慰安婦問題のテーマは大変敏感な問題ですが、これにつきまして韓国と日本の学生が本当に率直な意見と考えを交換するのは貴重な場だと思っております。

李元雄教授 パク・キソンさんは学内で恵まれない人々のために活動するボランティア団体で活動をしてきました。大変、良い学生です。

◎私は同じくクェンドン大学警察行政学科2年生のキム・ジェフンと申します。日本は韓国にとって学ぶ点の多いところだと思いますが、実は私はこちらの皆さんよりは日韓の文化や「慰安婦」問題について関心のない、そういう学生の部類に入ります。ただ、子どもの頃から漫画などを通じて日本の文化には慣れ親しんできましたので、日本に来ることができ

て大変嬉しく思います。個人的には飛行機旅行ができて、新宿にも行けたし、地下鉄も乗れて、日本に来たこと自体が大変うれしいです。今回のフォーラムに関してですが、日韓の学生が同じテーマに関してお話ができるということは本当に意義深いことだと思います。ありがとうございます。

李元雄教授 キム・ジェフンさんは卓球サークルを活発に行っております。また日本に来て大変うれしいと先ほど言っていましたが、実は警察行政学科の厳しい女の先輩の間で苦勞をしていたそうですが、こうして日本に来て年上のきれいでやさしいお姉さんに会えてうれしいのではないかと思います。

◎皆さん、こんにちは、私は、クォン・ユソンと申します。イーファ女子大学の政治外交学科の3年生ですが、今は学校を休んでおります。私は地球大学生連合会の会長を勤めております。実はもっときれいな声ですが、風邪をひいてしまいましてガラガラです。皆さんと三日間、よいテーマでお話したいと思っております。よろしく申し上げます。

李元雄教授 クォンさんが会長を勤めていらっしゃる地球村大学生連合会というのは、会員が1300人もいる大変大きな団体です。また、女性学のメッカといわれるイーファ女子大学でその中心である政治外交学科に在籍しているということにして、今後のことを考えると私も彼女にいい点数を稼いでおかなければならないと思っております。

◎皆さん、私の名前はキム・ジュヒです。今クォンさんがおっしゃった1300分の1が私です。同じ連合会の人権チームで活動しておりますが、主に第三世界の子どもたちに対する性的暴力について一学期の間勉強をしました。私にとって大変ショックな内容でしたが、女性として生きることがどういうことかを考えるきっかけになりました。これまでは現代を生きる女性や子どもというテーマで取り組んでまいりましたが、今回は、過去の女性の人権についても一度振り返って考えてみたいと思います。またこのフォーラムがそういう考えができる良い機会になると思っております。今回、皆さんとまた人の話を聞くことによって、コミュニケーションをはかり、互いを知ることは大変意義深いことだと思います。

李元雄教授 キムさんが所属している地球村大学生連合会というのは韓国で最大の海外援助団体である、地球村分かち合い運動の大学生の支部であります。大変良い行いをしていて、また韓国社会でも知名度も高い団体ですが、そちらでがんばっています。

◎皆さん、こんにちは、私はキム・グァンイルと申します。ハンヤン大学の経営学部で勉強しております。私は脱北大学生リーダーシップクラブの会長ですが、マイク慣れしていないので、なまりが出るのではないかと心配しています。この会は、知り合いを通じてくることになりました。実は私は北朝鮮で16年間暮らしました。だからといって私を北朝鮮代表だとは思わないでください。私は日本人の拉致問題についても全く知りません。

李元雄教授 今、キム・グァンイルさんは脱北大学生リーダーシップクラブの会長を勤めております。また、そのほかにも様々な活動をしている人です。

◎皆さん、こんにちは、私はクェンドン大学の政治外交学科2年生のチェ・ジャンホと申します。日本と韓国の学生の間で過去・現代の歴史に対する認識や見方が異なっているということから、日本の方がどのように考えているか知りたくて今回来ました。日本の方は本音を語らないというのがありますが、私はできるだけ本音を語り合って、暴力沙汰にならない程度で話し合いをしたいと思っております。率直な対話でお互いを分かち合いたいと思っております。

李元雄教授 チェ・ジャンホさんは今回の韓国の学生の中で一番末っ子に当たります。従って、きれいなお姉さんのマスコットでありますし、いろんな仕事をしています。

◎クェンドン大学の教育大学院で英語を専攻しておりますパク・ミヒです。私は今回の日韓大学生フォーラムで初めて日本に来ました。日韓の文化や歴史を若い世代の観点から率直に意見を交換できればと思っております。

李元雄教授 パクさんはクェンドン大学の国際交流センターで助手をしておりまして、若い世代の交流を支援しております。ですから今回の経験も将来彼女の役に立てればと思っております。

◎私はイーファ女子大学の政治外交学科3年生のキム・ハラと申します。私は軍事と安全保障に関心があり、勉強をしています。日本と韓国をめぐる歴史の問題を解決することはできないと思いますが、楽しく話してお互いを理解することが出来ればと思います。そして、解決の糸口を見出す可能性を見つけられたらと思います。最後はお互いが友として別れることができればと思います。

李元雄教授 キム・ハラさんは学校でも北朝鮮に関する研究会や環境問題に関連する活動をしています。ちなみに、高校のときはカンノン女子高校の副会長を勤めたこともあって、たぶん政治家としての野望を抱いている学生です。以上です。

自己紹介を終わりました、これから1時半まで1時間半ほど残っておりますが、先ほど話した二つのテーマのうち、明日皆さんが関心のあるテーマに決めていただく時間にしたいと思います。

通訳の方をちょっと紹介します。

——イー・ヒギョンと申します。よろしくお願ひします。

——イー・ジョンミと申します。よろしくお願ひします。

李元雄教授 それでは、明日は、二つの分科会に分かれてディスカッションすることになります。9日の公開フォーラムで日韓それぞれ一人ずつ司会をしていただく方を決めてもらわなければなりません。それから、今日は、明日皆さんが分科会に分かれてどのような議題で議論をするのか洗い出して、決めていただいて話の取っ掛かりというところまで議論していただいたらと思います。

まず、慰安婦とか過去の歴史を扱う分科会についてお話ししましょう。まず、決めなくてはならないのは、どういった話をするかどういった方法で議論をするかです。方法というのは、例えば、誰か一人が発表をしていただいてそれに対してそれぞれが意見を出すという方法にするか、参加者がすべてパネリストになって話を進めていくのか、などいろんな方法があると思いますが、それを皆さんが自ら決めてください。

まず、討論の方法についてご意見がある方はおっしゃってください。自由討論にすべきか、問題提起をしてそれに対して意見を出すという形にするかです。

○もし、後者の誰か一人が問題提起をして、それからコメントをする形をとった場合、問題提起をする人が準備をする時間ないし考える時間はあるんでしょうか。

李元雄教授 参考までに申し上げますと、韓国側の学生は8人が慰安婦に関する短い論文を準備してきています。韓国の学生も8人、皆が同じ考えではありませんので、その中から意見が違う論文を選んでそれに対して日本側から発言をするということもできると思います。

○分かりました。

李元雄教授 またはフリーディスカッションをして、参加者皆が自由に5分から10分で意見を述べていき、その出た意見を整理して、まとまった意見で公開フォーラムで発言者を決めて、その段階でより意見を集中させてやるという方法もあると思います。

問題提起者を決めて討論をするというのは、あまり準備する時間もないし、多くの意見が出ないのではないかと思います。ですから、自由討論の形にしておいたあと、話し合う内容やカテゴリーをしばってそれをここで話し合っただけで決めてそれについて話し合うということにするほうがより合理的なディスカッションになると思います。

○方法についてですが、これが三回目ということは前々回と前回があったと思いますが、そのときはどのような形をとったのか、参考までに聞きたいです。まず、事前の討論を行いました。このように。そのときにはフリーディスカッションをしました。公開フォーラムのときには、日本と韓国の学生がそれぞれ二人、三人が論文を発表するという形でやりました。もちろん、これまでの前例に従うのもいいと思いますが、テーマが新しいというのもあるし、新しい話が出ることもあるので、必ずしも前例に従う必要はないと思います。

李元雄教授 ほかの意見はありませんか。

ワーキンググループを作ってやるのがいいと思いますが、通訳がつくのがどうか、それから何人くらいのワーキンググループにするかが問題ですね。もしワーキンググループの方法を取る場合、日韓合わせて30人いますが、二つの分科会がありますので、15人ずつあるとすると、一つのワーキンググループが四人くらいになると思います。そこで言葉の問題が出てくるんですが、日本の学生の中で英語ができる学生がいるなら、韓国の学生の中には日本語や英語や中国語ができる学生がいるので、コミュニケーションの問題はないと思います。

○私はフリーディスカッションのほうがいいと思います。理由は三点あります。第一に第一回目や二回目のフォーラムを見ますと、フリーディスカッションをすると、発言者の人の顔が出ますが、それを見て次回あの人たちに会えるという次回につながる思いを抱くことができる。二つ目は、学校の授業だと一方的に先生の話聞くだけなので議論の核となる部分をミスしがちです。ですから、フリーディスカッションにすると一方的にはならないので、より議論に集中できると思います。三点目の理由としては自分の主張だけを話してしまうと、人の主張に耳を傾けなくなります。そこでフリーディスカッションになると様々な意見が発表されるので、それに対してある程度知識を得ることができると思います。なので、フリーディスカッションがいいと思います。

◎先ほどワーキンググループの話が出ましたが、私は四つではなく三つを作って、それぞれのテーマを決めたいと思います。「慰安婦」と靖国と韓流です。そこで議論した内容をもとにそのワーキンググループに参加した人が共同で問題提起の発表文を作って、その人が発表をして、それについて議論をする。そうすると、発表してそれに対する議論をするので、それぞれ自分の意見ばかりを言うことにはならないと思います。

(結局、二つの分科会を設定して8日に集まり討論。報告者・司会者を決めて9日の公開フォーラムを迎えた。)



司会者は日韓それぞれ2人の学生

公開フォーラム《日韓学生のフォーラム2005》 日韓・市民の時代をどうつくるか

2005年12月9日、SYDホール

過去——「慰安婦」問題を軸に

司会進行(間仲)　それでは、財団法人女性のためのアジア平和国民基金《日韓学生のフォーラム2005》を開始いたします。本日は平日の午後にもかかわらず、このようにお集まりいただきましてありがとうございます。このフォーラムは、日韓友情年2005事業参加企画として外務省の後援をいただいております。まず、和田春樹アジア女性基金専務理事・事務局長よりご挨拶申し上げます。

ウルサ条約から100年目に開催する意味

和田　主催者を代表しまして一言ご挨拶申し上げます。

アジア女性基金は1995年に設立されました。かつての戦争中に「慰安婦」とさせられて辱めを受け、多大な苦しみを受けられた方々に対する道義的責任を感じ、この人々に対する謝罪と償いを行うために日本政府が設立した基金です。その後96年からオランダ、フィリピン、韓国、台湾の「慰安婦」の方々に事業を実施してまいりました。約360名以上の方々に事業を実施したわけであります。

このような事業を実施するにあたりまして日本の政府もまた基金に関係した者も、みなこれは日本がかつて侵略植民地支配で苦痛を与えた国々との和解を願っての努力でありました。特に日本と複雑な、苦しい関係がありました韓国とのあいだにおきまして、韓日、日韓の和解を願う気持ちは強かったわけでございます。そのためにアジア女性基金では日韓学生のフォーラムを呼びかけまして、すでに前2回実施いたしまして、今回は3回目でございます。イー・ウォンヌン先生のご努力によりまして、第3回が開かれることになりましたことも深く感謝いたす次第です。

本年はご承知のとおり、日韓にとりましては特別の年でありました。ウルサ（乙未）保護条約が結ばれてから100年という年であります。こういう年の末に、この第3回の学生フォーラムが開かれましたところに特別の深い意味があるように、私には思われます。小さな集まりでございますが、小さな泉から流れる水が広がって行って、そして春を呼んでいくように、ここから皆さま方のご討論によりまして日韓間の新しい市民の時代を開く、和解の時代を開くための気分が日韓間に広がって行ってくれることを心から願っております。どうぞ、よろしく願いいたします。（拍手）

司会 ありがとうございます。続きまして、このフォーラムの企画者・アドバイザーであります韓国関東大学教授、イー・ウォヌン（李元雄）先生よりお話しいただきたいと思います。お願いします。

失敗した既成世代を超え、未来に向けた市民社会を

李元雄（イー・ウォヌン）教授 今回の第3回韓日学生フォーラムの韓国側の学生を指導しております、関東大学のイー・ウォヌンと申します。まず今回のフォーラムを物心両面からご支援いただいております日本の外務省、またアジア女性基金の関係者の皆さんに心より感謝を申し上げます。また、公務のためにこの場にご参加はいただきませんでした。最初から韓日学生フォーラムの趣旨に対してご賛同いただき、運動を進めてこられました中央大学の横田洋三教授にも、この場をかりて尊敬と感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

今回のフォーラムの大きなテーマは「未来に向けた市民社会」というキーワードでございます。未来の市民社会の主役となる両国の学生たちが額を寄せあって過去の問題、または現在の問題をともに考え、討論し、政府、あるいは国家ではない市民が主体となった解決方法を模索するということであります。未来の社会をリードしていく力は普通の人たち、誠実な人たちから生まれてこなければならないと思います。この場に集まった学生らは政府の立場を代弁するような力をもった知識の豊富な主流をなすエリートではありません。私は韓国の学生を選抜するにあたって、最も誠実

で率直で、そして活気にあふれた、そういった普通の大学生の心の声を伝えようとして努力してまいりました。3つの市民団体、お三方の教授に学生の推薦をお願いいたしました。

今回のフォーラムは、大きく2つのテーマに分かれています。1つは過去の問題、そのなかでもアジア女性基金が直接関係し、またこれまで解決されないまま未来の世代に残されている「慰安婦」の問題を両国の学生がともに討論するという。私たちはおたがいに、どれだけこの問題について知っているか。この問題の真実は何か。またこの問題を解決するための努力はどういったことがあり、今後残された課題は何なのかといった問題を討論しようと思ったわけです。2番目は現在の両国関係、とりわけ文化の接近というテーマであります。いわゆる韓流と呼ばれる日本における韓国文化のブーム、同様に韓国の10代を中心として広がっている日本文化のブーム、それがもたらす社会的影響を重点的に討論しようということでもあります。実際にこの2つのテーマはおたがいに密接に関係しております。すなわち過去、国家の関係から発生した問題と、現在、すなわち文化的接近に代表される両国の市民社会の交流、この2つを同時に討論して未来の方向を模索しようということでもあります。

これまで歴史的事実を目をそむけて、過去は過去だと、時間が経てばすべて解決されるだろうというふうを考えてきた人もいます。また、過去の視点に立って過去の視点だけで未来を見つめ、いつまでも憎悪と復讐の悪循環を繰り返す人たちもいます。いまや両国の若い世代は真実というものを基礎に和解と変化を追求していかなければなりません。未来の世代が直面し解決しなければならない国際社会の問題、そういったものは過去の世代、私のような現在の世代とは明らかに異なるからであります。過去の遺産であるわれわれ世代は過去の問題を解決するのに失敗しました。そして、その重い荷物をいま皆さんの世代に引き継いでいるわけです。果たして両国間の暗い過去を清算し、ともに繁栄する未来をつくり出すということは不可能なことなのでしょうか。

私たちは、これまで3度にわたって、両国の学生の討論を見守りながら

希望をもちました。私が見た希望というのは現在にあるのではなく未来にあります。歴史がわれわれを拘束する力をもっていることは事実です。人間は、記憶する動物で社会的動物だからです。しかし一方では、過去の暗い影がいつまで未来を左右するのかということも挙げられます。私はこの2日間、分科会で皆さんの熱のこもった討論、そして成熟した姿勢を見てまいりました。皆さんが示してくれた真実に対する情熱、純粋な心、そして温かい友情、これが、皆さんが今後主役となる社会でも引き続き維持されることを願います。皆さんを後ろから見守っていきたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

司会 ありがとうございます。このフォーラムの第1回からイー・ウォヌン先生(李元雄教授)とともに共同企画され、今回は日程の都合で出席できませんでした横田洋三中央大学教授、アジア女性基金運営審議会委員からのメッセージはプログラムに掲載してあります。

それでは、きょうの主役であります日韓、韓日の学生さんたちにフォーラムの場をお渡ししたいと思います。

まず簡単な自己紹介をしていただきまして、そのあと韓国と日本の学生が選任した司会者、報告者によって進行していただきます。韓国の学生さんからの司会者はクォン・ユソンさんとノ・ヨンレさん、報告者はパク・ジンさんとキム・ハラさん、日本側の司会者は脇田俊輔さんと唐木優衣さん、そして報告者は岸加那子さんと吉濱しずかさんです。それでは、皆さんどうぞよろしく願います。

クォン・ユソン(司会) それではただいまよりフォーラムに入りたいと思います。先ほどご紹介いただきましたが、司会者そして参加者全員の紹介をまずしたいと思います。ただいま紹介いただきました「慰安婦」問題の司会のクォン・ユソンと申します、よろしくお願いいたします。

脇田(司会) 脇田と申します、よろしくお願いいたします。

ノ・ヨンレ(司会) 韓日文化の司会を務めます韓国側のノ・ヨンレと申します、よろしくお願いいたします

唐木(司会) 現在の文化交流のほうの分科会のほうの司会を務めさせて

いただく唐木優衣と申します、よろしくお願ひします。(拍手)

クォン・ユソン まず、それでは全員の学生の紹介をしたいと思いますが、簡単に自己紹介でお願いしたいと思ひます。韓国側、こちらのほうから順番に自己紹介をお願いいたします。

チェ・ジャンホ クァンドン（関東）大学の2年、チェ・ジャンホと申します、よろしくお願ひいたします。

パク・キソン こんにちは。「慰安婦」問題に参加しましたパク・キソンと申します、よろしくお願ひいたします。

イー・ヒョンソン こんにちは、韓国のクァンドン大学の2年生、イー・ヒョンソンです。「慰安婦」問題に参加しました。ありがとうございます、よろしくお願ひします。

キム・グァンイル ハンニャン（漢陽）大学のキム・グァンイルと申します、よろしくお願ひいたします。

杉本 きょうは韓日の文化交流のほうに参加させていただきます、早稲田大学、杉本優です。よろしくお願ひします。

高木 早稲田大学の高木理と申します、よろしくお願ひします。

パク・ミヒ クァンドン大学のパン・ミヒと申します、よろしくお願ひいたします。

キム・ジェフン 韓国からまいりましたクァンドン大学のキム・ジェフンと申します、よろしくお願ひいたします。

嘉村 早稲田大学の嘉村真裕子です。よろしくお願ひします。

岸 同じく早稲田大学2年の岸加那子です、よろしくお願ひいたします。

古山 法政大学の古山亮太と申します、お願ひします。

シン・ヒソク ヨンセ（延世）大学のシン・ヒソクと申します、よろしくお願ひいたします。

キム・ハラ イーフア（梨花）女子大学のキム・ハラと申します、よろしくお願ひします。

チョン・ダフン ソガン（西江）大学のチョン・ダフンと申します。

パク・チイン パク・チインと申します、よろしくお願ひいたします。

モ・ユヨン モ・ユヨンと申します、よろしくお願いいたします。

小宮 中央大学3年の小宮輝子と申します、よろしくお願いいたします。

キム・ミンジョン コングク（建国）大学政治学科のキム・ミンジョンと申します。

ムン・ウニョン コングク大学のムン・ウニョンと申します。

キム・ジュヒ ソウル女子大学のキム・ジュヒと申します、よろしくお願いいたします。

吉濱 中央大学、吉濱しずかと申します、よろしくお願いいたします。

河西 同じく中央大学3年の河西智美と申します、よろしくお願いいたします。

野田 中央大学2年の野田真理と申します、よろしくお願いいたします。

クォン・ユソン 約30人の韓国と日本の学生が集まっています。自己紹介をいただきました。昨日とは違って少し緊張されているようです。みなで一緒に拍手でもして元気に始めたいと思います、よろしくお願いいたします。（拍手）

脇田 「慰安婦」問題、文化交流の双方におきます議論の進め方を説明していきたいと思います。まず双方の分科会におきまして、日韓双方から簡単なプレゼンテーションを行います。そしてそのあと日韓学生の議論に移りたいと思います。皆さんはできるだけ日韓交互に発言するように努めていただきたいと思います。そして、その後余った時間でこの私たちと会場の皆さんとのやりとりというのを行いたいと思います。それでは時間配分の説明のほうお願いします。

クォン・ユソン スケジュールについて若干ご紹介します。いまから1時間半ほど「慰安婦」問題に関する討論を行います。その討論は先ほどご紹介したようにプレゼンテーションをまず行い、そのあと両国から質疑応答をするということを原則としたいと思います。あまり長くなってもいけないと思いますので、皆さん時間1人当たり3分に制限したいと思います。また3時ごろに「慰安婦」問題を終えて10分ほど休憩したいと思います。3時10分からまた1時間半ほど韓国と日本の文化の問題について討論を

する時間としたいと思います。そして最後に全体発言、過去、現在を超えて今後、未来どのような方向に向かうかというようなそういった全体的な発言をして今回のフォーラムを終えたいというふうに思っています。

脇田 では、韓国の側からまずプレゼンテーションをお願いします。

「慰安婦」問題、韓国の学生からの報告・提起

キム・ハラ こんにちは、「慰安婦」問題に関する発表をしますキム・ハラと申します。

先ほど開会の辞でもありましたが、韓国では"長い距離も第一歩から"という言葉があります。第一歩を踏み出したがために長い距離を歩けることができたということなのですが、このスタートは何より大切だということでもあります。この場に集まったわれわれが、過去の問題、そして未来の問題について悩むというのは、その長い道を歩むための第一歩だと思います。たくさんの方を悩み、たくさんの方を学べるような場にしたいと思います。きょうの討論に先立ちまして、昨日の会議においておたがいの、韓日の見解について話し合いました。この「慰安婦」分科会では韓国側が準備した発表に基づいて話しました。日韓双方の話について簡単にご報告申し上げます。

韓国側の発表文は、問題点と解決方策、そしてそれを通じて最終的に解決したい目標について話しました。問題点は「慰安婦」という問題自体について、そして韓日両国のもつ問題点、そして日本のアジア女性基金や韓国の挺対協に代表される市民レベルでの取り組みの問題点について指摘しました。この「慰安婦」の問題自体について申し上げますと、まず嘘による募集をした、そして人権に対して人権蹂躪をしたということ、そして本国に送り返さず戦後も、そしてその後かれらに対してまったく何の待遇もなかったということにあります。

日韓両国の国家的レベルでの問題点について申し上げますと、この国家間の取り組みは失敗したと思います。日本はこの65年当時の日韓交渉によって補償済みだという立場をとっております。これ以上の責任はないと

というのが日本政府の立場だと思っておりますが、韓国の場合は韓日交渉当時、この政治経済的な環境によって国家対国家によって円借款というかたちで補償されたということになっております。（*注）国に対しての補償はこれ以上要求できない状況になりました。これらの点は問題だと指摘をしました。

では、市民レベルでの取り組みについて申し上げます。韓国の挺対協は韓国国内で「慰安婦」問題を取り扱っている最大の団体であります。しかし、アジア女性基金からのお見舞金をいただいた女性に対して政府の支援を禁止したり、また個人の生活にあまり関心をもたず、その事業にのみ専念したということで、当初の目的意識が逸れているのではないかと思います。また、最も議論が活発だった点がアジア女性基金の目的性です。ですから、日本の学生は国家と社会は分離できない、アジア女性基金の取り組み自体は大変肯定的に評価できるという立場を表明しました。しかし、韓国側は、韓国人が日本政府に問いかけるのは法律的な責任をまずしっかりしてもらいたいということでした。問題はこれにとどまらず、それを通じて日本社会がこれについて道義的責任感を感じ、教育などを通じてその真相究明を行い、2度とこのようなことが起こらないようにするのが最終的な目的だと私たちは指摘しました。アジア女性基金の問題点のなかの1つは、このような責任がどこにあるのかとはっきりしなかったということだと思います。また、法律で公的な責任を曖昧化したというのが、アジア女性基金の問題点だと私たちは指摘しました。

常識的に、自国の政府が責任を負いたくないという問題に対して、国民が問題意識をもつというのはことはたやすいことではありません。1億以上の日本人のなかで、そこに募金をした人はあまりたくさんおりませんでしたし、その大部分が公務員による募金だったというふうに聞いております。国民基金形式ではなく、被害者がかわいそうだからという同情による考えで募金が行われたと私たちは認識しております。これに対して、本人たちが過去に過ちを犯したというよりは、そういう認識よりは、ただかわいそうだからということで集まった募金だということで、限界があると思

* 日韓請求権・経済協力協定(1965) 無償・有償経済協力からなる。
韓国政府はその後、無償経済協力(3億ドル)によって旧日本軍人・軍属の死亡者、財産等に対して「国内補償」を行なっている。

います。

「慰安婦」問題が浮上して10年以上経ちましたが、すでにもう忘れ去られている問題になりつつあります。日本の学生から話を聞いても、1992年、93年ぐらいに一挙に盛り上がった社会的問題だというふうな指摘がありました。このアジア女性基金が日本国内で国際的な圧力により国際的に見せるための手段であり、なんらかの罪隠し、免罪符にしかならなかったというふうに見ております。ですからこれについてはもう少し議論したいと思っております。

真相究明と補償、人の連帯と教育で解決したい

次に、われわれの目標は大きく2つなのですが、まず真相究明を行い金銭的な補償を含む国家の賠償が必要だと思えますし、この性奴隷という制度に対して責任を負わなくてはならない人々たちに対して、どのような刑事的責任を負うことができるのかということです。これは日本人のみならず「慰安婦」動員に関係した韓国人までを含みます。日韓両国ともに第2のこのような犯罪が起きないようにしたいがための責任であります。

われわれが提示した解決方策は、大きく2つになります。まず最初に、市民社会を通じた教育です。ですから、国民に対して教育を行い、また国境を越えた市民社会が連帯することによって、日韓の学生が国境を越えたということで提起においていろいろ議論をしたんですが、この連帯というのは、国連のような国際機構ではないということを申し上げます。この国境を越えた市民社会的な連帯を意味します。国家の問題として忘れ去られるのではなく、フィリピン、台湾、インドネシアのような被害国がそれぞれ自発的な連帯を結ぶことによって人権問題として解決したいというのがわれわれの考えであります。

また私どもは、この「慰安婦」問題においてわれわれが提示した教育という問題、そして国家を超えた連帯という方法と、国家的補償と刑事責任を問うということがまったく分離された問題だとは思っておりません。これは相互作用を通じてより大きなシナジー（相乗）効果を得ることができ

ると思いますし、また市民に対する教育を通じて法律的な制度をつくって、この法律的判断を踏まえてまた教育ができるということがあると思いますので、相互作用があると思います。また、このように相互に接近したいと思います。目標ですとか、目標についてはより日韓双方の取り組み、努力が必要だと思います。以上です。

クォン・ユソン はい、ありがとうございます。では、これに対して議論を整備していただく日本側の発表をお願いいたします。

過去・「慰安婦」問題、日本の学生からの報告・提起

吉濱 初めまして。皆さんこんにちは。私は日本側から、過去（問題）の視点をお伝えします、吉濱しずかと申します。先ほどキム・ハラさんから昨日のディスカッションについてのお話しいただきました。私はこれからここで話し合っていく論点を簡潔に述べたいと思います。

まず「従軍慰安婦」とは、第二次世界大戦中に日本軍の慰安所に集められ、将兵に対する性的な行為を強制された女性たちのことを指します。また日本はこれに対してどのような対策を取ってきたかという点、日韓条約・請求権協定が1965年に結ばれましたが、日本政府はこれによって解決をしたと見解を示しました。しかしながら1990年代に入り、韓国では「従軍慰安婦」問題が表面化しました。そしてこれに対して、1993年に河野官房長官の談話がありました。このなかで日本政府のこういった対応がとられたかと言うと、まず、日本政府が「従軍慰安婦」問題に関与したということを認めました。そして、そこに強制性があったということも認めました。またその点において人権蹂躪もあったということも認めました。そして翌年1994年に、村山政権下においてアジア女性基金が設立されました。しかしアジア女性基金というのは韓国側からの理解をあまり得られませんでしたし、日本の国内からも反対がありました。

次に、私たちここにいる日本の学生としての「従軍慰安婦」問題についての姿勢を少し述べたいと思います。「従軍慰安婦」問題というのは日本が過去に行った恥ずべき行為だと思っております。また、戦後の日本がとつ

てきた対策にはまた別のアプローチ方法もあったのではないかという視点をとっています。ですので、「従軍慰安婦」問題については決して評価をするといった姿勢ではないことを皆さんに理解していただきたいと思います。

また、論点について4点ほど述べたいと思います。まず、これまで私たちが受けてきた日本の教育というのはどういうものかについてお話ししたいと思います。私たちは学校において教育を受けてきましたが、日本の学校では検定教科書というのを使います。その検定教科書には「従軍慰安婦」問題ですとか、第二次世界大戦中の侵略戦争の記述については、韓国や他の東アジア諸国の記述に対して非常に少ないと言えます。また、家庭においては私たちの両親の世代がそういった教育を受けていないことから、家庭においてはほとんどそういった話題に触れることはありません。つまり、私たちは日本の教育においては知る機会が本当に少ないということが言えます。

次に、今後どのように私たちが歴史を認識していくべきかという基本のスタンスをお伝えしたいと思います。まず基本のスタンスとしては、私たちは日本人であり、また皆さんが韓国人であるという一人の国民としてという基本のスタンスを捨てることはできないと思います。しかし必要なのは、それだけではなく私たちは一人の市民であるということ、一人の市民として歴史を認識していこうという基本のスタンスを取りたいと思っています。そのうえで私たちは、まず日本が加害者であることを認識していこうと思います。これは市民のレベルで忘れないで語り継いでいこうという努力が必要だと考えております。また、日本や韓国、他の東アジア諸国とも歴史に対する共通項をもとうという姿勢が大事だと思います。これについては、歴史の共同研究や真相究明といった努力が必要になってくるでしょう。そして、私たちは加害者である事実を受け止め、対話を通じ相互理解を深めたいと思います。

次に、アジア女性基金についての評価をしたいと思います。アジア女性基金については賛否両論あります。アジア女性基金からの償い金を受け取った人が、「従軍慰安婦」の方々がいたとされる人数よりも少ないという

デメリットはあります。しかし、私たちはアジア女性基金という基金、団体がやっている事業については行動することが大事だという評価をしたいと思います。また韓国の国内には償い金を受け取った人に対する非難が生じるなど混乱を生じさせました。しかしながら、このような今回の機会を設けてくださったのがアジア女性基金であり、私たち日本、韓国の学生がこういった問題を考える機会を与えてくださったことは非常に建設的であり、高い評価をしたいと思います。またこのことは今後も続けていってほしいことだと願っております。

知る・理解しようとする・発信する

最後に、今後の方向づけについてお話ししたいと思います。今後の方向づけ、解決策についてはアプローチの方法がいくつかあると思います。それは国家レベルであるとか、アジア女性基金などの団体、またはNGOなどの団体、そういったものからのアプローチ、そして地球市民社会として私たち個人1人1人ができること、そういったものがあると思います。そして、私たちは特にここで強調したいのが、私たち1人1人にできるということです。この点において私たちは、日本側から1つ提案をしたいと思っています。私たちにできることというのが自発的に知る、想像する、発信するということです。つまり"keep on running, imaging and action"です。つまり相手の歴史を知り、相手の立場になって考える、そして自分が得た情報を周りの人に向けて発信するということです。これを具体的にどういうふうにするかは、この場で皆さんとお話ししたいと思っております。以上です。

脇田 ありがとうございます。それでは、韓国側の発表を踏まえて私たち日本側が提示した論点に沿って議論を進めていくということでよろしいでしょうか。

クオン・ユソン はい、昨日の討論に続きまして、同じ方法でいまの2つの発表について、それぞれの意見を自由に発表する時間にしたいと思います。論点はそれぞれ日韓双方がまとめてくださいましたので、自分の分

科会とは関係なく自分の意見を発言していただきたいと思います。

脇田 それではまず、私たち日本人、そして韓国の社会においていかなる歴史教育を受けてきたのかを具体的に皆さんに議論していただきたいと思います。

私が発言させていただきますけれども、吉濱さんの発表にありましたとおり、やはり日本の学校教育において、それこそ「慰安婦」問題はまったくというか、あまり触れられていないと思います。歴史教科書を見てみても、「慰安婦」問題があったという簡単な記述に終わってしまって、「慰安婦」問題というものが実際どういう問題であったのかというのが詳細に語られていない。それが私たちが「慰安婦」問題というものを反省的に進めることを阻害している原因だと思うのですね。さらには、やはり扶桑社の「新しい歴史教科書」におけるような反動的、非友好的な主張というのもあり、それが韓国側に批判的に取られてしまうと、そこに日韓の溝ができていくのが現状だと思います。

歴史教科書、日韓の違い

ムン・ウンヨン それではそれについて、この歴史教科書について、今後どう進めるべきだと思っていらっしゃいますか。

脇田 歴史教科書が実際にあるというのは事実なんですけれども、それが幅広く日本の社会において受け入れられている教科書ではないということ、まず主張したいと思います。ですから、そういった主張を、私たち力をもって押しつぶしてしまうということは、それ自体やはり思想の自由に反することであって、それはやってはならないことですよ。ですから、そういった主張もあるということ踏まえたくて、他方でやはり「慰安婦」問題を反省的に見つめる主張があるんだと。それには妥当性があるんだということを私、市民社会のレベルにおいて、さらには国家教育のレベルにおいて行わなければならないなと思いますね。

じゃあ、聞きたいんですけども、韓国側の教育というのは、実際これまでどのようななされてきたのですか。

ムン・ウンヨン はい、それは昨日もお話ししたと思うんですけども、教科書には詳細が記述されています。もちろん韓国では1つの教科書しかありませんから、被害者側の立場が大いに反映されているとは言えますけれども、とにかく歴史的な客観的な事実を記述してあり、そういったことも学んでいます。もちろん被害者側としてのところも多いでしょう。まったく習わなかったということではないということを強調したいと思います。そういった歴史的な事実については習っているということです。

脇田 教育のレベルではそういったことがなされているということですが、例えば、家庭のレベルにおいて、戦争を体験したおじいさんおばあさんからその「慰安婦」問題についてのことを聞くということはあるのでしょうか。「慰安婦」問題に限らなくていいんです。戦争についてのお話、聞くことができるのでしょうか。

ムン・ウンヨン はい、「慰安婦」が多いケースではありません。ですから私の場合、直接「慰安婦」の話聞いたことはありませんけれども、戦争の話、避難したお話、つまり祖父の代はみな経験していたので、私たちはすべてそれを聞かされて育ったというふうに思っています。

思想の自由ですか、歴史事実は？

キム・ハラ それから、先ほど教科書の問題が出たんですけども、教科書を採択するのは採択の問題であり、思想の自由だというお話があったんですけども、私たちが問題視しているのは思想の自由ではなく、真実を教えていないという点を指摘したいと思います。その思想の自由がもちろん真実のうえにあるわけではないわけですね、ですから、それは選択の問題ではないと思います。教えなくてはいけないことを、教えなくてはいけないということです。

脇田 それはもっともだと思うんですけども、しかしながら、韓国側の発表に真相究明をしなければならないという主張があったんですが、僕もそれは真相究明しなければならないと思うのですよ、でも実際に、歴史というものが単一的に、これが本当の真理だというふうに見つかるものな

んですかね、そこにはやはり解釈の幅というものがあって、例えば「慰安婦」問題は駄目だったのでしょうか、「慰安婦」問題は、でも「新しい歴史教科書」のように「慰安婦」問題を肯定的にとらえる意見というものもやはり生じてしまうものじゃないかと思うんですけどね。

キム・ハラ それでしたら、果たして真理はなんだと思いますか。日本の歴史が真理ですか、韓国の歴史が真理だと思うんですか。その違いを狭めるためにきょうのこの場があるんじゃないでしょうか。そのためにわれわれが努力するのであって、それが真偽のほどを定めるとかそういったことではないと思うんですが。

シン・ヒソク それぞれ自分の意見が違うと思うんですけれども、とにかく問題は、例えば日本の場合ですと「慰安婦」の問題について一部の政治家の発言を聞きますと、果たして問題視しているのか、問題意識があるのかというふうに感じてしまうこともあります。ですから、もちろん人によって歴史認識が違うとは思いますが、その責任のあるそういった社会的地位のある人々、われわれ大学生もですね、今後のリーダーになるわけですから責任があると思うんですけれども、そういった人々がもつ歴史認識がある程度のレベルにならなくてははいけないと思います。そういった意味で話し合おうというのだと思います。

脇田 僕が「新しい歴史教科書」のような意見をもっているというわけではまずなくて、もっとも市民社会で日韓の学生のあいだで議論する必要がある点だというのは全体的にあるだろうと思っています。

杉本 ちょっといいですか。いまそちら脇田さんのほうとキム・ハラさんのほう、いま聞いていて思ったんですけど、そちらの人たちというのは韓国のキム・ハラさんもそうだし脇田さんもそうなんですけれども、韓国の教科書とか日本の教科書、いま翻訳されたものが出版されていると思うんですけれども、特に日本の扶桑社の「新しい歴史教科書」いま第2版ということで出ていますけれども、そちらのほうは読んだことはありますか。

脇田 ないですね。

杉本 キム・ハラさんはどうですか、ないですか。

キム・ハラ はい、私もありません。

杉本 私が学校の教職課程のほうで社会科の免許をいま取っているところなんです。そうすると、どうしても使うのがこういう歴史教科書と、現場のレベルでの話なんですけれども、それでこの話出てきますよね、歴史の問題。やっぱり日本の教科書、中国の教科書、韓国の教科書、いろいろそういう問題がやっぱり出てきます。それで、日本の扶桑社の教科書なんですけれども読みました、僕も。すごいんですよ、書いてること。最初神話から始まるんですよ。第1版の教科書というのがすごい量の神話だったんですね。それでやはりそれはちょっと文部科学省から文句がついたそうです。第2版ではそれが減りました。と言っても、4ページぐらいあったかな、それでも最初。でも、すごいんですよ。最初はすごいんだけど、日本人だってあれ読んだら驚きますよ、多分。

受験向きになっている日本の教科書

いちばん重い現代史、近代史ですね。その時代のところを見たら文脈がおかしいですよ。だって、あの人たちはもともといま言ったような偏った考え方。皆さんこの前靖国神社に行ったかと思いますが、そこでの主張はアジアを解放するための戦争と書いてあるわけです。ただ、それでは歴史的な、客観的な事実と違うということで文部科学省に検定委員会というものがあるんですね。そこで日本の歴史学者たち、政治学者も混ざっていますけれども、そこのなかで話し合っただけでもこれは客観的に違うという部分は、そこは訂正しているんですよ。だから扶桑社が書きたかったことというのと、それを直したものの、だから言っていることが急に方向が変わっちゃうんですよ。それまではどんだんアジアの人たちにこんなことをしてあげたと書いてあるのに、いきなり最後、でも多大な苦しみを与えた、どっちが言いたいのかというような変な教科書に見えるんですよ。

もう1つあるのは日本の教科書、それが主に日本の場合ですけど、受験

用にできているということ。いちばん主に使われるのは山川出版社というところの教科書です。ここの教科書は本当に、日本の大学受験向きです。韓国の皆さん日本よりもっと大変な大学受験をくぐり抜けてきているわけですが、それ以上に本当に歴史を教えようという教科書ではないと思うんですね、あれは。いかに大学に受かるか。だから出る部分だけ書いてある、そういう感じですね。だから細かい理由は書いていません、客観的な事実としてこういうことがあったとは書いてあります。ですので、1度いま思ってたんですが、なかなか皆さん議論が感情的ではないですけれども、言い合いになって水掛け論になっていると思うんですね。まずは1度読んでみてください。それが私の意見です。

脇田 ありがとうございます、今度ぜひ読んでみたいと思います。ほかの韓国の方、なにか意見、どうぞ。

ノ・ヨンレ 私が進行上ちょっと申し上げたいんですけれども、日本の「慰安婦」の問題と歴史の問題を論ずるためには、日本語からまず学んで、それから教科書を読みたいと思うんですけれども、議論は1対全員とか、そういうふうになっては困ります。ですから、なるべくならさまざまな観点から議論ができればと思います。まだかなりの方が緊張なさっているようですけれども、ちょっと楽な気持ちで議論していただきたいと思います。最初お話ししたように、簡単ではありますけれども、「慰安婦」の問題は感情的な部分もあり、そして過去のところもだいぶありますので、客観的な観点から冷静に議論していただきたいと思います。

イ・ヒョンソン 一言私申し上げたいんですけれども、もし過去にわれわれが住んでいたとすれば、この問題も多分なかったのではないかと思います。人種、性、それから階級がいまなくなりつつありますが、加害者の立場を明らかにした日本が努力している姿は韓国でもいろいろ感じるころがあります。先ほどわれわれも日本の教科書を実際に見ることはできませんでした。両国の歴史に対する認識は違うと思います。人間、人が動物と違うところは考えることができ、理性的に活動ができるということです。

いまの社会はすべてネットワークでつながっています。だれもがイン

ターネットが使えますし、インターネットに入れば韓国の「慰安婦」について日本語で検索しても、韓国で検索しても「慰安婦」1つを検索すればさまざまなサイトが出ています。韓国の学生は教科書だけではなく、そのような「慰安婦」のサイトに入って、いまも生存している「慰安婦」ですとか、またはもう故人になった方々の写真を見ながら彼女たちが自分の気持ちを正直に表現している文章も読んでみたことがあります。ですから、皆さんも必ず1回はそういったものを見ていただきたいと思います。

キム・ミンジュ　いま教科書問題の話から出ているわけですが、加害者の立場、被害者の立場を離れて、教科書がどのような観点からつくられたかといったことから、重要なのは中立的な立場、つまり両国が真相を明らかにしようというのが大切だと思います。ですから、われわれの望むところはグローバルガバナンス、つまり被害国、加害国がともにそれに対して真相を究明することになれば、それがある程度おたがいの感情の問題ではなく事実に基づいた資料をともにつくことができる、それが大切だと思います。

それからこの問題を受け入れるにあたって先ほども話が出ましたが、日本政府がこの事実を認め、そして人権蹂躪だとか、被害に対して認めましたね。そして、日本政府や多くの人々の考えは、だから責任を全うしたんではないかという議論だったと思うんですけども、われわれが問題提起したいのは、そういう事実を認めるだけではなく、法的責任も認めてほしいというものです。その行為自体についてそれがあつたと、そういう行為をしたということを認めるだけではこれまでのこと、または今後われわれが作り出す未来について何ら役に立たないと思います。

「慰安婦」の事実と責任、共通認識を

ですから、お話しなさったようにそれがもう超国家的な方法であれ、ほかの方法であれ、そのような問題について共通認識をもち、そして責任をしっかりと認識するのが最も重要な問題だと思います。ですから、教育については先ほど話が出ましたし、歴史観についてもさまざまな意識があると

いうふうな話も出ましたけれども、それは責任があるということをすべての人が認識しないからこういった問題が出てきたと思います。「慰安婦」は存在していたわけですし、その事実を認識するだけではなく、その責任に対する全体的な共通認識がないからこういう問題があるわけですね。ある程度国の立場からそういったものが歴史の教科書に、昨日も民族主義の話が出ましたけれども、そういった教科書にそういった問題が出ているので、解決がよりむずかしくなっているんだと思います。

脇田 拡散してきているようなので、ちょっとまとめたいと思うんですけども、まずはじめ、僕が日本の教育はどんな教育、これまでどのような教育が行われてきましたかということを論点として提示したんですが、それがいまだのようにこれから日本、韓国が歴史認識を共通化していくかという議論になっていると思います。日本側から何かないですか、ちょっと落ち込まれているんですけど、はい。

唐木 落ち込んでおられません、元気です。(笑) まず皆さんに提案したのですが、発言するときは手を挙げましょう、誰の発言かわかりませんので、お願いします。

まず、私が考えてほしいと思うのは、自分の国の教育であるとか、自分が教わってきたことがすべて正しいと思わないでほしいということです。私もそうですし、皆さんもたぶんそうだと思います。今回このように、みんなであって話したことで初めてわかったことってすごく多いと思います。私は韓国の方は「従軍慰安婦」問題についてはみんなすごい知識をもっていて、本当に問題視しているのだとばかり思っていました。しかし、昨日の議論ではそういう人ばかりではない、むしろ少ないということを知って、ああそうなのだと初めて知りました。ですから、あまりにも私たちは相手を知らなすぎる。だからもっと知らなければいけない。知るためには自分の固定観念を捨て去って、もっと知ろうという、意欲的に知ろう、それを自分のなかで解釈しようとする努力が必要だと思います。だから、どれが正しいではなくて、いろんなことを知ることが必要だと思います。

脇田 歴史一般について思うんですけども、歴史って完全に客観的な

ものでないし、しかし客観的な真理というものによって1つに定まるものでもないし、また完全に主観的なものでもないと思うのですね。だから、イデオロギーとかナショナリズムとか、そういったものによって完全に規定されてしまうものでもないと思うのですよ。それはやはり過去の、現在残っている歴史資料との現在のわれわれの対話であって、そのなかで自分を相対化して見つめ直して、どういう歴史解釈をすべきなのかということとを不断に続けていく作業だと思うんですね。それはやはり、われわれの主観が客観的な資料のなかに介入するわけであって、そこでわれわれはいつたいどういう社会をつくっていけばいいのかっていうことを考えなければならぬと思うのですよ。

例えば、「新しい歴史教科書」みたいな解釈がありますけれども、あれは日本をナショナリズムに染めてしまえばいいんだという、そういう主観ですよ。でも、それは実際日本にとって本当にためになるんですかね。そうでなくてやはりわれわれはいわゆるグローバリゼーションって言われる国際化が進んでいる社会の中で日韓双方協調していかなければならない。だから現在残っている客観的な資料というものを仲介して、日本側の社会における主観と、韓国側の社会における主観というものをつき合わせておたがい対話をして、そして共通の歴史認識というものを見出さなければならぬと思うのですよ。

そこでたぶん、いま現在日本の社会と韓国社会にある歴史認識の違いというものの、なんか原因があると思うのですよ。例えば、日本の中ではこれまで歴史認識のなかに自分たちは被害者だ、ノーモア広島みたいな、そういう認識がやはり強かったなと思う。そこには自分たちは加害者だという認識が必ずしもはたらいてこなかった、そこに僕は原因があると思いますね。何かそれについてあれば。

客観的な事実調査、真相究明と補償問題

シン・ヒソク 私も歴史問題について主観的に考えるケースがあるんですね。私の考えは、もちろん主観的な見方もあるでしょうけれども、歴史

には客観的な事実、そういった資料、証言、証拠、それをベースにしなければいけないと思うのですね。「慰安婦」問題においても50年前の出来事で、これについての調査があまりされてこなかったわけですが、1990年代になってようやく明るみに出たわけですが、これについてさまざまな真相究明というものが不足していたのではないかと考えるわけです。

アジア女性基金の方とお話ししながらそのなかで1つ私が考えたのは、アジア女性基金でこうした償い金といった名目でお金を渡してきたわけですが、当時国家賠償というものがないという現実から出てきたものだと思うのですね。いろいろ妥協というものがあると思いますが、真実、和解というのは一種の妥協ですが、これを通じてある程度過去の歴史に対する再検証が行われたわけですね。アジア女性基金の場合には、当時日本政府が公式に過去に対してどのように今後真相究明していくかということについてはあまり言及されなかった。もちろんNGO、学者、個別的にいろいろと研究もされたと思いますが、個人の意見と国家レベルでのそういった報告書とか、そういった研究には違いがあると思うんですね。被害者の補償という問題、国家賠償という点についても、そういったところからさまざまな問題が生じてきたと考えるわけです。

野田 話として原点に戻ることが必要だと思います。まず、私が1つ言えると思っていることは、被害者、加害者という立場、または韓国に生まれる、日本に生まれるという立場もあると思うんですが、おたがいが協力してパートナーシップを進めていって問題を解決する、おたがいに協力をしていく姿勢で臨んでいくのが大事だと思います。いろいろ硬い話もあるんですが、まず、私たちはいろんなことを知ることが大切だと思います。

私はジェンダーについてずっと研究をしているんですが、「慰安婦」問題を口に出すことが必ずしもまわりでよく思われないことも多いんですね。性的搾取ですとか、口に出すことがタブーであったというのが日韓両方にあると思います。そのために問題化、表面化するのに時間がかかったというのも問題ですし、また語り継いでいくうえでも、知らされなかった事実

が私たちにはとても多いと思います。だからまずいろいろな知識を知って、それで双方で協力して問題解決にいく道がいちばん有効的だと思います。以上です。

クオン・ユソン いい指摘だったと思います。幅広い論議をわれわれはしているわけですが、そういった論議を通じてこの間、受けてきた教育、そしてまたこの問題をどのように見ているか、それについて十分に知る時間がもてたと思います。先ほどご指摘あったように、これをどのように解決していくか。それを昨日の議論をまとめながら市民社会、あるいは国家ではない個々人の努力による、そういった解決策についていろいろお話があったと思います。それについてもう少し討論をしたいというふうに思います。

「慰安婦」被害者の現実の生活を認識することから

チェ・ジャンホ あまりにも過去に執着される傾向があると思うんですけども、いまでも「慰安婦」の方々は生きておられるんですね。われわれが探るべきは、現実立って、現実からそういった解決策を求めなければいけないと思います。韓国の場合、特にアジア女性基金といったそういった基金で謝罪金をもらった人たちが非常に差別されたり、攻撃されたりする傾向があったわけですね。日本の場合、これまで過去について日本政府に対する不信、そういったものがあると思うんですね。韓国人もそれについて非常に憂慮していると。社会的な影響を離れていったん、現在まだ生きてらっしゃるおばあさんたちの平穏な余生のために、われわれはまず努力しなければいけないんじゃないでしょうか。先ほどのお話に1つ付け加えたいと思うんですが、日本の市民はいま、韓国人を被害を受けた女性たちの現実の生活に対してどの程度認識をしているかというのを知りたいんですけども、いかがでしょうか。

脇田 私、昨年度「慰安婦」問題についてのゼミに所属して、それについて「ハルモニの家」(分かち合いの家)というのが韓国にあるそうなんですけれども、そこに出向いた方のお話を聞くことができまして、

かつて「慰安婦」であった方はやはり現在貧しい生活をしていると聞きました。だからこそアジア女性基金において、自分たちお金がほしいんだとおっしゃったと聞いております。ですから、貧しい生活をしている、そしてかつて青春を奪われたことに対して心の傷を抱えている、その「慰安婦」に対してなんらかの現在における救済、…救済というところちょっと言葉が悪いですが、なんらかの助けができればなと思いますね。

シン・ヒソク これまでの話のなかで「慰安婦」問題を日韓問題ではなく、おばあちゃんたち個人の問題としてとらえるという話もありましたけれども、1つ申し上げたいのは、被害者が何を求められているかについて考える必要があると思います、個人の立場から。もしレイプされた被害者がいる。非常に苦しい生活をしている。そうした場合、状況で、加害者、あるいはそういった側に立つ人が被害者に対して一定の補償をすると。ですから告訴を取り下げてくれと。そういうことが果たして被害者が求めるやり方だろうか。被害者の求める方向であろうかということを考えてみました。

レイプというのが、非常に重大な犯罪であるのは確かなわけですね。それは親告罪となっているのは、日本と韓国しかない。そういったことを考えると、もちろんいま生活しているそういった被害者の皆さんに支援金をお渡しするというのも大事だと思いますけれども、それによって心理的に、それを免罪符とするということがあってはならない、そうなりはしないかという懸念があるわけですね。彼女たちのためには、もちろんそういった生活支援も必要ですが、それ以上に彼女たちが望む、傷をいやすための手段は何かがあるか、真相究明ですとかそういったものが自らの経験を多くの人に知らしめて、多くの人がそれについて認識をもつと、そういったことが必要ではないかと私は考えました。

野田 自分たちの立場に立って、もしレイプの被害にあった方はどうなるんだろうというふうに考えたときに、やっぱりお金で解決するものでもなく、その後の誠意を見せ続けてもらうことだとか、もっと違うところから見ていったほうがいいというのがありました。以上です。

小宮 すみません、ありがとうございます。先ほど認識の問題に差があるとおっしゃいましたが、私も認識の違いというのが問題になっていると思います。実際日本国内でも日本人1人1人の考える「慰安婦」問題というのは違うと思いますし、よくわからないのですが、韓国人が1人1人考える「慰安婦」問題というものも違うと思うんですね。それで先ほど出たように、教科書というのも1人か2、3人の方が書いているもので、私はそれが1冊の、それも固定観念だと思うんです。ですので、いま日本では「慰安婦」問題を知るっていう機会は、教科書で与えられる影響っていうのもあると思いますが、いま日本では実際に「慰安婦」の方からお話を聞く機会もありますし、実際に大学のサークルやゼミなどで韓国に行って「慰安婦」問題を勉強するサークルもあります。ですので、そういう認識というのがまず第1の大きな問題になると思いますし、先ほど吉濱さんがプレゼンテーションで話していたように、自発的な1人1人の行動による認識が必要だと思います。以上です。

高木 被害を受けたおばあさんたちにできることというのは、僕は2つあると考えています。1つは国民としてできること、そしてもう1つは市民として、個人としてできることだと思います。

その1つ目の国民としてできることというのは、僕たち日本の国民も韓国の国民もそれぞれの国の政府に対して、おばあさんたちに対する補償やできることをもっとないのかということや常を訴え続けていくということ。そしてもう1つ市民として、個人としてできるというのは、この「慰安婦」問題というこの事実を絶対に風化させずに記憶し続けていくことだと考えています。

個人・市民として記憶し、二度と繰り返さないこと

2つ目のほうが僕はより重要だと考えています。やはり被害を受けたおばあさんたちのいちばんの願いは、2度と自分たちのような存在を生んではならないということに凝縮されていると思います。ですから、僕たちはやはり市民として、個人としてこの問題を2度と起こさないように、どの

ようにとらえて、そして行動していくのか、そして風化させないように記憶し続けていくのかということに対して、もっと真剣に考えていかなければならないと思っています。

クオン・ユソン 議論が続いておりますが、先ほど申し上げたように、認識の開きについてかなりたくさんの方のことを考えさせるきっかけになりました。個人的、そして市民レベルでの解決策を今後ともに探してみようという話が出ましたが、これは先ほどイー・ウォヌン先生もおっしゃったように、過去は失敗したとおっしゃいました。成功な解決へのためにはこれまでを振り返り、これに基づいてどのような共通の取り組みがあるのかについて考えてみたいと思います。

先ほどレイプの話が出ましたが、アジア女性基金の努力、そして韓国の市民社会での取り組みについてどのような努力があり、またこれを今後どのようなかたちでつなげていけるかについてお話しをしたいと思います。発表されたい方どうぞ。

日韓の市民連帯で対処、歴史博物館も

チョン・ダフン はい、私も先ほど理（高木）さんがおっしゃったことに賛成です。教科書問題の場合は、この前APECの際にも東アジアの共同研究模索ということで会議がありました。また未来を開く日中間の教科書に対するの評価もあったと思います。

問題になるのはここで、実際にこの教科書がどれだけ政府の同意を得て現場で使われるのかというのが問題になると思います。また先ほど理さんがおっしゃったように、現在この「慰安婦」問題で元「慰安婦」の方たちが「水曜集会」（ソウル日本大使館前）というのをいまもやっているんですが、そこでいつも心配されているのは、いつかは自分たちは死んでしまうのだがそのときになって自分たちの歴史がなくなってしまう、忘れ去られてしまうことについて懸念されています。市民団体からの取り組みも必要ですが、先ほどシンさんがおっしゃったように、対策として日韓問題対策委員会のようなものを設けて共通の連帯をつくりたいというご提示もあり

ましたし、また歴史的な証言を残すために日韓が共通で博物館のようなものを設立すればいいと思います。現在早稲田大学の近くにそういう博物館があるとうかがっておりますが、今回行けませんでした。早稲田に通っている皆さま方にもおうかがいしたいんですが、誰も知らないということでした。それについて私は韓国もそうですし、日本もそうですし、認識がまだきちんとしていないなと思いました。市民の連帯としておたがいに協力しあいながら努力をし続ける必要があると思いました。以上です。

クオン・ユソン はい、発言される方どうぞ。

吉濱 ありがとうございます。いまのチョン・ダフンさんのお話のように私も私たちにできることというのはとても必要だと思います。先ほどもずっと話していたのを聞いていると、ちょっとやるべきことが大きいものだなと私は感じました。それでももちろん、そういった政府を動かすとか、そういったものは必要なんですけども、高いところに行くためには、まず一步を踏み出そうって、さっきキム・ハラさんがおっしゃったように第一歩から。そういった意味で私たちにできることをもっと考えていきたいなと思います。そして私がいまもいっていることは、自分が考えたこととか、自分が得た情報を本当に仲のいい友達とか家族に話すこと、そういった本当に小さなことからでも始められると思うのですが、皆さんはどう思いますか。

まずできることは知る・人に伝えること

杉本 いま吉濱さんのおっしゃった意見にはかなり同感します。というのは、やはりいま皆さんがおっしゃったように、国というレベルの上からのトップダウンの方式だと、どうしてもみんなに浸透しないというのがあると思うんですね。さっき言ったように、いまアルバイトで高校生とか中学生に英語を教えているんですが、それをしゃべれないのに英語を教えているんですよ。(笑) まあそれはいいとしまして、そういうときに英語の授業なのに結構途中でこういう、2時間の授業のうちうっかり30分、全然関係ない話をしてしまうとか、そういうときがよくあるんです。そのなか

で聞いていると、これ今度この第2部の市民交流のほうのともちょっとかぶってしまうかもしれないんですが、どうしても韓国に対する意識というのがそもそもない。というのは、やっぱり学校で何も習わないし、わからないやと、たまにテレビで観ると反日のデモをやってるから怖い国なんだな。そういうふうになってしまう。

だからいま私たちができることは、いまさっき吉濱さんが言っていた身近な人に伝えていくこと、それだと思うんですね。あと、もしできるとすれば、中学校、高校の先生たちを対象にするセミナーのようなもの。特にいま社会の先生が日本でいちばん免許が多いんです、いちばん取りやすいから。だからペーパーライセンスをもっている先生がたくさんいます。その人たちが本当にいまいちわかってないんですよね。僕もちゃんとはわかってませんけれども、そういう人たちに対して、まずその人たちが理解できれば、そこから、その人たちは子どもたちに教えるという仕事をしているわけですから、そこから一気に広がって子どもたちのなかで、その勉強しようと思わなくても先生がそう言ってたなあとなんとなく意識のなかに根付くんじゃないかなと思います。その意味で、すごい身近な部分から広めていくという下からというのはすごく同感です、賛成します。

河西　いまの杉本さんのご意見ですが、実際に社会科の教員団体の方たちが集まって、もう1度歴史教育を見直そう、自分たちのやり方で教科書にはない教え方をしようというNGO的なグループは存在しているそうです、私がうかがった限りなんです。そのような意識も現在日本では起こってきていますし、またこのような機会を与えてくださったアジア女性基金の日韓の対話を重ねるといった交流会も、いま中学生、高校生が修学旅行で韓国や日本を訪れたり、そして意見交換をするという場は増えてきています。そのことについてもこれから今後続けていけばいいなと思っていますし、また8月15日や、終戦間際の時期になりますと、日本では戦争についてのドラマですとか、メディアのほうが騒いで結構な騒ぎになったりしてますよね。そのときに地方の団体が公民館なり図書館なりで子どもたち向けに戦争の話をする際に、「慰安婦」問題やこの日中韓の問題につい

てみんなで話しをしようという地方自治体ぐるみで小さなコミュニティーから始める歴史教育を再認識しようという場を設けてみるのもいいんじゃないかと思います。

シン・ヒソク 杉本さんと河西さんの意見に私も同感です。市民教育、市民レベルでの取り組みはたいへん重要だと思います。

ドイツの例をちょっと挙げてみたいと思います。たくさんの方が最近ではドイツが第二次世界大戦と関係したたいへん模範的な事例としてよく挙げられますが、実際はそこまでなったことについてニュールンベルク裁判ですとか戦犯裁判があったのでそれが可能だったと考える人が多いようです。しかし実際のドイツの歴史を見ますと、ドイツで起こった過去の再評価というのは1960年代、70年代に入ってからです。政府から始まったことではなく、下のレベルから。ですから、60年代に活発だった学生運動の人たちが歴史教師になったり社会科教師になってそういう問題を意識を持ち始めたわけです。また、歴史の評価というのは法廷ではできないことだと思います。私は、歴史的な裁判を通じて、事実がある程度確立されてガイドラインはできるということは確かですが、最終的には一般の市民が過去をいかに見るのかというのが最も重要だと思います。そういうことを踏まえますと、先ほどおっしゃったように、下からどんどん見方を変えていかななくてはならないと思います。そうしてこそ建設的な解決策を見出せると思います。

インターネットにも「慰安婦」情報はあ

パク・ミヒ 「慰安婦」問題を認識するさまざまな方法についてお話ができました。私は韓国ではインターネットをかなり活発に使っています。世論の形成ですとか、情報収集にたいへん活用されてます。1つの方法として考えたいのは、オンライン状態でインターネットを通じて情報を伝達したり、また有志によるインターネットカフェをつくってこういった「慰安婦」問題についてよりたくさんの方の情報を分かち合えるきっかけになるのではないかと思います、インターネットを通じて。こういうネットなどの手段を

活用するのもいい方法ではないでしょうか。

ムン・ウンヨン ちょっとおうかがいします。この認識が広がってほとんどの人がこの事実について知ることができたときに、その時点になったときにどのような方向にいけばいいと思いますか。そういう認識に基づいて、ほかの地域、東南アジア、例えばフィリピンとか、台湾とか、そういうところの人々とたぶん認識の共通化というのが必要だと思うんですが、そのあとにはどういう試みがあると、取り組みができると思いますか。

クォン・ユソン はい、それについてお答できる日本の方いらっしゃいませんでしょうか。

脇田 どういったことですか。逆に質問してしまってるんですが。

ムン・ウンヨン ですから、歴史に対する認識がいまだによくわかっていないので、そういう認識づくりのための取り組みについてお話しをしたんですが、ある程度そういう歴史的な認識が形成されたら、そのうえでどのような具体的なアクションが取れるのかということをおうかがいしたんです。

脇田 具体的なアクションというのは、そこに何か必要なんですかね。共通の。

シン・ヒソク 私が代わりにお答えしたいと思います。日本人ではないんですが、(笑) 私が考えるのは、この「慰安婦」問題については真相究明がされれば日本だけであることではないと思うんです。先ほど申し上げたように、この「慰安婦」問題は韓国も関与しています、韓国人の人もですね。ですから、それについてまったくまだお話しされていないのは遺憾です。またもし万が一こんなことはないと思いますが、もしも戦争がまた起こったということになりますと、そのときにはわれわれがどのように行動できるのかということがあると思います。

例えば、いまイラクでも戦争が起こっておりますし、今後もっと大きな戦争が起きるかもしれません。そういう状況で単純に戦争が悪いという認識を超えて、戦争に負けてはいけないとか、自分の国が負けたから駄目だとかではなくて、戦争でどんなことが起きて、どのような悪いことがあつ

たのかについて十分認識しなくてはなりません。それは韓国側でもやはり学ぶ点が多いと思うんです。韓国でも朝鮮戦争当時たくさんの民間人が虐殺されましたし、それ以降にも独裁政権のもとで人権蹂躪がありました。それがなぜできたのかを見ますと、やはり日本の植民地時代にあった人権蹂躪の、そういう経験ですとか「慰安婦」問題ですとか、そういうことです。七三一部隊のそういう経験などについてのまったくの反省がないまま新しい時代を迎えて、その結果がこの数十年間の歴史だと思うんです。そういうことを踏まえますと、私はこれはかなり暗い見方かもしれないのですが、こういう歴史を繰り返さないためにも歴史教育が必要だと思います。

認識の問題とこれからの解決策

キム・ハラ　いま認識の問題について議論して、私どもは研究してるんですが、これは日韓がこれまで問題を解決できなかったのは、この認識のずれにあるということから議論しているわけですね。いま日本と韓国の意見が違うのは、その認識を基にこれまでわれわれがもっていた問題、「慰安婦」問題のようなものを解決しようということであって、認識にとどまるものではありません。そういった意味で、質問させていただいたと思うんです。認識するのはもう当然のことだと思います。認識もなかったのでもういままでも問題が生じたということなので、認識にとどまるのではなく、さらにもっと進まなくてはいけない。ですから、日本がどのように問題を解決し、どこまでその解決策を考えているのか、それについて質問したんだと思います。それについてもう少し具体的にお話しをしていただきたいということでした。

脇田　歴史認識の問題に引き続きまして、アジア女性基金の問題というのがあると思うのですが、歴史を認識する場合に「慰安婦」問題でもどういふふうこれから認識していかなければならないかということもあるかと思うんです。他方で、やはり「慰安婦」問題という1つの社会問題に対して日本の1つの対応策としてアジア女性基金というのがつくられた、そ

れをどういうふうに考えるかということが必要だと思います。

国家賠償論とアジア女性基金

それについて僕の意見を述べたいと思うんですけども、韓国側からやっぱり国家賠償を求めるべきだという意見が往々にしてあったと思うんです。僕は国際法が専門なんですけれども、実際に法的解釈の面で、かつての条約を解釈して「慰安婦」に対して賠償を行うという結論には一義的にはいかないと思うのですね。法というのは実際にはすごくあいまいなものなんです。特に国際法も上位に政府が存在しないと。だから強制する権力もないし裁判所みたいにこれが1つの答だと宣言する権力もないと。だからやはりいろいろな解釈があるんですけども、そのなかでやはり「慰安婦」問題というものは必ずしも賠償しろという結論には至らないですね。ですから、そちら側の国家賠償を絶対的に求めるべきだというのは少しちょっと当を得ていないかなというふうに思うんです。かつ日本の政治的状况を見ても、やはりは依然保守勢力というのが強いし、また官僚的な意見としては国家賠償を行ってしまうとほかの強制労働問題であるとか、そういった問題に対して賠償しなければならないとなると。そうすると戦後賠償の枠組みというものが崩壊してしまうと。ですから、このアジア女性基金というのがつくられたと思うんですね。

唐木 韓国側からの国家的な国家賠償なり、あと真相究明なりという提案がなされていると思うんですけども、そういった解決方法というのが日本の風土にどれだけ馴染むかどうかという問題もあると思うんです。韓国社会では、いまの軍事政権下で起きた問題とか、そういった問題に対しても自分の国家のなかでいまの政府が、特にノ・ムヒョン政権下でそういうことに対しての真相究明なり、国家賠償なりが法律に基づいて行われているという、そういう現状があることはすごく評価できることだと思います。ただ、日本に関してはそういう解決方法が、まったくそういう経験などが政府としてないということも、解決方法に馴染みがない日本の学生から、そういう提案がなされないということの1つの理由であるとは思いま

す。

シン・ヒソク 私の意見申し上げますと、まずもちろん日本は民主主義国家なので、日本に司法の判断に対して政府が関与することはできないのは事実だと思うんですが、日本の司法府も政府と同じように国際法上の義務があるとすれば、その国際法上の義務、慣習に従わなくてはいけないと思います。

それから本当の問題は、だとすれば法的問題ではなく政治的な問題だと思うんですね。もちろん国家賠償、国家補償について現実的に不可能だ、果たしてどんな効果があるんだろうかといったように、さまざまな意見があると思います。もちろん市民団体でも主張がさまざまありますが、韓国では北朝鮮の人権に対して、私は市民団体の活動、NGOの団体活動をしてるんですが、いつも感じるのはNGOの役割と国の役割が違うと。影響力が違うわけですね。NGOもかなりの役割を果たすことはできますが、ある程度限界があります、それを常日頃感じているわけですけども。もちろん日本のNGOがこの「慰安婦」の真相究明ですとか、被害者のためにさまざまな努力をしてきたことについては十分知っていますし、それについても高く評価しています。ただ、国家賠償については、私は国家賠償が直ちには困難であっても、そのために目標を掲げておいて努力する必要はあるのではないかと思います。可能であれ不可能であれ、とにかく目標にして努力しなくてはいけないと思っています。

「基金」—市民社会の観点では評価

それから国家賠償の話が出ていますですけども、どのような意味で使っているのかわかりませんが、韓国側が使っている国家賠償というのは司法的に法的責任を認めるということを指します。ただ経済的なものではなくそういった行為を行った、それは誤った行動だった。だからそれに対して責任を感じている。それを政府が公式的に認めなくてはいけないんですけども、いまそうになっていないのでそれが問題だと思っているわけですね。ですから、アジア女性基金についての話と関連するんですけども、

アジア女性基金もその問題を解決するために市民社会の観点から行動したと話をしているということについては評価しているわけですね。ただ、被害者が何を望んでいるか、それに対して考慮をしていない、配慮がなかったと思います。ですから、韓国であれ日本であれ多くの支持を得られなかったと思います。このような国家賠償、そしてそれを認めること自体を目標に掲げることなく、例えば代案として市民教育を行えば、また目標がない行動なので支持を得られないと思います。そして問題の解決にもあまり役に立たないでしょう。

脇田 韓国側はやはり国家賠償を目標として、それに対して努力をしていくべきだという見解だと思うんですけども、それは国家と国家の解決であると思うんですよ。やはり本質的な問題は、現在青春を奪われて心の傷を抱えて、かつ貧しい生活を送っているおばあさんたちがいると。その被害者であるおばあさんたちをどのように助けるかどうだと思うんですね。そのおばあさんたちが本当に国家賠償というものを求めているのでしょうか、それが……。

シン・ヒソク おばあさんたちを代弁するわけではありませんが、現在補償、賠償が進められているケースが20ケースあります。終わったものもあるんですけども、彼女らの場合は、はっきり国家賠償を要求しております。そして亡くなったキム・ハクスン、初めて自分が「慰安婦」であると名乗り出たキム・ハクスンさんのような場合は、アジア女性基金ができたあと、韓国政府はアジア女性基金の支援金を受け取らないように約3000万ウォンずつ与えたわけですね。ただ、キム・ハクスンおばあちゃんはその3000万ウォンも拒否し、自分たちに対しては日本政府が自分たちの過ちを認め法的責任を認めてほしいと要求しながら亡くなっていき、そのほかのおばあちゃんたちも闘っているとうかがっています。

ノ・ヨンレ 多くの意見が出ましたが、韓国で「慰安婦」問題というのはとても特別な問題です。ある韓国の芸能人が「従軍慰安婦」のような姿でファッションショーのグラビア撮影をしたわけですね。それが大問題になって、おばあちゃんに膝まづいてお詫びをして、それがまたとても話題

になりました。こういったとてもデリケートな問題なんです。ですから、「慰安婦」のおばあちゃんに直接的間接的に会ってみますと、かつて自分たちが望まないところに連れて行かれレイプされ、そして望まない人生を送ったと。青春を奪われたと。いま70歳、80歳、そして死を目前にして金銭的に賠償要求しているんだらうかという問題があるわけですが、私個人的に自分のおばあちゃんが「慰安婦」だったわけでもありませんし、直接関わりはないわけですけど、韓国の国民として彼女たちにどうしてほしいという話をしているわけではなく、その暗い過去を韓国と日本が、そして「慰安婦」をはじめとするこの戦争につながっている国々がこの問題をどう解決していくかということがテーマになるべきだと思います。

基金をつくることも可能でしょうし、そして先ほど出たように、自分の地域、身近な人々にそういったことを話すこともできるでしょう。ただ、韓国側の意見としては教科書問題をはじめとするさまざまな日本の歴史の教育では、そういったことが行われなかったということですね。これを順次段階的に発展させていきたい、そうしたことをやっていきたいということです。10年後の日本の子ども、20年後の日本の子どもはこういった問題があったんだなということをしっかし認識し、そしてこういった問題が2度と起こらないようにしよう。そしてより発展した関係を築けるように、そういった方向で議論をすべきだと思います。

法的な責任、教育・広報で持続的解決を

キム・ハラ　　ですから、国家賠償というのが単なる金銭的な問題ではなく、問題を提供した日本が法的な責任の所在を明らかにするという事なんです。それから教育、広報を通じて持続的に解決してほしいというのがわれわれが望んでいる国家賠償です。ですから、われわれがアジア女性基金について言いたいのは、もう来年解体すると聞いたんですけども、結局解体されるのはわれわれが望んでいる国家賠償ではありません。その教育と広報という面で何もやっていないために私どもがそれを問題視しているわけで、金銭的なことだけを言っているわけではありません。われわ

れの胸が痛むのは「慰安婦」の苦痛にあふれた人生、そして植民地時代、そういったものがすべてが苦痛なんです。そういった認識がされていないということもまた苦痛です。そういったことをぜひ理解していただきたいと思います。

杉本 僕は法律が専門ではないので、ちょっとそこらへんの提起がいまいちわからなかったんですが、いま韓国の皆さんが言っていた国家賠償という言葉がありますよね。国家賠償はお金のことを意味するのではないと皆さんおっしゃっていましたが、それではその国家賠償という意味で日本の政府としての法的な責任とおっしゃっていましたが、そこでちょっと法律のところがいまいちゃわかってないんですが、いまそれこそアジア女性基金の村山富市さんが言ったと思うんですけども、彼が総理大臣だった時代に「村山談話」というのがあって、アジアに対する侵略をして、その他全部含めお詫びという言葉をつかったと思うんですね。それ以降日本の総理大臣はそれを踏襲して毎年8月になると、そういう発言をしている。ただ発言はしているけど行動はともなわない総理大臣が、いまだここにいますけれども、(笑)その人は僕にはどうしようもできないですけども、そういう言葉、日本の憲法上国家元首ということになっている総理大臣、これなかなか珍しいと思うんですけども、その総理大臣が発した言葉、これには、それとも法的というのは、例えば国会でそういう謝罪に対する法、全会一致、だいたいこういうのは全会一致になると思うんです、そういうので求めるとか、ちょっと私は政治のほう、政治的なちょっと考えとしかわからないんですけど、そこらへんちょっと日本の脇田さんも含め、わからないで結構むずかしい話なので説明も含めてちょっと教えていただければと思います。

脇田 いいですか。まず何から説明しましょうか。たぶん主に、「慰安婦」問題に関わる法律というのは主に国際法だと思うんですけども、そのなかで、先ほど申しましたように、必ずしも解釈が1つには決まらないと思うんですよ。特に1つ問題なのは、条約があるんですけど、条約のなかに占領、例えばハーグ陸戦条約というのがあるんですけど、それは、か

つての植民地には適用されないんですよ。占領地にだけ適用されるから、だから韓国の場合においてその条約をもって解決はできないと、そういうふうな解釈することもできるんですね。ですから、必ずしも法的解釈によって「慰安婦」問題は賠償すべきだという結論には自動的にならない。

さらに政治的な話をすると、アジア女性基金でできたのはやはり「自・社・さきがけ」の連合政権のときですよ、それは特殊な政治的な状況によって、偶然革新である社会党の首班で村山富市さんが首相になったんですね。ですから、それはあくまで例外的な状況であって、やはり常に内閣にいるのは保守である自民党であるから、必ずしも「慰安婦」問題に対して賠償すべきだという政治的状況にはないと思います。

杉本　いまおっしゃっている日本の政治の問題になってしまいますけど、自・社・さきがけのころですよ、そのころは偶然できたっていうのはすごくわかるんですけども、偶然できたきっかけはどうであれ、そこで日本人が、日本、特に官僚、政治家が特に重要視する前例という言葉がありますけれども、そこでいい前例がまずできたと思うんですよ。それで前例として、その総理大臣が発した言葉っていう、さっき僕が聞いたものにもある種の政治的な力があると思うんです。それは韓国の人はどう受け止めているんですかね。

シン・ヒソク　私が韓国人を代表するわけではありませんが、当時の村山総理、または官房長官の説明についても知っています。ただ、問題はまず先ほど話のあったように、日本政府はさまざまな政治的道義的な責任はあるけれども、法的な責任については認めていない。国連の人権委員会でこれに関連する特別レポート、報告書も提出されたわけですが、日本はそれについては反対をした立場の違いというものがはっきりあったわけですね。そうした政治的なレベル、日本の国会で補償に関する法律を成立させて責任を取ると。補償をするということになれば理想的かもしれませんが、ハンセン氏病についても同じような問題があると思うのです。日本の政治的な現実とか、そういったものが実際にそういう状況ではないのでそれが不可能であるというのが私の考えです。

私は日本と韓国に生活をしながら感じたことは、皆さんどう思うかわかりませんが、大多数の人たちは政府の言葉についてはよく信じるし、従いますね。特に対外問題についてはそうかもしれません。そういった点で、私も例えば日本の外務大臣の麻生さん、「慰安婦」についていろいろな発言をしてきましたけれども、そうした人たちの発言。総理の談話は別にして日本の政府、あるいは裁判所が賠償をしてないということが根拠になっていると。NGOの人たちのお話と、そういった政府の高官の人たちの話とどちらが説得力をもつかという問題もあると思います。

日本・韓国の加害・被害でなく被害当事者の問題

私の言いたいことは、この「慰安婦」の問題は日韓間、被害者加害者間の問題ではなく被害者個人の問題だということなんです。被害者の皆さんがもし日本人だったとしたら、皆さんどうでしょうか。そういった状況で政府が賠償せずに民間の基金をつくって支援をしようということになったとしたら、皆さんどのようにお考えになるでしょうか。私は明らかにこの「慰安婦」に関することは韓国の人たち、あるいは日本の人たちだけでなく韓国の人たちもこれに関与していますし、単純にこれは当時の日本軍によって組織的に行われたことであり、そういった点からいまの日本人が戦争中の日本人と一緒にだとは思いませんけれども、そういった責任を感じて問題の解決に乗り出す努力をしなければならぬ、運動していかなければないと、私は思うわけです。

脇田 時間もなくなってきたんですけども、最後にちょっと私、意見申していいですかね。

確におっしゃるようにそのように、目標として国家賠償を追求すべきだと僕も賛成です。ちなみに僕の意見を申しますと、やはり国家賠償というものは国家のみが行うのではなくて、社会も合わせた、具体的に申しますと、民間からお金集めてそれを同額のお金というものを国家も支払うと。そういう国家と社会がセットになったやり方で賠償すべきだと思います。しかし、それと現実に行われたアジア女性基金をどう評価するかというの

はまた別の問題だと思うのですね。だから国家賠償すべきだからアジア女性基金は駄目なんだという論理にはいかないと思うんです。ですから、アジア女性基金というものは現実に貧しく生活に困っているおばあさんたちに対してなんらかの救済の一助になったと僕は思うんですよ。だからその意味で、次善の策ではありますが、一定の評価はできると少なくとも考えています。

クオン・ユソン 与えられた時間がもうあまり残っていないわけですが、私どもだけの討論ではなく、いま傍聴されている皆さんの質問もお聞きしたいと思います。質問される時はどちらの国の方で、またどちらの国の学生にご質問されるのか、そういったことを最初にお話しをいただければよろしいかと思えます。ます。ご質問ある方は手を挙げてください。

質問がないところを見ると、私たちの討論がとてもよかったということなんでしょうか。質問ございませんでしょうか。大したものですね。

唐木 ご意見など、いただけたらと思うんですけれども。

ノ・ヨンレ とらえどころがない討論だったでしょうか、いま手を挙げていただきましたね。

加害国は「大日本帝国」なのでは

会場参加者(男性) 一橋大学のウカシズズラクです。すごく意味深い討論を聞かせていただきましたけれども、ちょっと僕の意見を述べたいです。

まず、日本は加害者の国だと聞いたら、ちょっとびっくりした。なぜかと言うと、もし僕は日本人だったらすごく傷つけられた感じです、僕にとって。もしかして加害者の国は日本じゃなくて、大日本帝国じゃないんですか。それを言ったほうがいいんじゃないですか。やはりドイツの場合を言っていたら、それはわかると思えます。なぜかと言うといまのドイツはナチス・ドイツじゃないんです。いまのドイツの若者は昔の問題はあまり考えないんですね。もちろんそんなことはあったけど、その認識はあるけど、「僕たちは加害者じゃないんです」という立場から話します。

あと韓国人側がよく述べているのは認識をつくることですね、日本人の

あいだで。それはおかしくないんですけども、例えば早稲田の博物館です、ね、やっぱり人は興味ないと行かないですね。だからどんなにそんな博物館を建てられても、それをテレビや新聞でお知らせしても興味ない人は行かないですね。だから、スタンスはちょっとむずかしいんですけど、よくわかってますけれども、どうしたらいいのでしょうか、よく考えましたね。そういう私自身の意見だけでした。

脇田 その意見に応答したいと思うんですけど、まずはじめに大日本帝国と日本で国家で区切りができてるんじゃないかと、だから責任というのは大日本帝国にあるんじゃないかということですよね。いまの日本が加害者だということに驚かれたんですね。

会場参加者 (男性) そうですね、帝国の時代はもう終わったんですね。そしていまの日本は全然違いますね。

脇田 でも、そこにやはり実際に憲法も違うし、法体制も違うという意味で形式には区切りが生じてるんですけども、おそらくいまここで大日本帝国、日本が連続的にとられているのは、日本というのはいま現在靖国問題に見られるように、どうしても保守の色と軍国主義的ナショナリズムという色をとどめている。かつ戦後補償という問題というものも政府対政府のレベルでかたちだけのものに終わってしまっていると。だからこそ大日本帝国と日本というものが連続的にほかの韓国や中国から見られてしまうということだと僕は思いますね。

会場参加者 (男性) そうですね。

ノ・ヨンレ 私のほうから一言。私とはちょっと考えが違うと思うんですが、私、個人的には日本帝国と現在の日本、そしてその当時の朝鮮といまの韓国というのは異なると思います。いまお話のあった意見については非常に共感します。またそういった点についても討論するにあたって非常に参考になる意見だと思いますよ。われわれがいま日本と言っているのは便宜上日本帝国とは区分しなければいけないんですけども、日本というふうにお話ししてるんだというふうにご理解ください。

吉濱 いまのお話についてちょっとコメントがあるんですけども、ま

ずドイツと日本は違います。ドイツは戦後、国旗国歌はすべて変わりました。しかし、日本は当時のまいまも使っております、そういった点でも連続性があると思います。また国家制度として違うとは言っても、私たちの先祖がやったことであることに変わりはありません。そういった意味で忘れないということは必要だと思っております。

あと、博物館をつくっても興味のない人は行かないとおっしゃいましたが、私たちは日本は沖縄というのが唯一の本土での決戦があった場所です。沖縄にはたくさんの資料館があります。そこにはいまも生きてらっしゃる沖縄戦の経験者の方が私たち若い世代に話を伝えようとそこに常駐しておりますし、そういった取り組みがなされております。興味がなければ行かないからつくっても意味がないというのではなくて、いつ興味が起こるかかわからないし、そういう意味でそういうものを残しておくというのは意義があることだと私は考えます。

唐木 私も少しいいですか。私は実際に沖縄に修学旅行に行って、そういう場所を訪れたんですけども、やはり私も教科書やそういう日本の歴史教育を受ける限りでは、そういった歴史問題に関してほとんど関心をもつことができませんでした。しかしやはり、そういった沖縄への修学旅行によって、歴史問題や、特に沖縄戦の問題に関して、あと日韓の問題に関しても、そういう歴史問題に対してすごく興味をもつことができました。なので、やはりいま吉濱さんが言ったように、興味がなくても学校や教育を通して、そういう機会を提供するということに関しては、これからのいろんな認識をつくるうえですごく大事な機会になるし、そういう場として博物館や資料館が存在するということはすごく意義のあることだと思います。

会場参加者(女性) こんにちは、日本のおばさんです。神奈川県から来ました。家の近くにある図書館にきょうのこの企画のビラがあって、とてもうれしくなってやってきました。若い皆さんが、こういうことで討論する場をつくっておられることにとっても感動しています。

先ほどの方のお話でやっぱり一言言いたくなかったのは、残念ながらいま

のこの日本は教育基本法の改悪も九条の改悪も迫ってきていて、とてもじゃないですけど日帝とは違いますと言い切れない状況にあると思います。この国に住む私たちは、やはりそのことをしっかり見極めて、よりどういう動向になるかしっかりしていかなければいけないときに、いまあると思います。そして興味を起こさせるということですが、先ほどのお話にもありましたが、やっぱり私も私が生きている小さなコミュニティであったり、自分の家族であったり、近所の人たちにやっぱりさっき学生さんがおっしゃってたように、まず話しをしていくことから始めたいと思います。

韓流から韓国語を学んでいて…

私にとってはいまの韓流ブームで家の近くの公民館で安く韓国語を学ぶことができるようになって、いま始めたばかりなんですけれども、私の出身は広島で、私のすぐくまだ先の、はるかかなたの目標なんですけれども、被爆者の方たちが韓国にも住んでらっしゃるということで、いまの状況ではそれを承認する人がいなければ被爆者として認定されないというような仕組みもあるんです。私がいま（韓国語が）上手になれば郷里の人たちにも協力を得て、そういう被爆された方たちのためにも役に立てたらと思います。

ついでに1つ、質問させていただきたいんですけど、私にも子どもがいますけれども、「従軍慰安婦」の話をしようとするときに、やっぱり何歳ぐらいから、それはすごく性的なことからむので、どういうふうに話したらいいかなと思っています。韓国では何年生ぐらいからそういう性教育も含めて「従軍慰安婦」の話を教室で先生がされているのでしょうか、そのことを聞きたいと思います。

それでさっきのことで言いたいのは、自分の生きているところから興味があることからでも「従軍慰安婦」に直結しなくても、まず隣の国であり、歴史的にいろんなことがあって日本も文化をそこから影響を受けた大事な隣の友人として、いまの韓流ブームも私は否定できないところがあると思うんです。それを糸口にしてそこから理解を深めていくことができたらと

思います。そのときにやっぱりさっきおっしゃったような拠点として、そういう情報が得られる場があるんだということがあるととてもいいと思います。終わります。

クオン・ユソン ありがとうございます。先ほどのご質問について簡単にお答えしたいと思います。私たち韓国の場合、小学校の教科書からそれについての言及があります、「慰安婦」について。教科書、いまどうなっているかはっきりとしたことはお話し申し上げられないんですが、その問題について教科書以外にも歴史の時間に常に、あるいはほかの時間、授業時間にもそういった話は出てきます。韓国ではこの問題は性という問題を離れて歴史的な傷跡といったかたちで認識をして、私たちが解決しなければ問題という認識で小さなときから教育、あるいは家庭、社会のなかでそういった問題に常に接することができる。特に8月15日が近くなると学校、あるいはさまざまな施設、あるいはマスコミ、そういったものを通じてこういった問題が常に出てくるんですね。ですから、私たちは常にこういった問題を解決しなければいけないという認識をもっているのです。こういったものが常に話題になり、日本でもこうなればいいなと思います。日本人にとってもひとつの傷だとは思いますが、そういったものを少しでも知らせる、そういった博物館ですとか、そういった機会、チャンス、時間、そういったものがもたれば非常にうれしいと思います。

キム・ジュヒ ジェンダーについてですけれども、一般的な女性が男性を見る、男性が見ると、「慰安婦」問題1つだけを取り上げて語ることはできないと思うんですけれども、まず性教育といった問題から話さなければいけないというふうには思うんですが、韓国でもこういった問題については直していかなきゃいけない部分もたくさんあると思います。

クオン・ユソン もう予定の時間を過ぎてしまいました。まとめる時間になったんですけれども、まず個人的にはこういった非常に解決がむずかしい問題について、両国の学生がこういった共通した時間をもてたということ自体、非常に意味があったというふうに考えております。

脇田 社会がどうあるべきかということだけでなく、私たち1人1人に

何ができるか、これを考えなければならないことを非常に学ばせていただきました。

クォン・ユソン 10分間の休憩のあと、次のテーマについてまた皆さんとお話したいと思います。長時間にわたり皆さんご苦労さまでした、ありがとうございました。(拍手)

【休憩】



大ブームを起こした韓国のテレビドラマ「冬のソナタ」(原題・冬の恋歌)につづいて「宮廷女官 チャングムの誓い」(原題・大長今)がNHK-BS~地上波放送。韓国ドラマはその後もテレビ各局で放送されている

現在から未来へ——文化・市民交流を軸に

ノ・ヨンレ　休憩時間のあいだ、韓国と日本の大学生が1時間半、とても熱のこもった議論を終えて、おたがいに休憩時間に写真を撮りあったんですけれども、それを見ながら、やはり若い世代がこの世の中を進めていけばうまくいくと思いました。

2つ目のテーマは韓国と日本の文化についてです。つまり「慰安婦」という過去の問題を超えて、現在の韓国と日本の問題について議論をしたいと思います。それで文化は日本側からまず報告を聞きたいと思います。

岸　はい、昨日の(分科会)日本側のまとめを発表させていただきます早稲田大学2年の岸です。昨日私たちは、韓流、市民交流、生活、文化の接点と歴史問題というテーマで意見交換を行いました。そこでまず日本、韓国両方からそれぞれ問題提起が行われ、そこから意見交換を始めました。

まず韓国側から3つ問題提起がなされました。1つ目は日本の20代30代の世代の人たちはいまの日本の韓流をどう受け止めているのかということでした。これに対して私たち日本側から出た意見は、40代50代の方々は韓国のドラマや映画のなかに懐かしさを感じて魅了される人が多いようであるのに対して、逆に20代30代の若い世代では多少離れた位置から冷ややかに見ているという人が多いということでした。しかし、このように韓流に関心もてずに冷たい目で見ている若者がいる一方で、20代30代でも、私を含めてなんですが、日本のドラマにはないストーリー性などに新鮮さをおぼえての韓流の波に乗っているという人も少数でありますという話も出ました。

2つ目の問題として挙げられたのは、両国民がおたがいの国に対して、またはおたがいの国の人に対してどのようなイメージをもっているのかということでした。はじめに韓国側から日本人の印象として、「風呂好きできれい」「質素」「自分の考えをはっきり言わない」「割り勘をする」と言った

ことが挙げられました。(笑)これに対して日本側からは韓国人の印象として、戦争を経験した世代の子どもの世代、つまり40代50代の方たちは現在の韓流の影響によって韓国に対する考えがいままでよりよくなった人が多いのではないかという意見が挙げられました。また一方で竹島、靖国問題や、教科書問題報道、メディアの報道によって韓国の一部の過激な人々が大々的に取り上げられることによって、韓国人はみんな日本人が嫌いなのではないかという先入観をもっている人もかなりいるという意見も出ました。

3つ目に、日本における集団中心主義的な歴史的背景はどのようなものなのかという質問が挙げられました。これに関しては韓国側における集団中心主義という、血縁とか土地のつながり、出身学校のつながりというものは、現在の日本では薄れつつあって、日本ではどちらかという個人主義的な社会に移行しつつあるのではないかという答が出ました。

次に、日本側から出された問題提起についてお話しします。日本側からも大きく分けて3つ問題提起がなされました。まず1つ目は先ほども韓国側からの質問もありましたように、韓国人は、日本人または日本という国に対してどう思っているのかということです。これについて韓国側からは韓国の社会全体としてはよいイメージではない、悪いイメージだという意見が出されました。またそれを細かく見ていきますと、過去の植民地支配に対しては現在も批判的ですが、逆に文化や経済の面では日本を多少進んでいる国として羨む、または学んでいこうという姿勢もあるということでした。また、日本に対する考え方はその世代ごとにもかなり異なり、やはり戦争を経験した世代は反日感情が強く、また私たちの親の世代と言われる人たちは反日感情に加え反共感情も高いということでした。また10代20代の世代はインターネット世代と言われていて、さまざまな情報をいろいろな面から取り入れることができやみくもに反日、反共といったものではないということでした。

そして2つ目の質問として、日本の韓流は韓国においてどのように報道されているのかというものがありました。これについては、批判的か肯定

的かどちらかというふうにははっきりは言えないということだったのですが、韓国で新聞などによってもかなり取り上げ方が違うという報告がありました。また韓国では韓流という現象を私たちが考えているようなメディアの面よりも、逆に企業など商業的な面から重視しているということです。

そして3つ目として、韓国において靖国問題がどのように報道されているかについてです。おととい私たちが靖国神社にみんなで行ったこともあってこういう質問が出たと思います。これについて、昨日の段階ではあまり多くのお話をちょっとお聞きすることができなかったのですが、一部の意見として現在も天皇が日本人の心の中にあるであるとか、日本人の精神が靖国にあるといった発言が聞かれました。これは私たちの認識とは異なると感じました。

それで昨日の話し合いの結果、私たちのなかで現在の韓流を一過性のブームとして終わらせずに、これからも文化の面でさまざまな接点をもって、そこからおたがいについて知っていけたらよいのではないかという考えになりました。また、昨日の話し合いから人と人が実際に話してこそおたがいの理解が深まるということが改めてわかりました。百聞は一見に如かずという言葉がまさにあてはまることだと思います。以上、ここまでが昨日のまとめでした。

対立的な、偏見をもったメディアの報道の問題

次に新たな問題提起を簡単に行いたいと思います。まず1つ目は先ほども出ましたメディアの問題です。昨日の話し合いからもわかるように日本では韓国で日本の国旗を燃やしたりだとか、大使館に石を投げつけたりなど一部過激な韓国人がクローズアップされて報じられ、逆に韓国では靖国が現実よりも誇張されて報じられているようです。こういった偏った報道の改善も必要だと思います、もちろん。またその情報を受け取る側の私たちも、与えられる情報を鵜呑みにせず批判的な見方をもつことも必要だと思います。また私自身が将来放送に携わる仕事があったいなと思っているので、私たちの世代では、これからの報道のあり方について考え直すべきで

はないかと思いました。このことに対して韓国側ではどのように考えているのかお聞きしたいなと思います。

またもう1つ、日本文化の開放についてです。韓国では徐々に日本文化が開放されつつあります。また世代によっても違うと思うのですが、そのことを韓国の人たちはどのように受け止めているのでしょうか。また韓国においてはそれがどのような影響をもたらしているのかを知りたいと思います。以上、昨日の話し合いの報告と問題提起でした。ありがとうございます。

唐木 昨日の分科会の報告と新たな問題提起でした、ありがとうございます。それでは、韓国のほうから発表のほうを次にお願ひしたいと思いません。

文化で親近感、日本での韓流は韓国でも好感

パク・チイン 皆さま、こんにちは、この分科会のパク・チインと申します。昨日の討論は文化をテーマに議論したわけですが、とても活気あふれて楽しいものでした。きょうのこの場も昨日の熱気を引き継いで楽しく、そして発展的な議論にしたいと思います。

それでは昨日のその議論の内容についてご報告申し上げます。事前討議で韓国側は序論、本論、結論に分けて問題提起をしました。序論の部分では、なぜこの場でわれわれが文化について議論すべきなのかについて、そして文化交流の力と重要性、長い間の民族感情についても話し合われました。それから本論では、われわれが見る日本文化、そして日本が見る韓国文化についての話し合いが行われました。これは韓流ブームですとか、近くて遠い日本ということについて、例えば中国と違う日本における韓流、また20、30代が見つめる韓流、そして韓国人が考える日本人、そして3番目はわれわれのなかの儒教文化、こういった3つのカテゴリーから話をし、そして議論をしました。

韓国チームは歴史的な事実をもとに文化についての議論を行い、日本側はそういったものがなく議論したので若干の意見のずれがあったと思いま

す。日本側から問題提起したのは韓国人が見る日本人ですが、例えば日本の韓流について否定的な見方があるのではないかとか、日本に関心のない普通の人は日本や日本人についてどう考えているのか、または靖国神社についてどう考えているのかという質問が出ました。これについて韓国側から多くの文化交流を通じて日本について親近感を感じているけれども、歴史的問題については、例えば竹島＝独島問題ですとか、「慰安婦」問題、靖国神社問題についてはある程度距離をおいていると。そして韓流現象によって日本という国についてよく知ることができ、そして好感度が高まったという話も出ました。つけ加えまして、インターネットの影響ですとか、日本文化の開放によって日本文化に接する機会が多くなり、日本文化を前向きに好意的に受け止める傾向が増加されています。それから否定的なメディア（報道）についても話し合われました。韓国側の学生からはそれが一部の見方に過ぎないという答えも出ました。結果的に、現在の韓国と日本について正しく見て、そして文化的な交流を通じて両国の発展的な関係を築いていこうということで結論を出しました。より熱く発展的な議論を期待しながらご報告を終えたいと思います。以上です。

ノ・ヨンレ　いくつか提案したいと思います。通訳をお聞きになるとわかりますが、とても早く話しますと通訳がたいへん困ります。ですから、もう少しゆっくりお話しなさっていただきたいと思います。それから2つ目、「慰安婦」のときの討論のときに、少し感情が高ぶりましたね、発言なさる際にマイクにあまり近くなりますと困ります。ですから、まず手を上げてください、そして指名を受けてから発言をしてください。

文化についての討論は50世紀を超えた議論になります。「慰安婦」は1910年、1950年代までのことを議論したわけですが、この2つ目のテーマは2000年代のテーマとなります。文化というカテゴリーのなかで議論したいわけですが、ご存知のようにヨンさまをはじめとする日本の韓流文化、そして韓国における日本の文化についてさまざまな意見があると思います。議論の方法は先ほどと同じように、自由に手を挙げていただければ司会者が指名したいと思います。そしてご自分の意見をおっしゃっ

てください。

唐木 あと日本のほうから出された問題提起に関して、韓国側からの意見をお聞きしたいと思うんですが、そのようにして大丈夫ですか。それではメディアの報道のあり方について韓国側はどう考えているかということ。それから日本の文化開放について世代別にまた違うと思うんですけども、また若い世代やあと親の時代、あと植民地を経験した世代別にどのように考えているのか、その文化開放という観点からお話をお聞きしたいと思います。韓国の方でいまの2つの問題提起に関してお話しできる方いますか。

シン・ヒソク はい、メディアについてお答えしたいと思います。何人か記者を知っているので、日本ではどう報道されているかについて1回聞いたことがあります。以前特派員をしたことのある人が言っている話なんですけど、彼らも日本で長い間勉強したり住んでいますと、日本が昔のように軍国主義になるとかそういった状況ではないということを知っていると。そして、そういったことは常識として知っているわけですが、問題としてメディアは企業であるから、どうしても、いかにすれば売れる記事が書けるか、新聞が売れるか、それから視聴率が上がるかといったことを考えざるを得ないと言います。ですから、日本に関する報道をする際にも、例えばいいニュースがニュースになる場合もありますけれども、韓流ニュースとか、もっとよく売れるためには小泉総理が靖国神社に参拝したとか、そういったものを中心に報道するとか、または「つくる会」の歴史教科書を報道すれば部数が売れるということなんですね。ですから、実際にはそう書きたくないんだけど意識的であれ無意識的であれ、そういった記事を書く傾向があるといった話を聞いたことがあります。

唐木 昨日もそういう答が韓国のほうからなされたんですけども、では実際そのメディアというのがどういうふうにあるべきなのかということに関して、韓国の学生のほうからお聞きしたいんですけども。

チェ・ジャンホ まず、メディアというのは中立を守るべきだと思います。いつも商業ベースにのっとって傾いた報道しがちだと思うんですが、日

本も韓国もそうです。ですから、私も未来のリーダーとしては中立的な立場を守るべきだと思います、メディアは。

メディア報道を取捨選択する態度

キム・ハラ 私はちょっと違う意見を言いたいと思います。マスコミは中立であるべきだというのは、それは常識でも理想でもそれは当然なんです、それがむずかしいので問題が起きると思うのです。私はマスコミが、先ほどシンさんがおっしゃったように、営利を追求し、また人々の注目を浴びるためには、またそれが彼らの存在理由でもあるので完全な中立、そして事実だけを述べるのはむずかしいと思います。世界の問題についても例えばCNNとか、そういうメディアがあるんですが、報道の歪曲というのはいつもあると思います。ですから、われわれが開かれた目をもってマスコミのことを鵜呑みにせず、ある程度事実をきちんと取捨選択する、そういう態度がより現実的な態度ではないでしょうか。

吉濱 私もいまのキム・ハラさんの意見に同感です。新聞というのは私は日本の新聞しか読んだことがないんですが、やはり何社かあってその企業によってはこっちであったりこっちであったりっていう考え方が違います。ですから、1つの記事について何社もの記事を読むというか、そういった情報の収集の方法は確かに確実だと思います。そこで自分が信じるものを信じるべきだと思います。1社だけの新聞を読んでこれが正しいと思うのは危険だと思います。

脇田 確かにメディアというものは自らの役割というものを考えて、中立性というものを追求していかなきゃならないと思うのですけれども、韓国はどうかよくわからないのですが、日本の状況を見ると、例えば楽天がTBSの株を買収したり、またライブドアがフジテレビの株を買収したり、そういういろいろメディアが多様化してきていると思うんですね。だからかつては1つの企業が、マスメディアですけれども、1つの企業が大衆に対して一方的に情報を流すだけだったのに、現代だったらケーブルテレビとかインターネットとか、その他いろいろなメディアがあると。そのなか

で自分たちが何を、どういう情報がほしいのかっていうのを選択できる、そういうメディアが多様化していける時代だと思うのですね。かつインターネットが進むことによって、これまで一方的に情報を与えられるだけだったのに、ブログとかそういうものを通じて双方向的に情報を交換できるようになってきている。だからそういう意味で、メディアというものは変化してきているのではないかと思うんですが。

チョン・ダフン　メディアの位置づけですとか役割についてお話しするのは、いまの状況ではあまり役立たない討論でないかと思うのですね。個人的に自分が考える韓流の基本認識、韓流をどのように見るのかということを考えないと、それについて批判的にせよ、または好意的にせよ、自分なりの考えをもってみるべきだと思います。

それを踏まえますと日本において盛り上がっている韓流ブームについての私の見解をまず述べたいと思います。2つの側面から注意深く見るべきだと思います。まず1点目は日本における韓流は文化的な面よりも企業的な面から理解しなくてははいけないと思います。2点目はその主体になる世代が決して20、30代の若い人ではないということも指摘したいと思います。文化的な側面から理解をせず、企業的な側面から見なくてはならないということは、韓流ブームは日本のみならずほかの国々でも、特に東南アジアを中心にいま盛り上がっている韓国に対するそういう雰囲気なんです。中国の場合の韓流ブームを見ますと、日本のドラマも一緒に放映されていますが、韓国ドラマがたいへん人気があります。それは文化的、歴史的な同一性があると彼らは言っています。ですから、俳優がきれいだとか洗練されているのは日本も韓国も同じですし、日本のほうがより勝っているという人もいますが、ドラマのストーリーの展開ですとか、また歴史ドラマの場合はより同一性を韓国ドラマのほうに感じられるというのです。

ところが、日本にいま起きている韓流ブームの場合は、中国で当たったところが、日本に対してそういうブームはありません。それは歴史的な問題もあるからだと思うんです。韓流ブームの企業側面について申し上げますと、中国の人は韓国の文化に対して基本的な理解があるので、ドラマ

を見てもより関心もてるし、それによって韓流ブームでの商品ではなく、韓国でつくられたすべての商品に対して興味をもつようです。ところが日本の場合、韓流に関連する商品だけに関心があるんです。例えばペ・ヨンジュングッズですとか、またはそのほかの有名な韓国の四天王、イ・ビョンホンが出た場合の観光商品ですとか、そのほかに韓国で売られているそのほかの商品についての購買力は日本ではありません。

韓流は文化、社会、歴史への関心につながる

また、もう1点私が申し上げたかった、主体が40代50代だということで、20、30代はあまり関心がないというのは、もともと若い人の場合もともと韓国語を専攻しているとか、そういう人以外の若い人たちは、おばさんたちがあの韓流ブームだということでもかなり冷たく批判的な目で韓流ブームを見ていると聞きました。ここで注意しなければならないのは、40、50代の人たちの子どもたちは10代であるということなんです。この10代たちが今後より活発な活動をするようになると思うんですが、韓国に対しての文化を伝達するにあたって、彼らを中心に今後考えて商品を開発したり、または日本に対してのアプローチをすべきではないかと思います。この場において韓流を話す理由はいろいろあるとは思いますが、韓流に寄せられる関心というのは、文化に対する関心だと思います。それは言葉への関心、そして韓国の生活や、ひいては先ほどお話の出た韓国の歴史や社会、政治への関心へとつながると私は信じています。今後韓流についてのお話がこういった延長線上でお話しできればと思います。以上です。

ノ・ヨンレ 3分の持ち時間というお話があったんですけども、長時間にわたってありがとうございました。メディアからほかのテーマに移りたいと思います。では、日本で吹き荒れている40代50代60代のあいだの韓流ブームの意味は何なのか、そして20、30代ではなぜそのようなブームが起こらないのかということについてお話ししたいと思います。それから、韓国においての日本のブームはどんなのかについてもやはりお話ししたいと思います。

では、まず日本側の学生にお願いしたいんですが、40代以上の方に吹き荒れている韓流ブームと、若い人の間ではなぜ韓流ブームが起こらないのかということについてお話ししていただきたいと思います。

野田 私の母は50代なんですが、韓流ブームに乗ってるわけではないんですが、少しずつ韓国について興味が出てきているようです。それでなぜかというのを聞いてみたところ、やっぱり戦後に教育の面で戦争の部分が排除されてきたということで、また韓国の情報や中国の情報というのはなかなか得られなかった。また得ることもなかったし、得ようという機会もなかったということを知っています。なので、私たちはその面では普段からいろいろ韓国の情報も得ることもできますし、もっと幅広いところにも目がいくので、韓国だけではなく世界に対して興味があるということで違うのだと思います。以上です。

唐木 私も、少しそれについて付け加えたいんですけども、若い世代というのは国とか国境とかについてあまり、40代50代ほどこだわりをもって考えないという面があると思うんです。例えば韓流ブームが起きるちょっと前なんですけど、「フレンズ」というドラマがあったと思うんです。日韓合作のドラマだったんですけども、そこに出てきたウォン・ビンというすごく韓国でも人気のある俳優さんについて、その当時私はちょうど高校生だったんですけども、その高校生の世代のなかでウォン・ビンは格好いいという、すごくそういう一時的なそれもブームだとは言えるんですけども、雑誌に結構出てきたりだとか、韓流のちょっと前哨戦というかそういう動きがあったと思うんです。

若い人はいいものはいいと受け入れる

だから、若い世代というのは韓国とかそういうことにこだわるのではなくて、いいものならいい、取り入れるという日本のそれこそ雑種文化の代表的な存在になっているというふうに私は考えるので、若い世代で韓流ブームが起こる可能性はないと考えるのではなくて、そういうことに関して、韓国だからと言って関心をもつということではなくて、いいものは取

り入れるという若者の姿勢というものが現れているので、例えば何でもかんでも韓国だからと取り入れる40代50代とはまた違う様相を示しているのではないかと私は考えています。

岸 先ほど唐木さんが言ったように若い人というものは何か新しいものを追求したがる。逆にいま韓流ブームに乗っている40代50代という方たちは、私の母がいまちょうどその波に乗ってしまっているので言えることなんです、私の母が言うには昔のよき日本、昔の日本の雰囲気を感じるというのですね、韓国ドラマから。

というのも、韓国ドラマって、結構日本で放映されている物、純愛物、すごい純粋な恋愛物であったり、そういうものが多いと思うんですが、いまの日本に薄れつつあるものかどうかとうちの母は言っていました。また、私の母の友達で好きな人とかも、たぶんそういうところに惹かれているのだと思います。また、韓国の芸能人が日本の芸能人に比べてとても礼儀があって礼儀正しいとか、そういう人間としても素晴らしい面が見えるというところがいいそうです。

逆に日本の若い人たちっていうのは、その母親とか親に反発したがる気持ちも多少はあると思うんですが、逆にそういう純愛がダサいものだ、もっと欧米的な考え方と言うのですか、そういうのをもっている人が多いと思うので、昔に立ち返るという考えが少しいまのおばさんたちに比べてないのだと思います。また、先ほどちょっと日本の韓流と中国の韓流が違うというお話があったのですが、私はちょっとそこが疑問で、中国では韓国の文化に対する基本的理解があるけれども、日本ではないみたいなお話があったんですが、そのあたりが私はわかりません。韓国の確かに韓流に関するグッズばかりが売れているという現象はあると思いますが、一方で最近韓国の料理であったり、また伝統的音楽というものも日本に取り入れつつあるので、そういった韓国の文化というものも日本には韓流の映画、ドラマ以外にも入ってきているということをちょっと知っていただきたいなと思いました。

杉本 先ほど聞いた唐木さんの意見、岸さんの意見と結構似てるかもし

れないんですけど、先ほどチョン・ダフンさんから聞いた意見にも含まれてちょっとコメントしたいと思います。

確かにいままさに韓流ブームの真っ盛りということで、その担い手としては40代50代の方。確かにチョン・ダフンさんがおっしゃってた関連グッズは売れるけれども、きょう前半で歴史問題のほうお話したときに質問なさってくれた方、韓国のこと大好きと書いていただいて、それでそれに興味をもってまず韓国語やってみよう。実際の話、去年新大久保、コリアタウンがありますけど、そこにある韓国語の語学院ですね、そののある人と会ったことがあって、その人から聞いたんですけども、ワールドカップがあったときにお客さんが増えるかなと思ったらそんなに増えなかった。と思ったら今度韓流ブームで一気に増えて人数が100人を超えてしまって、逆に教室が狭くなって新しいビル借りなきゃといった状況だったらしいんですね。

確かに新大久保にグッズショップがあるんですよ、韓流スターの。そういうところへ行ったらおばさんがたくさんいます。土曜日、日曜日行ってください、もうおばさんだらけで動けないですよ。おばさん押しのけられない、逆に押しのけられてしまいますから。そういうところに、そういうのもありますけれども、確かにその以前の文化ですね、40代50代の人でも、韓国料理だとか韓国の、例えば旅行に行って触れてきた文化とか、そういうものに確かにそれを感じて、受け入れていくというのがあると思います。確かに40代50代って、どうしてもいままで韓国に対するイメージがあまりよくなかった世代、そこがいまそういうのが、韓流が1つのステップとなれば良いと昨日分科会で言ったんですが、そういう、もともとあまりいいイメージもっていなかった人たちがなるからかなり目立つというわけなんですね。これは私自身の考えです。

ですので、20代30代の人って言うのは、先ほど唐木さんがおっしゃってたように新しいものをどんどん入れていく。無意識のうちに入ってくると思うんですよ。昨日何人かの人と夜一緒に飲んだんですけども、そのときに食べたお菓子でも気づいたかもしれないけど、キムチ味ってあった

と思うんですね。なんでもそうです。いま日本でいちばん売れている漬物はキムチなんですよ、実は。そういうわけで、知らないあいだに身近なところに韓国文化があって、それに気づかない人はたくさんいる。だから韓国だからと言って、いわゆる新大久保にいるおばさんみたいに、もう1つしか見えてない、そういうところではなくて、知らないあいだに入っている。そういう感じだと思うんですね。だからワールドカップのあとも、そういう感じでだんだん少しずつ関心は出てきている。それでいま韓流ブームで追い討ちをかけているような気がします。だから決して関心がないというのは、さっき唐木さんがおっしゃってたように、それは違うと思います。以上です。

なぜ日本は華流でなく、韓流なのか

チョン・ダフン ありがとうございます。韓流のプラスの面についてお話しいただき、たいへんいい気分がするわけですが、1つ質問したいのです。先ほど女性の方からのお話で韓国ドラマ40代50代の関心が多いのは昔のことを思い出すといった、そういったお話があったと思うのですが、またいいものですから受け入れるという話もありましたね。純愛劇、よりいいものという話。具体的にうかがいたいのは、なぜそれが韓流でなければならないのか。なぜ華流ではいけないのか、中国ですね。中国は非常にリアルな素晴らしいドラマ、また歴史的なドラマ、武士に関連するようなドラマもたくさんあって、より日本の方に受け入れられやすそうな、そういったドラマもたくさんあるんですが、なぜ日本では華流ではなくて韓流なのかということをおうかがいしたいと思います。

岸 お答えしたいと思います。韓流である必要は必ずしもないと思います。ただ、きっかけとしてはじめて入ってきたこういう外国、いままで日本に入ってきたアジア圏のドラマというものが本当に少なかったと思うんですね。初めて入ってきて大ヒットしたのがたまたま（韓国の）「冬のソナタ」であって、最近では台湾であったり、中国といったドラマも日本に入ってきています。だから韓流だけにこだわっているわけではなく、いま韓流

ブームに乗っているおばさんたちでも、40代50代の世代たちでも中国のドラマとか台湾のドラマに関心をもち始めてる人もたくさんいます。ですので、それは韓国に韓流である必要は必ずしもないです。ただ内容が、私はちょっと中国のドラマ観たことがないのでわからないのですが、同じような面があればそれはいい面として受け入れていくのだと思います。

杉本 ありがとうございます。いまの岸さんの意見なんですけど、確かにそう思うんですね。確かにいまの段階で中国のドラマとかがまだ入ってきてないと思うんですよ。いまだんだん中国で有名な映画が少し入ってきてるんですね。それ昔の韓国の状況と似てるような気がするんですよ。「冬のソナタ」が入ってくる前に、それとかいちばん最初に僕が観た韓国の映画は「シュリ」ですけども、「シュリ」とかそのあと「JSK」とかそういう感じでまず映画から入ってきて、そのときはまだブームにそんなになってなかったんですよ。それといまの似てる感じ、もしかしたら、もちろんこのあといま言っていた華流が起きるかもしれない、その可能性は十分にあると思うんですね。

吉濱 確かにいまお2人が言ったように、日本の中国のドラマとかがなかったということが韓流ブームのすごい大きな原因だったと思います。でも、皆さん結構アジア料理屋さんに行ったりすると思うんですけど、私はすごくアジア料理さんが大好きで行くんですけども、そこで料理をチョイスするとき国で選んでるわけじゃないんですよ。例えばプルコギ食べたあとにはベトナムの生春巻きを食ったり、好きなものは好き、いいものはいいとして、唐木さんがおっしゃったようにいいものをどんどん取り入れていこうという姿勢が若い人に見られるんだろうと思います。でも、先ほどから「冬のソナタ」はおばさんたちのブームだとおっしゃいますけど、私も観てました。すごい好きで毎回涙を流しておりました。

ノ・ヨンレ 「冬のソナタ」、韓国ドラマ、日本ドラマ、中国のドラマといった話ですけども、私たちが討論するよりも実際におばさんたちを招待してお話を聞いたほうがいいのではないかという気もします。傍聴の皆さんのなかで、そういったことについてお話ししていただける方いらっ

しゃいませんでしょうかね。中国のドラマ、韓流のドラマについてはこれぐらいにして、韓国には日本の文化がどれぐらい入ってきているのかについて少し話してみたいと思います。韓国の学生のほうからまずお話ししていただけますでしょうか。

韓国で子ども時代、日本のマンガで育った

シン・ヒソク 私の場合もまず日本の文化に接したのはアニメですよ、漫画。日本の漫画が好きだったということではなくてアメリカの漫画も見だし、いろんな国の漫画を見ましたけれども、やはり日本の漫画が面白かったんですよ。当時高校生、中学生のときに「エヴァンゲリオン」という漫画を見ました。最初そういったところから接点があって、また映画を観るようになって、1997年98年ごろでしたか、その当時から日本の映画に接する機会が増えてきて、また日本の音楽、歌手、ケーブルテレビを通じて日本のドラマも観るようになりました。

私は日本のドラマをたまに観るんですけども、韓国でそういったドラマを観ていたので、純愛ドラマにはもう食傷気味だったんですね。日本のドラマはそうじゃないんでなかなか面白かった。最初はそういった感じで日本のドラマだ、日本の漫画だ、そういったことを別に意識せずにそういうものを見はじめたと言えます。しかし、それが1つのきっかけとなって大学生になってから日本語の勉強を始めたのも、そういった漫画に接していたことが1つのきっかけではなかったか。そう思うと文化についてそういった好奇心、それ自体がその国の文化全般に対する関心に結びつくというふうなことを考えます。韓流、あるいは韓国での日本文化が広がっていることについて非常にいい現象だと、私は思います。

チェ・ジャンホ 最初に韓国に日本の文化が本格的に入ってきた時には、政府のほうで非常に警戒したんですね。その前も私たちは小さいころから「マジンガーZ」ですとか、そういったものは日本の漫画だと知らずに見ていたんですね。大きくなってから知ったんですけども、それは日本のものだと。日本の漫画だったということで非常に驚いた経験があります。韓

国の場合、かつて日本のものを多くまねて取り入れてきたわけですが、日本の文化が非常に浸透していたというのは事実だと思います。いまになって本格的に文化が開放されて映画、アニメ、そういったものが本格的に入ってきて、いいことだと。そういったふうにも思いますし、私も「エヴァンゲリオン」大好きですし、しかし警戒しなきゃいけないのは、韓国人のよくない点は、まず悪いところから取り入れてしまうということなんですね。性的なものとか、そういったあまり好ましくないところからまず韓国に入ってきて、それを韓国人が受け入れてしまうということを警戒すべき必要がある。アニメだとか映画、そういったいいものは受け入れて、よくないものはやはりそうしないようにしないといけないと思うんですね。

モ・ユヨン　いま、アニメについて男性のほうからお話がありました。私はドラマ、あるいは歌が好きなので、日本の音楽、昨年1年間日本に留学していたこともあってお話しするんですが、2004年の文化開放以降、日本のドラマが2004年1月から公開されて広がり始めた、韓国の地上波の放送局が持っている衛星放送、SBSドラマとか、KBSドラマとか、MBCドラマとか、そういった放送局、NHKではなく「冬のソナタ」がBS2で放送されましたよね。KBS スカイドラマという衛星放送局ですね。そこで日本のドラマを放送しているのですが、残念なのはKBS スカイドラマで放送したものが、地上波のほうでは放送されないんですね。日本では衛星放送で放送されたものが、また地上波で放送してすごいブームになった。それに対して韓国ではそうになっていない。もし地上波で放送されればもっといろんな人が見ることができるといことですね。

独島問題あったが「友情年」で文化交流は幅広く

2005年に韓国に帰ったとき、独島、竹島の問題が非常に騒がしいときでしたね。そのとき日本に関連する音楽の放送、ドラマの放送が非常にたくさん放送されていました。そういった放送がその問題によってかなり姿を消したんですね。私が思うに、それは非常に残念なことだったと思います。文化ですけれどもそれが歴史的なそういった問題の影響を非常に大きく受

けてしまったというのがとても残念でした。

昨日もお話ありましたが「8月のクリスマス」という映画が、日本の映画にリメイクされたんですね。「世界の中心で愛を叫ぶ」という映画が韓国で「波浪注意報」というタイトルでリメイクされたんですね。まだ封切りされていないんですが、私たちも日本のそういった原作をもってきてリメイクをする、そういった具合におたがいに文化交流がいまされていると思います。

また今年、日韓友情年ということでテレビドラマだけではなく、芝居、歌舞伎、宝塚、または舞踊、そういったものも韓国で日本の文化公演がたくさん行われています。そういったところで、私も通訳の仕事しながら関わっていたわけですが、日本でもあまり有名ではないそういった舞踊家の方が韓国に来て公演をしたり、日本で在日コリアンとして活動されている方が韓国で公演をされたり、そういったかたちで日本のテレビドラマ、歌、アニメーションだけでなく、お芝居、演劇、そういった分野でも非常に活発な交流が今年は特にたくさん行われたということが、文化開放によってそういった交流がに増えているということが非常にいいことだと、私は思います。

韓国も同じく、若い人は日本のものを受け入れる

キム・ハラ　私の経験から言いますと、韓国にはもともと日本の文化がたくさん入ってきたんですね。日本スタイルというような言い方もあります。服装ですとか、ファッションですとか、日本の真似をする子どもたちもたくさんいますし、アニメーションなんていうのも中学生のころから読み漁っていたそういった世代で、インターネットサイトを通じて日本のドラマについて関心をもった若い人たちもたくさんいます。日本の若い人たちが韓流について、いいものだったら受け入れるというお話されましたが、私たちも日本の文化についてはいいと思うし、それについて触れる機会もたくさんあるからたくさん受け入れると、それと同じだと思うんですね。

私も日本のドラマいくつか観てみましたが、日本のドラマはこれ以上テーマを探すのがむずかしいというぐらいいろんなテーマを扱っているドラマがたくさんある。それは率直に言って、若い人たちには合うかもしれないけど、おじさん、おばさんたちにはちょっとむずかしいかなと。そういった世代の人たちはやはり昔風のそういった純愛といったものに惹かれる。日本のドラマはあまりにもディテールにこだわっているために、なかなかそういった世代には受け入れにくいんじゃないかという気がします。若い人たちでは、もうすでに日本の文化というのはあまりに一般化しています。ブームというよりも、一部の人たちはすでにもう開放されているのに、これ以上開放する必要があるのかということと言う人もいるぐらいだと思います。

一方、「反日」デモなどをどう見るか

唐木 日本人からみて韓国だったりとか、また韓国から見る日本だったりの、そのいい面についてだいたい話してきたと思うんですけども、ではちょっと反対に、今度は韓国での反日行動を日本人はどう見るか、また逆に韓国人が靖国などの日本でのナショナリズムに関する動きをどう見るかということについて少し話しをしてみようかと思うんですけども。

ノ・ヨンレ 手が挙がらないのでちょっと困ってらっしゃるようですが、もう1度ご説明します。靖国神社を中心とする日本の右よりの行動を韓国人はどのように見ているか、評価しているか。逆に韓国で反日感情、反日デモ、日章旗を燃やしたりそういったことがあるんですが、そういったことを日本の皆さんは見てどう思うのか、そういった意見を交わしてみたいと思います。自由にお話しいただければ結構だと思いますけれども。

杉本 日本の人たちが、反日デモとか暴動をどう見るのかということろなんですけど、韓国から日本を見るときに日本の文化が好きとか、でも日本の靖国とかは嫌いというのでダブルスタンダードだと、だれか昨日、分科会でおっしゃったんですね。日本からもそうだと思うですよ。いまちょうど韓流ブームで若い人もさっき言ったようにいいイメージがある。

その一方で、やっぱりニュースを観ると首相が靖国神社に行くたびとか、今年の2月の竹島の島根県の条例とか、そのときにやっぱりデモやそういう暴動がクローズアップされる。やっぱり日本から外国に行く人では韓国が人数的にいちばん多いんですけど、日韓往復で1年間400万人と言われているので多いとは思いますが、やっぱり行ったことのない人のほうが多いわけで、しかもきょうの私たちのように触れ合ったことのある人もほとんどいない、多くない。だから、どうしてもテレビに出ている、そういうイメージで韓国の人って怖いのかなど。しかもやっぱり、年を特定するのはよくないので、「ある年代以上の人」と言っておきますが、そういう人たちのなかにもともと韓流以前にあったどうしても嫌だなというイメージが、それを観てまた思い出されてしまったような気がします。それはうちの家庭でもそういう話を聞きます。どちらかというと、うちの母親は韓国に対して結構いいイメージをもともと持っているほうだと思ったんですけども、そのテレビを観たときにはそのような反応していて、ちょっと自分自身も驚いたところはあるんです。

古山 韓国での反日行動について日本人がどう思ってるかということだったんですけども、確かに反日行動に対して日本人のなかで韓国ってなんだっていう、そういうふうな感情が沸き起こった部分も結構あると思うんです。ただ日本人っていうか、僕、個人的には、ああいう行動をする人は、やっぱり日本でもそうなんですけど、やっぱり暴力的な行動をする人はどこでもいるわけで、そういった意味では、少数かもしれないんですけども冷静に見つめて、あれが韓国のすべての世論じゃないと見つめている人もいっぱいいるのが、それもまた現実だと思います。

キム・ジェフン どの国でもやはり右翼という存在はいるんですが、日本でも韓国にも右寄りの人はいると思います。今回もそうなんですけれども、例えば普通の人々の場合はおたがいに会うと仲良くなれますし、おたがいの好きな感情ができます。ただ、一部に民族主義という旗の下にという美名で自分の利益を追求するという右寄りの人がいると思います。靖国神社が代表的な例だと思うんですが、この靖国神社を利用して政権を握り、

こういうものを利用して人々を扇動する勢力があると思います。こういう人がいなければ韓国と日本のあいだはより協力できる、そういうよい関係になると思います。

シン・ヒソク 極端な人たち、例えば韓流について反感を示したり、または露骨的に暴力的なデモをする人は少数だと思います。ただ、そういう少数の人たちが現れるのもやはり社会的な背景があるからだと思います。歴史的、文化的なそういうことでしょう。例えばアメリカの場合を見ますと、アメリカの場合は1960年代にさまざまな公民権運動を通じて、黒人に対する法律的な差別は撤廃されました、ほとんど。奴隷制度の時代から始まって、数百年のあいだ続いてきた黒人に対する差別意識はいままったくなくなったとは思ってないです、だれも。

韓国、日本ブームはあくまで”スタート”

同じような時期なんですけど、韓流がやはり、私の考えでは日本においての韓国への見方というのはかなりプラス的にはたらいてくれたと思います、韓流ブームは。ただ、これは韓流ブームだけで、その反感とか、そういうものがなくなるとは思えません。また韓国の場合も、やはり韓国の若者のなかには日本の漫画を読む人がたいへん多いのです。私を含めましてたくさんの方が漫画を読みます。しかしながら、日本の漫画を読むからと言ってみんな日本が好きか、日本に対して好感をもっているのかということではないんですね。日本の漫画を読みながらも、例えば小泉総理とか、右よりの人たちに対してだけではなく、日本人一般が嫌だという人もいます。ですから、韓流ブームとか日本文化との交流はあくまでもスタートに過ぎないと思うんです。これだけではすべての問題が解決できるとは思いませんし、それにすべてを期待するのは無理だと思います。

唐木 ちょっと意見言ってもいいでしょうか。私もそのようにいまの意見にすごく賛同するんですけども、それはなぜかということ、まず私の友人のなかにはやはり韓国人の男性と付き合っている友達がいるんですけど、そのことを自分の親に言ったときに、自分の親はヨン様とか韓流ドラマを

観てすごく韓流にはまっているタイプの母親なので、言っても大丈夫だろうと思って彼女に言ったところ、「あなた、結婚しないでよ」と言われたそうなんです。だから、ブラウン管を通じての韓流に対しては興味を示しながらも、実際自分の生活に侵入してくる韓国という国に対して、まだやはりあまりよくないイメージをもっている人は少なからずいると思うんです。

逆に、実際やはりこうやって会って、このフォーラムでもそうなんですけれども、話すうちにやっぱり自分たちの誤解が解けていくという面はすごくあると思います。私が短期留学中に一緒に暮らしていたルームメイトもそうだったんですけれども、彼女はやはり日本に対してあまりいいイメージをもっていなかったけれども、私と暮らしたことで日本に対してすごくイメージが変わったと言ってくれました。やはりそういうふうに直接話しながら韓流でできなかった、不足した部分というのは、やはり直接対話することでできることが多い部分があるのではないかと私は考えます。

古山 僕もそういうふうにやはり考えます。韓流ブームで確かに終わってはいけないと思うんですね。だけれども、韓流ブームに対して何も評価できないかと言えばそうではないと思います。そういった韓流を通じて韓国にまず興味をもつ、そういったまず第一歩を踏み出せたということは韓流ブームに対してすごく評価できることだと思います。あと、さっき言ったと思うんですけれども、会って話をするとか、こういうふうに韓国の方たちと一緒に話をして意見交換する、そういった機会をもつ、そういうきっかけになるんじゃないかなと思います。だからその韓流ブームを受け止めて、そのうえでさっき言いましたけど400万人ですか、いま両国で往来しているらしいんですけど、そういうふうにどんどん往来する人が増えて知ることができれば、もっともっと文化交流も盛んになるし、おたがいの認識の違いとか誤った認識、そういったものも改められるんじゃないかなと思っています。以上です。

チョン・ダフン ありがとうございます。質問したいと思うんですが、先ほど韓流ブームを受け入れながらも実際自分の生活に入ってくる韓国と

いうものに対して排他的だというお話がありました。またそれよりも前に、韓国人にもっている二重的な目があるという話があったんですが、私は昨日分科会で韓国人が日本に対して2つの見方があると言いました。1点目は歴史問題を通じた排他性、そして2点目は文化全般にあまりにも広がっている浸透性というものを挙げました。じゃあ日本がもっている韓国人に対しての二重的な見方というのはいったいどういうものなんでしょうか、それを教えていただけますでしょうか。

ノ・ヨンレ 時間があまりないので、いまおっしゃった質問をちょっと整理したいと思います。ですから靖国神社ですとか韓流ブームについて昨日お話しをしたんです、事前に。これからのお話は、じゃあ今後われわれがどのような方向に進むべきなのか。20代の若者がどちらの方向に行くべきなのかということについてお話ししたいと思います。それについて歴史的な異質感ですとか歴史的な親密感をどのようなかたちで消化することによって、世界化というこの時代により発展された成熟した世界市民としての地位をもつことができるのかというお話も合わせてお話ししたいと思います、これからの時間は。

岸 いまおっしゃっていた質問の答になるかわからないんですが、私の考えとして、日本における韓流を見る二面性ということについて、日本の場合でもやはり歴史に関係するものと、ただ単に映画、ドラマといった文化に関するもの、また食事というのもそうだと思うんですが、2つそれがあると思います。

はじめにも申し上げたんですが、この韓流がすごい好きな40代50代の人たちでも反日報道を観ると気分が悪いとか、いい思いはしないというのがあると思います。その理由として、ドラマや映画を観るだけで、実際に韓流に興味があつてドラマとか映画に興味をもっている人たちが、実際にじゃあ韓国人と話したことがあるのか、韓国に行って韓国の何か感じたことがあるのかと言ったら、そういう人は本当に少ないと思います。やっぱり旅行に行く人も最近増えていますが、行っても私もちょっと韓国に短期留学していた経験があるのでそのときのことを見ると、日本の人たちが来

て、韓国なのに思い切り日本語をしゃべっている。観光地でも多少日本語が通じるので韓国の何を学びに来てるのかな。ただ単に観光に来ている。ドラマのロケ地に行ったりというのも私としては多少批判的に見ています。なので、はじめに「百聞は一見に如かず」と言いましたが、実際に韓流に興味をもって、韓国に興味をもったことを1つのきっかけとして、実際に韓国の人と話し合うこういうような場をもっともっと増やして行って、また40代50代の方も実際に韓国の人と触れ合って韓国の本当の人を知ることが大事なのではないかなと思います。

シン・ヒソク 韓国の二重的な見方ということが分科会のなかでお話が出たんですが、私はその分科会ではなかったので、その二重的な相反する見方ということについて、もう少し詳しくご説明していただけますでしょうか。

ドラマは好き、デモ報道は気分が悪い？

チョン・ダフン たいへん重大なことではありません。韓国人の内面には歴史的な背景があるので、それについては植民地の経験が、年配の方にせよ、若い人にせよ、気持ちのなかで日本に対して反日的な気持ちがある。ところがその反面には、その一方で日本文化に対しては本当に韓国社会一般にもうしみわたっているので、歴史的に見ると排他的に感じながらも、でも、慣れ親しんでいる部分があるということなんですね。ですから、そういう相反する見方があって、日本人もそうなのではないかということをお話をしたんです。

また、先ほど私が質問した、日本が韓国人にもっている二重的な相反する見方というのについて整理をしますと、文化的には慣れ親しんで、歴史的にもそうだとおっしゃったんですが、それはちょっとおかしいと思うんです。反日デモなどの報道によってちょっと気を悪くするというお話をおっしゃったんですが、なぜそのような反日デモをするのかという背景についての話がされないんでしょうか、それについてもうちょっとお話ししたいと思いますが。

岸 おそらくそういった、あまりも日本に対して、たぶん韓国の方でもそうだと思うんですが、日本に対して本当にたぶん報道されている部分が一部の人ですごく批判的な面であるのでそういうふうに感じると思うのですが、ただそう感じる人というのは、前半にもありましたが、「従軍慰安婦」の問題とか、歴史的背景というものはおそらくそれほど詳しく知っているわけではないと思います。それなので、一方的に自分が責められているという感覚が多少あるのだと思います。

唐木 そのことについてなんですけど、確かにやはり吉濱さんの前半での発表でもそうだったんですけども、教育を通してあまり歴史教育がなされてこなかったことが原因で、やはり40代50代の人の方があまり歴史的な日本の行為に関して知らない人が多いと思うんです。そういうことに関して知らないがために、そういう反日的な行動をしても自分が何を責められているのかわからないという人もやはり多くいると私は思っています。

シン・ヒソク 1つ質問があるんですが、このような歴史問題が起きるたびに韓国でも反日デモが起きますし、中国でも反日デモが起きます。そういった報道を観るたびに、韓国と中国の若干温度差はあるものの反日という動きについて違うように受け止めてらっしゃるのでしょうか、それとも同じように受け止めてらっしゃるのでしょうか、どうなんでしょう。つまり同じだと言えば同じでもありますし、違うと言えばどこが違うのか、関心がどう違うのか、ちょっとそれについておうかがいしたいと思います。

質問は、日本の学生にです。

唐木 いまの質問に対して、答えられる方はいますか。

杉本 いま自分は、大学のゼミでちょうど東アジア政治というところをやっています、先生は中国専門の方なんですけど、そこでやっぱり春にあったことでどうしてもこれが具体的に上がってきますんで、やっぱり韓国で起きてるものと中国で起きてるものというのは全然性質が違うと思うんですね。というのは、起きた規模も違う。同じようにクローズアップして観てるから、韓国も中国もすごくたくさんやってるように見えるけど、いま皆さんソウルに住んでいる人たくさんいると思います、そんな街中で

デモ隊で埋まってましたか、埋まってないですよ、そういう感じだと思うんですね。

でも、今回中国の上海とか北京であったようなのはなんか本当に人数がどうも多かったらしいんですね。というのはその先生から聞いたんですけど、やっぱり友達は中国人なんだけれども、北京とか上海に住んでる人がいてすごい人数がいたと。しかも今回私たちが大学で話し合っている程度なんとなく見えてきたのは、中国の場合は国のなかに抱えている問題、政府から押さえつけられてて、それに対する国内での矛盾に対するはけ口がなかなかないと。そういう意味で反日で一緒になって騒いでいる人もいるのではないかと。そういう意見も出ていました。

ただ、どうしても一般の日本人の人はそこまでは絶対にわからないですし、たまたま僕だってそのゼミで勉強してその話がやっとわかったというだけであって、普通一般にテレビを観てるだけでは同じようなものに見えてしまうので、規模についてもかわらない、いちばん激しいところをクローズアップするから。だから、日本では韓国も中国もまた同じようなことやってるなと思ってる人もなかにはいるんじゃないでしょうか。ただそこらへん、僕は学校でやってしまったのでそういう考えですけど、ほかの日本の学生でなんか思っていることある人がいたら、そっちの意見を聞いたらいいかなとも思いますけど。

靖国神社—すべての日本人が行くわけではない

ノ・ヨンレ　すみません、時間があまりなくて、討論をここで終えなくてはいけないと思うのですが、少なくともここにいらっしゃる30人の方は靖国神社を見てすべての日本はああではない。そしてここにいらっしゃる日本の学生は韓国の反日デモを見て、すべての韓国人がああではないという認識は基本的にもてたかと思えます。ですから、そういうことで結論を出したいと思えます。では、フロアにマイクを渡したいと思えます。何か質問、コメントがありましたらどうぞ。

会場参加者(女性)　30代です。30代の意見をちょっと聞いてもらいた

くてコメントさせていただきます。私は大久保で日本人と韓国人の交流と、キリスト教の宣教のために建てられた教会のメンバーなんですけれども、去年その教会が大久保にできたんですね。韓国語を学びに来る方がぼちぼち増えてるんですけれども、実際に韓国の教会に来て韓国人と一緒に交流したり、韓国の食べ物を食べたりとかしようとする人はなかなかなくて、それがなぜなのかなとずっと考えていました。

さびしい30代40代女性が韓国ドラマにはまる

私の友達で、特に結婚している30代の女性が韓流ブームにもものすごくはまっていて、なぜはまっているのかと言うと、家庭のなかで本当に癒しが無いということなんです。いま日本の30代の男性はものすごく会社の中で過酷な労働条件を強いられて、本当に仕事が大変で家族をかまう余裕がないという男性が多くて、30代の女性はエネルギーもありあまってますし、まだ子どももいない人も多くて、本当に旦那さんに相手にしてもらえないし、対話もできないという寂しい状況のなかで「冬のソナタ」のドラマなどにはまって、実際に私の友人でもたくさんいるんですけれども、旦那さんおいて韓国に語学留学したり、子どもつれてホームステイしたりとかいう人もいます。悲しいことなんですけど、家庭が崩壊した例も2、3知ってます。

私自身もそういった体験があったりするので、ここはプライベートなことを言う場ではないので差し控えますけれども、本当に日本のいまの30代40代の女性は本当に癒しを求めています。それで韓国の韓流ブームに乗って韓国の男性って素敵だなと思うのがまずきっかけになっている人も多いんじゃないかなと思います。ただちょっと幻想を抱きすぎるところもあり、すごく韓国の男性が優しくして礼儀正しくて、対話、コミュニケーションを本当にしてくれると思っている人が多いんだと思います。さっき岸さんがおっしゃいましたように、これから実際に韓国の方と付き合うとか、交流するとかもっともっと討論するとか、そういうところを通して幻想ではない韓流ブームが起きたらいいなと思います。だから、うちの教会などに

ももっと韓国人と触れ合うために来てくれる人が増えることを願っています。

日本に対しても韓国に対しても、2つの印象があるという話がきょう聞けて、とても興味深く参考になりましたし、私も韓流ブームの一面しか知らなくて、本当に日本と韓国のあいだに深い歴史的問題があったということをごきょう教えていただいて感謝しています。これからもうちょっと勉強したいと思っています、ありがとうございます。(拍手)

ノ・ヨンレ もう少し、お話ししたいことがある方はいらっしゃいましたらうかがいましょう。

会場参加者(女性) 皆さんこんにちは。私は山下と申します。おばさんです。ちょうど20代30代世代の気持ちと40代50代の世代の気持ちの両方がわかる年ですので、両方の立場から述べたいと思います。

個人的に興味をもったのが、チョン・ダフンさんの先ほどのトークのなかで、日本人が韓流ブームに乗ったのは商業ベースという指摘もあったんですけども、これは韓流だけではなくて日本人が芸能人に対し何か行動を取るときには必ず商業ベースに乗かってしまう傾向は日本にあります。例えば、日本の中でも芸能人を追っかけて何かグッズを買ったりとか、あと芸能人のお店が東京のあるところに連れてバーツと並んだり、そこに人々が群がるという傾向がありますので、韓流だからといったことではないかと思います。ただ単に憧れとか追っかけのような感じで乗ってるだけですので、韓流ブームだから商業ベースに乗ってるとか、そういったことではないかと思います。

暴力的反日行動は嫌う傾向

それとあと、韓流ブームを受け入れているのに、反日デモが起きて嫌な気持ちにする日本人の年配の方がいるということなんですけれども、日本のこれ、価値観の違いだと思うのですが、例えば日本の中でも、韓国だけではなくてロシアとの問題で領土問題があります。いまの日本人の場合には、何か暴力的に国旗を焼いたりとか物を破壊したりということはあまり

好まないんですね。例えば、何か問題があつて相手に嫌なところがあつても、相手の国旗を焼くとか、何か物を壊したりといった破壊的なことはあまり好まない傾向があります。ですから、韓流ブームを受け入れても、何かそういった暴力的な面を見てしまうと日本人のなかでせっかく芽生えた韓流のいい面も壊れてしまう傾向もあるんですね。これはただ価値観の違いだと思います。ただ、同じ隣同士の国であっても価値観は違いますので、きょうの皆さんのようにおたがい違うところを見つめあつて、より発展的に建設的な意見を出し合つて問題を解決していくことがいちばん大事なんじゃないかなと思ひました。ありがとうございます。(拍手)

ノ・ヨンレ 時間の関係からフロアからの質問を以上にしたと思ひます。ご意見を参考にしてこれから私たち頑張つていきたいと思ひます。最後の発言になります。最後にビデオに映る最後のチャンスだと思ひます。最後に一言ずつなんでもかまいませんので、今後の日韓関係の問題とか、あるいはこのプログラムに参加してどうだったとか、簡単に一言ずつお願ひしたいと思ひます。最初の自己紹介とは逆の方向にお願ひしたいと思ひます。

野田 中央大学2年の野田真理です。今回参加したのは、本当に大学でお世話になっている教授の紹介で来たということで、この日韓フォーラムの存在自体を私はあまり知らなかつたんですが、今回参加して、とても意義深かつたと思ひます。皆さんと行動を3日間ともにできたということもそうですし、さまざまな意見交換ができたということで私自身の間違ったイメージもいろいろ変わりました。あと、私もいろいろな問題に対する問題意識も生まれてきましたし、この機会は本当によかつたと思ひます、ありがとうございます。

河西 中央大学法学部の河西智美です。きょうのこの討論会、そして、昨日おとといと皆さんと一緒に過ごせて私が抱いていた韓国というイメージ、アジアというイメージがとてもいいものになりました。私自身、以前から韓国に対してあまり本当に無知に近い状態だったので、とても本当に皆さんとこういうふうな会をもてたこと、このような友情が生まれたこと

にとっても感謝しています。これからもよろしく願います。

吉濱 同じく中央大学法学部の吉濱しずかです。とにかく皆さんと出会えてよかったと思っております。きょうみたいに、「従軍慰安婦」とか文化についてまじめな話ができただけはもちろんそうなのですが、韓国にも油揚げがあるんだよとか、そういう話できて近い国になったと思います、ありがとうございました。

キム・ジュヒ ソウル女子大学のキムです。今回のフォーラムを通じていつも考えるときに、国家、女性、そういったアイデンティティを個人レベルではなく、国家レベル、あるいは女性というレベル、そういったところから考える傾向があったと思います。

国や女性次元でなく個人として考えていきたい

私も、いつもアイデンティティを考えるときに、個人的な次元で、自分の考えのままに今後生きていきたいと思えます。直接こうやってお話ができる機会が与えられたことに感謝しますし、実際にパネリストとして参加された方、傍聴者として参加された方、メディアを通してでなく、直接日本のことについていろいろお聞きできたことがよかったと思えます。歴史問題についてはいろいろな認識の違いがあるということもわかりましたが、その違いを認識することができる、そういった機会になったということが非常によかったと思えますし、その出会い自体が非常に私にとって意義深いこと、ありがたいことだったと思えます。

キム・ミンジョン コングク大学院のキムです。2つのテーマでこれまでお話し合いをしてきたわけですが、2日間の準備、そしてきょうのフォーラム。時間がいっぱいあったと思う一方で、あまりにも時間が短かったという気もします。個人的に、あるいはまた別のフォーラムを通じて、またいろんなお話しをしたいと思っています。皆さんに会えてとても幸せでした、ありがとうございました。

小宮 今回、日韓フォーラムに参加しまして、日韓のあいだにはいろいろな問題があるんですが、日本人も韓国人も中国人もアメリカ人もやっぱ

り問題っていうのはいろいろありますが、1人1人個人というのは違って1人の人間として私は、もっといろいろな人と会いたいと思いますし、またいろいろな人の意見を聞きたいと思いました。今回皆さんと出会えて、こういう場が与えられて本当に楽しかったです、ありがとうございました。

井口 中央大学の井口弘美です。日韓関係は日本における韓流ブームで、まず大きな一歩を踏み出しているとは思いますが、まだまだみんな歴史問題についての認識が浅かったりとか、そこから抜け出せないでいると思うんですね。ですから、これからはもう二歩目を踏み出せるように、それぞれ個人で頑張っていきたいと思います。今回このような場をいただいて、ありがとうございました。

突っ込んだ話ができ、もっと人に会いたい

モ・ユヨン 1年間（日本に）留学していたときに大学生たちと一緒に授業に参加したりもしましたけれども、こういった話をしたことはなかったので、非常にきょうはいい時間でした。韓国と言えば焼肉、キムチという話しか出ないんですが、今回は「慰安婦」ですとか韓流問題、そういった突っ込んだ話のできる非常にいい機会だったと思います。今後とも皆さんともっと出会って、こういった突っ込んだ話のできる機会があればいいと思います、ありがとうございました。

パク・ジイン ウォンガン大学のパクです。短い時間でしたが非常に意味深い時間だと思います。2つのテーマでお話しをしましたが、若干微妙な立場の違いというものもあったかもしれませんが、そういった問題意識をもったという意味でも非常に意味のある場だったと思います。今後とも引き続き交流を進めながら、多くの問題について話していけたらいいと思います。素敵な時間だったと思います、ありがとうございました。

チョン・ダフン 両国間に存在する問題、2005年のいまを生きる私たちにとってさまざまな問題がありますが、文化という前で両国を見るときにより近い国と感じられると思うんですが、ドラマだけの主人公から文化というものを感じていた、そういった幼稚な部分があったとすれば、今後両

国間の関係は歴史を中心とする、そういった男性的なそういった部分ではなく女性的な交流、そういったものを提案したいと思いますし、この討論がそのスタート地点になるのではないかと考えています、ありがとうございました。

この友情が私の歴史の1ページに

キム・ハラ イーファ女子大のキムです。歴史問題、韓流問題、いろいろお話をしましたけれども、いろんな問題が韓流によって新しい可能性を示したということは非常にうれしいことだと思いますし、歴史というのは、学ぶことによってそれは歴史として伝わってくる。今回のフォーラムを通じて日本の学生から感じた友情といったものが、私の日本に対する歴史の1ページになると思います。日本の皆さんにとっても韓国の歴史の1ページになればいいと思います。今後いい気持ちで、こういった問題解決にあたっていければ素晴らしいと思います。ありがとうございました。

脇田 来年から国際法専攻で大学院で勉強することになっていまして、国際法はそもそも国と国の法律ですけれども、やはり現在、市民社会の存在感というのが非常に大きくなっている。それをどう考えるという問題関心からこのフォーラムに参加したんですけども、やはり常々理論を研究するのにあたって宙に浮いた議論をしてしまうと、この機会を通じてその宙に浮いた議論というものを地面に近づけることができたかなと自分で感じています。また皆さんとの出会いは純粋に楽しいものでした。ありがとうございました。

唐木 今回このような素晴らしいフォーラムに参加させていただいて本当に私は光栄でうれしく思っています。特にやはり歴史問題に関しては私も韓国人の友人とはなかなか話す勇気もないし、あまり自分として避けていた面もあったと思うんですが、今回このような機会を通して話せたことをすごくいい機会だと思っていますし、あと韓流に関してもこのようにすごくまじめに韓流を扱ったことはなかったので、すごく貴重な機会だと思います。本当にありがとうございました。

ノ・ヨンレ 過去は現在で変えることができません。過去を未来へと変えることはできません、現在が未来につながるんだと思います。現在の視点からわれわれは未来を設計する、そういった貴重な時間だと思います。私たちの仲間みな最後に仲良く兄弟のように過ごすことができたいへんうれしく思っています、ありがとうございました。

クォン・ユソン イーファ女子大学のクォンです。歴史というもの、文化というものは非常に範囲が広いものです。ですから、この短い時間で言い尽くせなかったこと、解決策などについてもさまざまな意見がありましたけれども、言い尽くせなかったことがあったということは残念ですが、先ほどもお話がありました、こうした問題について日韓両国の学生が一堂に会したということ、これ自体に非常に大きな意味があると思います。また、個人的には、日本に対してイメージが非常に大きく変わる、そういったいい機会だと思います。今後一緒に解決しなければいけない、いろんな問題について、一緒に努力していきたいと思えます。

シン・ヒソク シンと申します。非常に突っ込んだ議論ができたと思います。こういった機会を準備していただいた皆さんに心より感謝を申し上げます。さまざまな意見、まあ意見が必ずしも一致したわけではありませんけれども、私はこれはスタートであって、これですべてではないということです。今後韓国の皆さん、日本の皆さん皆一緒に頑張って両国関係の改善のために頑張っていけたらいいなと思えます。今後ともよろしくお願ひいたします。

古山 今回のフォーラムを通じて日韓の差異であるとか、そういった認識の違いであるとか、そういったものをよく認識できたと思います。こういうふう話し合って、国とか違うけれども同じ人間ですし、笑って泣いてそういった人間ですから、これからはどんどん話して問題解決に向けて努力できるのではないかと思っています。そういった意味で、これからは希望的な見通しが見えたんじゃないかなと思えます。またこういった場所を得られて本当にうれしく思えます、ありがとうございました。

岸 早稲田大学2年の岸加那子です。正直言って、前半の「従軍慰安婦」

問題、私はちょっと自分があまりにも知らなすぎるなということを痛感しました。皆さんそういう専門で勉強している方もいらっしゃるようなので、ちょっと話を聞いていて本当自分はこれではいけないなということを改めて感じました。起こしてしまった加害者、加害者側という日本の人々が普通の教育を受けていたのでは私のように知らない、無知であるっていうような人が多いのではないかと感じました。それなので、こういった実際の事実を知って語り継ぐ、2度とこういうことを起こさないという姿勢を日本人ももっともっていきることが大切だなと感じました。私は来年1年間韓国に留学するので、これからもっと歴史的なことを学んでいきたいと思えますし、またこれからの日韓関係を少しでも改善するために少しでも力になれるそんな人間になりたいと思えます。ありがとうございました。

嘉村 早稲田大学2年の嘉村です。私はいままで韓国に行くことがあっても、こういう今回のような問題について話し合ったりする機会はなかったなので、このフォーラムは私にいろいろなことを気づかせてくれたり考えさせてくれたりしたという点で本当によかったと思えます。私も過去の歴史などについては無知な部分がすごく多いので、これからきちんと勉強していかなきゃいけないなということをすごく感じました。このような問題について、未来を担っていく私たちのような世代の人間が一緒に考えることができたというのは本当に意義深かったと思えます。これからも1人の人間として、過去、それから現在、未来についてきちんと考えていきたいと思えます。きょうはありがとうございました。

貴重な機会、今後も継続したい

キム・ジェフン クェンドン大学のキムと申します。今回のフォーラムを通じて、これまであまり関心もなく、マイナスのイメージをもっていた日本について、これまでのイメージを壊す貴重な機会だと思えます。こういった場を用意していただいたイー教授に改めてお礼申し上げたいと思えます。

パク・ミヒ クェンドン大学のパクと申します。まず韓日・日韓の歴史、

文化について日本の皆さんと直接こうしてお話しのできる時間がもてて、非常に有益な時間だったと思います。こうしたフォーラムが今回だけで終わるのではなく、今後ともおたがいに連絡を取り合って情報交換できる、そういった関係になれたらいいなと思っています。

高木 高木理と申します。本当に人との出会いと関わりがいちばん大事なことだなということを深く感じた3日間だったと思います。日本と韓国のあいだには少なくない問題がありますが、昼間はどんなに激論を闘わせても、夜には一緒にお酒を飲める関係をいまは築けているということは本当に大切なことだなと思います。近くて遠い国と呼ばれていた日本と韓国ですが、僕たちの出会いから日本と韓国すべての人にとって近くて友人のいる国になれるように僕たちから頑張って関係を築いていきましょう。

杉本 早稲田大学3年の杉本です。実はいま言いたかったことを横にいる高木君に言われてしまったので、何を言おうかといまちょっと一瞬パニックになっていたのですが、きょう、特に「慰安婦」問題、センシティブな問題のところに関してはどうしてもみんな熱くなってしまう、そのように思いました。ただ、いま横で言っていたように昨日おとといと夜遅くまで一緒に飲んでいて思ったのは、こういうふうに仲良くなれば、実際特に今回早稲田から来てる人たちは韓国にどっぷりつかってる人が多いので、そういうふうに仲良くできれば、たとえ日本と韓国で政治的なところでどんなに関係が冷めても悪くなっても、こういう一般的ないい友達に住んでいる国と置いていけば、決して関係が崩壊するということはないと思っています。

最後になりましたが、今回このような場を与えてくださいましたアジア女性基金のスタッフの方々お世話になりました。イー・ウォヌン先生に感謝したいと思います。ありがとうございました。

キム・グァンイル ハニャン大学のキム・グァンイルと申します。きょう一言も発言できませんでしたが、シンさんと先ほど休み時間に外に出て、きれいな日本女性を見かけてついていったがために道に迷ってしまいました。韓国と日本は、近くてもおたがいにあまりよく知っていないというの

が実感です。今回の私の経験は、日本を理解するのにたいへん役に立ちました。皆さまも同じような経験をしていただきたいと思います。ありがとうございました。

イー・ヨンスン　クェンドン大学のイー・ヨンスンと申します。今回の交流を通じまして高木君、そしてそのほかの友人たちと毎晩お酒を飲みました。いま日程は2日残っています。今回の交流を通じて、このフォーラムを通じて「慰安婦」問題とか、また文化交流に対しての問題について話し合いました。こういうむずかしい点について一歩ずつ接近していけば、いつかはフォーラムではなく本当に韓国と日本、両方が共有できるような、そういう世界に到達できるだろうと思っています。より明るい姿でおたがいに会えるような関係になりたいと思います。ありがとうございました。

パク・キソン　クェンドン大学のパク・キソンと申します。私はまず、こういうフォーラムに初めて参加したということをお知らせします。お会いできて本当にうれしかったですし、また、きょうこの場に参加することができて、たくさんのお話を学ぶことができました、たくさんのお話を学んで帰国します。これは本当に代えがたい経験ですし、よい思い出になりました。その点、感謝申し上げます。また、イー・ウォヌン先生にも心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

国家でなく個人と個人の関係づくり

チェ・チャンホ　今回のフォーラムを通じまして私、たくさんのお話を学ぶことができました。国家、社会という見方から個人と個人とのあいだで関係づくりができて大変うれしかったです。今後このようなことを、私が死ぬまでこういう取り組みを続けたいと思っています。

ノ・ヨンレ　おたがいにお疲れさまでしたということで、拍手をしましょう。(拍手)

唐木　では、最後に和田春樹先生とクェンドン大学のイー・ウォヌン先生から一言ずつお話ししたいと思います。

和田　長時間ご苦勞さまでした。非常に意見は対立するところがありま

すけど、韓日の若い人たちが異論をめぐって討論を発展させていくように意見を次々に出して、そして内容を深めていくところは非常に気持ちもよく、また希望を与えるものでした。もちろんアジア女性基金としましては、それが議題になっておりましたので、アジア女性基金のほうから少し申し上げるべきことはございますけど、それはまたそれで別の機会にまた申し上げたいと思います。要するに「慰安婦」問題は非常にむずかしい問題で、しかしそれは全体の問題のやはり一部であることは間違いありません。それから2005年といういまの年は1995年からの10年間の歴史の経験がありますので、皆さんはその10年間の歴史の上に立っていま議論をなさって、これから確認されたこの新しい時代を開いていこうというその確認を皆さん方の立っている場所でそれを実現していってほしいと思います。大いに期待しております、どうもありがとうございます。

相手に耳を傾ける勇気と忍耐力、学生たちに学んだ

李元雄教授 学生の皆さん、討論を聞きながら私もたくさんのことを学ぶことができました。大人の世代として「恥」ということにも考えてみます。なぜわれわれ大人の世代は、こういうふうになんか心からの対話ができなかったのかと、残念に思います。

私の時代は過ぎました。日本の大人の世代も韓国の大人の世代も、皆さま方に期待をします。皆さまがきょう見せてくれた成熟した態度、そして違う態度に耳を傾ける、そういう勇気と忍耐力がわれわれには足りなかったと反省しています。歴史も違いましたし教育の背景もさまざま異なっておりました。

韓国は分断国家です。そしてわれわれは、いまだに北側の同胞とは和解できない状況に置かれています。日本との和解、そして日本人との和解、そして北朝鮮にいるわが同胞との和解。——このように、われわれ韓国人にはたくさんの歴史的な課題が残っています。皆さま方にあまりたくさん責任を負わせたようで申し訳ありませんが、この場におきましては、よい話をしてくださってありがとうございます。また、たくさんのことにつ

いて、私も学ぶことができました。その点改めて感謝いたします。ありがとうございました。

ノ・ヨンレ 感謝したい方たちがたくさんいらっしゃいます。実は言葉の壁があったのでできなかったんですが、今回私は同時通訳ってというのは初めてなんです、個人的にはいろんな笑い話もありました。きれいな学生なのに通訳は男性の声だとか、私が話をしているのに通訳はきれいな女性の声だったとか、同時通訳ってこういうものなんだなと思いました。初めて経験された方たちは、でも初めてにしては大変よいやり方でした。通訳者の方たちにも感謝申し上げます。(拍手)

では、このフォーラムをまとめたいと思います。50年前、そして100年前とは異なり、日本と韓国のあいだは本当に親しくなったと思います。われわれが知りつつ、また知らないあいだに親しくなり、おたがいに親しみを感じるようになったと思います。最初はあまり親しくなかったんですがすぐに親しくなって、お酒を飲んだり写真を撮ったりするわれわれの姿から韓国と日本の未来を、そして未来を垣間見るような気がいたしました。

たぶん私たちが大人になって、大人としての発言をするような時代には、10年後になるか、20年後になるかわかりませんが、明るい両国の未来になると期待しております。そして、この場を設けてくださったすべての方たちに感謝いたします。またきょう参加してくださった方たち、そしてフォーラムに関しましては、このわれわれにぜひ期待して下さるようお願い申し上げます。世界の中の日本と韓国ということについて、ぜひともご期待していただきたいと思います。参加者すべての参加者の皆さま方にお礼を申し上げます。きょうは本当にありがとうございました。(拍手)

司会 長い時間、本当に皆さん、ありがとうございました。ここで本日日本の学生パネリストを紹介してくださった早稲田大学国際教養学部の布袋敏博先生が会場におみえになっていらっしゃいますのでご紹介させていただきます。布袋先生です。(拍手)

それから、すでに拍手でお礼申し上げましたが、本日通訳をしてくださった3名の方のお名前をご紹介します。イー・ジョンミさん、イー・ヒ

ギョンさん、パク・フィさんです。たいへんお世話になりました、もう1度拍手をお願いいたします。(拍手)

事務的なことなんですが、まだまだお話しは尽きないと思いますので、このあとに交流会を予定しています。一般にきょうご参加くださった方もそちらにお越しいただけますので、会費制となっていますが、ご参加いただけますので、ぜひいらしてください。ロビーのほうに集まっていれば一緒に集合して行きますので。会費はちなみに3000円です、よろしくをお願いします。

きょうの日韓、韓日のパネリストの皆さんは、この公開フォーラムに向けて2日間分科会で議論を重ねてきました。それだけではなくて、一緒に町を歩いたり一緒に食事をしたりとかして、いろんな話をされたんだと思います。同じ時代を生きる皆さんが今回こうやって出会えたという偶然というか運命ですか、そういったことにおたがいに感謝して、拍手で終わりにしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

企画

李元雄教授 イー・ウォヌン Lee, Won Woong

韓国・関東大学校

横田洋三教授 Yokota, Yozo

中央大学法科大学院

協力

橋本ヒロ子教授 Hashimoto, Hiroko

十文字学園女子大学

布袋敏博教授 Hotei, Toshihiro

早稲田大学

高柳俊男教授 Takayanagi, Toshio

法政大学

通訳

李希京 イー・ヒギョン

李政美 イー・ジョンミ

朴 輝 パク・フィ

*

【李元雄 Lee, Won Woong】

関東大学校教授（北韓学科）、西江大学校教授

略歴

西江大学校卒、及び同大大学院（政治学博士）修了

コロンビア大学東アジア研究所、

及び東京大学法学部客員研究員を歴任

【横田 洋三 Yokota, Yozo】

中央大学法科大学院教授、国際連合大学学長特別顧問

国際連合人権促進保護小委員会委員

国際労働機関（ILO）条約勧告適用専門家委員会委員

国際法律家委員会理事

略歴

国際基督教大学教養学部卒（教養学士）、東京大学大学院法学政治学研究科
博士課程修了（法学博士）

国際基督教大学教授、東京大学法学部・大学院法学政治学研究科教授、
中央大学法学部教授を歴任



公開フォーラムを終えて、会場で記念撮影

日本・韓国 学生たちの事後レポート

フォーラムにパネリストとして
参加した日本と韓国の学生による
(韓国学生分は訳)

*文中、「本」とは、『「慰安婦」問題とアジア女性基金』。
日韓学生ともに参考テキストとした

——韓国留学生から——

忘れまい、22歳の冬、この心、この1週間

梨花女子大学校政治外交学科4年

権 儒 宣 クォン・ユソン

ガタガタ…ほこりが山のように積もっていたトランクを無心に取り出した。身体中あちこち調子が悪く、喉がからからに渴いていることから察するに、どうやら風邪を引きかけているようである。’99年以後6年ぶりに再び訪れる日本なのに、なぜか少しもドキドキときめかない。戦争時性奴隷と称する「慰安婦」問題、この問題を討論するのであるが、私はあまりにも準備不足であったし、このような形でこの問題を話し合いに行くということは、被害者のハルモニたちに対して恐れ多い事であるように感じられたからである。

私の気の重さに合わせたかのように、道路も渋滞していた。普段なら1時間30分で着ける距離なのに2時間経っても着く見込みがない。バスの中で、少しでも資料に目を通しておこうとしたが、どうにも頭に入って行かない。窓の外に見えるソウルの街は、何に不満があつてなのか、額にしわを寄せているかのようだった。今回、私が日本に行って本当に満足出来るような結果がえられるのであろうか…。

慌ただしく手続きを終えて、いよいよ飛行機が離陸した。様々な関心を持って全国各地から集まった学生たちがそれぞれに話を始める。開発問題、南北問題、統一問題そして日常の雑多な問題まで、若者たちが集まると、疲れているにもかかわらず話が絶えない。風邪を本格的にひいた身の私も、少しずつ、いつのまにか対話に入り込んでいた。人々との出会い、それにはいつも何かを直し変えて行く力があるようだ。ふと、このようにできたら、日本の学生たちともこのように感じ合えるのであれば、どんなに難しい問題でも、とりつくしまもなく感じられる問題でも、解決不可能なことばかりではあるまいと感じた。そして飛行機の中で感じたこのことは、そ

の通りになった。今回私が経験した日本での一週間は、韓国の学生同士、そして韓日両国の若者ら同士がお互いの違いを認識して、通じ合おうとする初めての試みになったと思う。

歴史問題は常に解決しがたいものである。もう過ぎ去ったことであるし、それが現在に示唆することは物質的な証拠として証明できることではないから、即ち、精神として残っていることであるから難しくならざるをえない。しかし、これを解決していかなければ、未来のための努力も砂上の樓閣となるだけである。この度、私たちの扱った問題は、その中でも最も敏感な問題だった。「慰安婦」(実のところこの単語にも同意することができない)が国家と民族からみな離れて、人間として他人にできないようなことが戦争という名分で行われて、これについてまだ誰もが納得できる解決策が出ていない今日、韓日両国の学生はこの問題をめぐって長時間話を交わした。

その席で両国の学生は、「慰安婦」問題の再発を防止するための市民社会連帯と教育を通じた啓発に努力しようという点では考えが一致した。しかし「慰安婦」の存在は認めて謝罪するが、これを評価する必要はないという日本の学生らの言葉で、政府次元での国家賠償、即ち政府が「慰安婦」問題についてきちんとした評価づけを行うことを目標としている私たちとは、視角差があまりにも大きいということを実感した。もちろん、何十年も続いてきたこのようなわだかまりが、たった二日で解決されはしなかった。そうだからこそ、きりがないと分かりつつも熱く意見を戦わせ続けて、お互いの違いを認識していく時間を持った。たとえ目に見えた成果はなくとも、このような試み自体が、私たちがお互いに扱いにくい問題を取り上げて理解し合おうとしたこと自体が、十分に価値のあることであったと思う。

これに続いた韓流に関する話し合いもやはり同じだった。文化の交流とその中で発生する多くの流れとお互いの違う点を理解していき、その中の思考と視角の違いを理解しようと努力した。

私たちは、この度の機会を通じて、今までとは異なる相互理解の方法を

学んだように思う。だからといって勿論、彼らの立場を理解するとか、彼らの立場に同調することではないが、彼らがこのような問題に対してどのように思っているのかを知ったこと自体が、両国間の問題解決のための新しい接近方法ではなかったであろうか。

フォーラムを終えて、普通の若者たちのように明るく笑い、騒ぎ、楽しむお互いの姿を見ながら、お互いに少しも違わないということを実感した。いつも遠い国の人々、そして時には争って勝たなければならないと思っていた人々が、このような姿なのだということに驚いた。また一方で、このような暖かい気持ちが複雑な懸案のために薄められていき、ついには関係が断たれて心の行き来が消えてしまうということに切なさを感じた。新しい方法で、皆が傷つかずに話し合っ心を開くことのできる方法で、お互いの問題に対して近づいていったらよかろう。22歳の冬に感じたこの心、人と人との間で、関係と心の交流の大切さをつくづくと感じさせてくれたこの1週間を忘れなければ、これからの私の人生はこの前よりずっと豊かになるであろう。

念を押そう。忘れるまい、日本での1週間。

すべてのものを超越した、人と人（境）の見えない、心の通じ合いを感じた日々。

私たちの無関心から振り返ってみよう

関東大学校政治外交学科2年

朴基聖 パク・キソン

まず、この本を読む前まで私が持っていた「従軍慰安婦」問題に対する関心と知識が非常に浅かったということを告白しなければなりません。私の知っていた「慰安婦」問題は、日本の植民統治時代に我が国の女性が、日本軍人の性的欲求解消のために日本軍の慰安所に強制連行されて、一生、女性としてそそぐことのできない恥辱と苦痛を負わされて、生きていたと

いう程度でした。またそれに対する補償が、半世紀経った最近になって、ようやく少しずつ動き出している事実を、マスメディアを通じてニュースの話題として聞いて知っているという水準に過ぎませんでした。

しかし、この本を読み進むうちに「表面的に知っているつもりであったけれど、ころろの中では知的欲求を抱く他にすべのなかった」「従軍慰安婦」問題を巡るさまざまな事実を元にした陳述に対して納得することができ、また、そのような「事実」など中には私を憤慨させたものもありました。また別の部分では、韓国人である私にも関心の足りなかった問題に対して、むしろずっと関心を持って歴史を正すために乗り出した日本の市民団体の努力に、恥ずかしさを感じもしました。もちろん戦争を経験していない私たちの世代は、豊かで自由な世界で生きて行っているし、そのような観点で「慰安婦」ハルモニの補償問題を論じても、ともすると低いレベルにとどまってしまうかもしれません。しかし過ぎ去った昔の事を正してこそ正しい未来を期待することができるのであり、また必ずそうしなければならぬ問題だから、それでも私たちはこのような問題に対して、長い時間をかけて補償問題、及び国家的立場での日本側の公式的謝罪を促しているのです。まず韓国が日本側に要求している内容をみると、「従軍慰安婦」の真相を糾明し、その真相を公開して謝罪をすること。そして慰安婦慰霊塔を立てること、被害者本人、及びその遺族らに賠償をすること。教科書に正しく事実を記載して、新しい世代に歴史を正しく教えることなど6項目です。

このような問題を韓国側が6年間も追及したにもかかわらず、日本側は「国家と軍は関与しなかった」と言う立場のみを主張する、不誠実であり不正確な返事のみを繰り返しました。このような立場の表明は、後に韓国国民の反日意識を一層高める要因に作用し、これに危機感を感じた日本の渡辺外相は「ある程度は軍が関与したと思う」という言葉に変えることで、その場その場を凌ぐ水準にとどまりました。

私はこの内容を見て、日本政府が公式的な立場での「慰安婦」の存在に対する事実認定を忌避する理由に対して、具体的に知りたくなりました。

単純に慰安婦の存在を認めた時、それが自国民らに拒否感や羞恥心を与えることを避けているのか、あるいは韓国との独島（竹島）問題やさまざまな歴史歪曲に対する軋轢が深くなっている時点で「慰安婦」の存在を認めることは、他の懸案にも少なからず影響を及ぼして、両国との外交において不利に作用しかねないと予測してなのか。考えて見れば、そのようなこともあり得るという気がしました。

日本からこのような反応が出た要因として、韓国政府の手ぬるい問題解決への努力姿勢にも問題があると思います。その中の代表的な例が、1993年、大統領に就任したキム・ヨンサム（金泳三）大統領が就任直後に「韓日条約で戦争処理は解決され、日本に物質的補償は要求しない」と宣言したことです。これで当時「補償協定」を締結するという構想が水泡に帰しました。

しかし日本国内では、ちょうど敗戦50周年を控えて「植民地支配と戦争を反省する国会決議」を求める市民運動が広がっていき、そのような動きは社会党に波及し、それに反対する自民党や新進党議員の反発運動も起きました。このような日本国内での多くの動きは、十分とは言えないまでも、それなりに進歩したと思われました。その後1995年8月にはアジア女性基金によって新聞広告による募金が始まりました。基金の業務は、

1. 被害者に国民から募った補償金を渡すこと。
2. 政府の出す資金で被害者に医療福祉事業を実施すること。
3. 「慰安婦」関連の資料を集めて歴史の教訓にすること、などでした。

またこれに加えて、私個人としてもっとも重要だと思う、日本総理による「お詫びの手紙」を送ることも日本政府は約束しました。「慰安婦」の苦悩を世界に伝えた日本のこのような運動は、多くの側面で誉められるに値することだと考えられます。彼らは加害者という意味で過去に自らの先祖が行った行為に対して自省し、そのような姿は日本のみならず他のあらゆる国々に示唆するところが大きいからです。ともかく、当時10代後半から20代初めだった「慰安婦」女性たちはすでに老境にあり、あるいはさまざまな理由でハン（恨）を身に抱いたまま生涯を終えた方も既に多数お

られるとのこと。だから、このような日本側の約束が一日でも早く、時すでに遅しとなる前に果たされて、「慰安婦」ハルモニに少しでも慰めになったらばと願うのです。

それならば、今度は少し違う観点から、私を含めた韓国国民の中での「慰安婦」問題解決に対する認識と重要性がどれ位の水準にあるのかを調べる必要があると感じました。

まず、最近の例としては、「慰安婦」ハルモニをコンセプトとして、ヌードを使って「慰安婦」問題に再び光を当てるという美名の下に写真やヌード映像などを撮ったイー・スンヨンさんと製作会社。私たちがあまりに関心だったから、被害者であるハルモニまでもが商業的手段に利用されても、ただそれを眺めるだけであったということに、私たち自身の無関心を自責しなければならぬと思います。同胞として「慰安婦」被害者の子孫とも言える後世代の「息子」たちがカメラを向けて、被害者らの踏みにじられたイメージを写真を撮っている間中、私たちはあまりにも大人しすぎました。

このような事件が映像メディアに乗せられて世間に詳しく報道されてはじめて、私たち国民は、ようやく誰もが愛国者となってモデルや制作陣を今でも打ち殺すかのように責め始めました。そして非難のレベルは、彼らが過ちを犯した当事者であるにもかかわらず、同情心さえ感じてしまうほどに度の外れたものでした。

このような国民の姿は、なんとも言えない苦々しさを私に残し、その理由を私はしばらく後になって悟りました。すなわち、また何事もなかったかのように元通りの生活を送っている人々の姿を眺めながら、私もまた、その事件についてだんだんと自分の頭の中から消えつつあることを確認して、その答を見いだすことができました。

私たちを日本に比べたら…。もちろん我が国の中でも、日本の市民団体と同じように慰安婦問題解決のために力をつくし、努力している団体がありますが、そのようなことと関連して、その影響力は余りにも弱いというのが私の考えです。

たまに新聞やテレビで、「慰安婦」ハルモニがひどく劣悪な環境下で生涯を終えた姿を見たときに、ただ「可哀相だ…こんな人々もいたんだな…。あまりにも酷すぎる」という言葉をまるで他人事のように吐く韩国人らの姿を見て、私はこの文を書きながらも実に恥ずかしいことだと思わずにはいられません。

私たちは日本に対する問答無用の強い批判や要求を言う前に、まず私たち国民自らが先に反省して、今からでも正しい歴史を知って行くために、少しでも努力をすることが先決ではないかと思います。

主体性を持つということは、非常に難しいと思います。なおかつ民族の歴史を正しく組み立てることは、ずっと難しいことでしょう。しかしどんな恥ずかしい歴史でも我々の歴史であり、それは私たちの子孫たちが担っていかなければならない課題でありましょう。「バカ親でも親は親」というように、私たちの歴史を否定して忘れようとする姿勢よりも、歴史的な事実を認めてその歴史をただし、望ましい未来を計画して建設していくことが、私たちが子孫たちに残す大きい財産であると思います。

あつい友情と思い出を胸に帰国できた

建国大学校政治学科修士2年

金 旻 廷 キム・ミンジョン

初め、韓日学生フォーラムが開催されるという話を耳にして、日本を経験することができるということ自体に興奮した。しかし、出発日が近づき、フォーラムの準備のために様々な本や資料を読むにつれて考えが頭の中でゴチャゴチャしてきて恐ろしくなった。学部の中から歴史問題に係わるサークル活動をしてきたが、私たちのサークルの旗印が反米だった関係上、日本との問題についてはあまり扱わなかったということのみならず、メディアを通じて接してきた「慰安婦」問題、靖国神社問題、それら全てが韓国と日本の関係、ひいては東アジア問題の氷山の一角であると認識し始

めたからである。これに加えて韓国の政治家と市民団体の犯した過ちが視野に入って来ると、日本の友人たちをどんな論理で説得し合意を導き出せようかと、漠々とした気持ちになった。

しかし成田空港に到着して電車に乗り旅館に移動しながら、窓の外に広がる景色を見て、一緒に来た他の学生と話を交わしているうちに、フォーラム自体に対する緊張が少しずつ解きほぐされていき、歴史の中での日本ではない実質的な日本を経験していることに妙な気分を感じた。初日に訪問した東京都庁（展望室、45階）で見た美しい夜景と初めて食べてみた日本式どんぶりの味は今までも記憶に鮮明である。

二日目に、フォーラム本番に先立って本格的な事前準備に取りかかるために、日本の友人たちと対面した。以前シンガポールに半年程滞在した時、多くの日本の友達に出会ったので、少し異なった歴史意識を持つ人々だと思って警戒するよりも、長く付き合ってきた友達に会ったように親しくなりやすかった。もちろん人数の多さと言葉の問題で多くを話し合うには難しい面があったが、同じ主題に対する関心でフォーラムに参加したということ一つ取り上げただけでも、同質感が形成された。日本の友達が勧めてくれた寿司屋で一緒に食事をしてお茶も飲んで、夕方にはお酒も一杯飲んだりしながら多くのエピソードをつくっていき、私たちは一層親しくなったが、いざフォーラム準備に入っていったからは意見の相違が見え始めた。

特に私が担当した「慰安婦」問題分科会では、韓国側学生のなかでさえ意見が少しずつ異なっていたが、内部調律を通じてそれぞれの問題点を整理し、その内容は「慰安婦」自体の問題点である強制動員、戦後処理問題、そして法的賠償に関連した韓国と日本の国家的レベルでの問題、さらに韓国挺身隊問題対策協議会（挺対協）と日本の「アジア女性基金」などの団体の政治性と、解決努力に消極的な面を見せる市民社会的レベルの問題など、大きく分けて三種類であった。

これを土台にした解決策で、「慰安婦」問題に直接・間接に関わっている国の市民団体同士が超国家的なグローバルガバナンスを形成して日本政府に圧力をかけ、人権団体を通じた上からの圧力を導き出して日本政府が個

人賠償を行うようにし、さらに究極的な目標として、二度とこのような人権蹂躪の状況が起きないように教育とキャンペーンを通じて市民意識を拡大させようというものであった。ただ、2回目の集まり（分科会）で、私たち韓国側学生が事前準備をしてきたのとは異なって、日本側学生は前もって発題文を準備して来ておらず、私たちの準備した案をもとにして討論が進行されたので、彼らの整理された見解を知ることが出来ず少々残念な面があったことは事実である。しかし、討論は活発になされた。

フォーラム当日になると、すっかり解けていた緊張感が倍増されながら頭の中は再びゴチャゴチャになり、張り裂けるような胸の鼓動に自分自身が驚くほどであった。私が所属した分科会の主題である「慰安婦」に関した討論では、ある意味で事前打ち合わせの時よりもお互いの意思疎通がままならないように感じた。韓国側はマクロ的な観点で問題を認識し、解決しようと考えた一方で、日本側は極めてミクロの観点で認識を広めることを強調した。結局、時間不足のために無難にまとめ上げざるをえず、論理的過程が欠けたまま「教科書においてさえ、『慰安婦』問題が扱われていない日本の現状下では、まず認識を広めるための努力が必要である」という程度に結論づけられてしまったことはつくづく残念だった。別の分科会である韓流の場合も、主題が皮相的であったせいか熱っぽい議論にはならなかったし、討論後の質疑応答時間にはある人が個人的に信じる特定の思想体系を主張したために、一同が戸惑わされたりもした。

「慰安婦」問題の真実は何であり、アジア女性基金がどのような点で批判を受けているかに対して深く討論するには時間が足りなかったし、さらに付け加えると、お互いを理解して納得させるための論理の不足と、複合的な民族感情による認識の差がとても大きかったように思う。

討論の打ち上げである交流会では、傍聴客として来ていた日本の学生と四十代の女性が、意思の疎通が難しいにもかかわらず同席して今回のフォーラムについて、そして韓国に対する関心を持って話し合いに参加してくれたことは本当に印象的だった。

短いといえば短い3日間の出会いにもかかわらず、お別れするのをいつ

までも惜しがった日本の学生たち。5泊6日の間、同苦同楽して厚い友情を積み上げた韓国の学生たち。そして、この度のフォーラムでご尽力下さった李元雄教授たちのおかげで、忘れることのできない大切な思い出一つを胸に、そして頭の中に抱いて帰って来ることができた。

ただ残念に思うことは、今度のフォーラムが最後になるという噂である。韓日両国の学生が交流するこのようなフォーラムが長く続き、そして広がったならば第二の私、そして私たちのような学生がお互いに対する思いと理解の幅を広げて、少しでも心を開いてこの時代をともに生きて行くことができるであろうに思うのである。

ハルモニの安らかな余生を願って

関東大学校政治外交学科2年生

崔 将 虎 チェ・チャンホ

1. はじめに

この本を読みながら、日本人たちに対する認識に相当な違いがあって、私は本当に意味深く思う。日本人と言え、思い浮かぶことは帝国主義者、歴史歪曲の達人、了見の狭い人々などだった。しかしあまりにも悟るのが遅かった感もあるが、日本の人々が必ずしもそうではないということを知った。過去、私たちは、国家を奪われて全国民は日本の奴隷になり、自由を剥奪されて、労働力は日本の経済的・軍事的目的のために搾取された。それでも足りずに学徒兵の徴用や「従軍慰安婦」、労働力の動員で苦痛を受け、日本軍慰安婦として捕まり日本に性的な奴隷生活を強要された人は10万人を超えると知られている。ある人々は強制に連れては行かなかったと言うが、職を斡旋してやると嘘をついて強制して性的な奉仕をさせたのだから、元はと言え、強制であるというしかない。

第2次世界大戦が日本の敗戦で終わって、韓国が独立してからもう60年経ったが、今日まで歴史問題は解決されないままで残っている。ドイ

ツのような場合、個人補償を主に進められて、誰が見てもきれいさっぱり戦後問題が解決された。しかし日本の場合は、権威主義の政府時代に国家補償を終えて、個人的な補償問題は挙論さえしていない。このような問題は、日本政府と韓国政府ではない日本国民と韓国国民の間の不信につながっている。これを解消するために日本の市民社会のレベルで始められたアジア女性基金の成立には意味があると思う。

2. アジア女性基金の成果

アジア女性基金の役員は、この事業を失敗したと評価しているようだ。しかし私は、この事業は失敗したのではなくまだ進行中だと思う。韓国でアジア女性基金の支援を受けたお婆さんは極少数である。その要因として第一には日本と韓国側の不信感、すなわち根深い反日感情である。

韓国は自生的に挺身隊問題対策協議会という団体をつくって「慰安婦」ハルモニを助ける一方、日本の国家賠償を要求し、またこのアジア女性基金の支援を受け取ることができないように阻んでいる。

彼らは自分らの主張を正当化するために、もう余生が残り少ない「慰安婦」ハルモニを盾にして自分らの理想を実現させようとしている。ハルモニの中にはアジア女性基金の支援を願う方も何人かいる。しかしこれを集団主義的に拒否するようハルモニを説得して、いつ実現するかわからない日本政府の公式的国家賠償を要求している。また基金の支援を受けたハルモニを売国奴扱いし、一部の政治家と知識人は政治的な目的にこの問題を利用して、韓国マスコミも、日本は国家賠償を諦めさせるために民間資金を設立したと主張している。

「慰安婦」ハルモニは皆高齢で、余生が残り少ない方々である。

被害者にとって最も必要なものが、果たして何であるのかを考えて行動しなければならないであろう。

基金支援を願う人は基金を受けられるようにし、国家賠償を願う人は国家賠償を要求できるように、ハルモニ一人ひとりの自由意思を反映しなければならない。団体で縛って国家賠償を要求するように説得し、説得に応

しない場合支援金を打ち切るとかあらゆる脅迫を加えることは北朝鮮のキム・ジョンイル（金正日）政権などのやり口である。我が国は民主主義の国で個人の自由が保障された国家である。

今生きているハルモニも、もう余生があまり残っていない。どこから誰が与えるお金かという問題はあまり重要なことではない。ひとえにハルモニが生きている間、医療の恩恵と安らかに世を去る日までしっかりと面倒を見て差し上げることと、ハルモニの名誉回復をより重要な目的とされなければならない。日本人が自主的に先祖の過去の過ちを謝罪するために募金して、基金をつくったという事実も忘れてはいけない。悪い連中として罵倒するのではなく、私たちとともに進んでいくパートナーと認識しなければならない。

二番目の失敗要因は、日本側にある。基金の創立とともに大沼教授は総理の手紙を引き出すことには成功したが、総理の記者会見にまで導いて行くことはできなかったことが大きく作用した。また、彼らは日本内部の世論を集中させることに失敗した。「従軍慰安婦」問題ではなく、もっと大きな主題と日本国民がおしなべて共感できるような問題を提起して、徐々にこの問題へと集中させていくような方法でなければならず、広告と宣伝に有名芸能人を起用して活用したらば、もっと大きな効果を上げていたはずである。また彼らは、韓国の世論とメディアに自分たちの理解者をつくることにも戦略的に失敗した。

韓国は、他のどの国よりも、日本に対する不信が大きい国である。この点を考慮してもっと慎重に活動しなければならなかった。一度拒否にあったのならば、基金に賛成する団体をもっと集めるべきであったし、世論を動かすことのできるメディア界の大物を説得しなければならなかった。このような失敗の要因を土台にして、過去の市民運動の成功例を注意深く研究すればより良い答えが出るであろう。

アジア女性基金創立者は対象をよく分かっておらず、自分たちでもよく理解することができなかつたから手痛い目にあつた。しかし「慰安婦」ハルモニはまだ生きているし、機会もまだある。

一人の人間の人生を台無しにして放っておいたことの赦しを受けることは容易くないであろう。謝罪して拒絶されれば再び謝罪し、ハルモニの赦しを受けることが本当に正しい姿勢ではあるまいか？

私たちはなぜ「ウリ=われわれ」を叫ぶのか？

ソウル女子大学校仏文学科4年

金周希 キム・ジュヒ

あなた方、あるいは私たちは、なぜ「我々（ウリ）」を叫ぶのか？

〈国家〉や〈性〉という単一な集団として統合し、画一化するのに慣れた私・た・ち。

この度の韓日学生フォーラム'05に参加して、私の感じたことは、このような類のことである。

韓日の学生と討論して頭の中から離れなかった、集団と個人に関するいくつかの考え…。

1. 国家と国家が出会えば

なぜ、私たちは集団主義を利用し、集団主義に慣れているのか。

私たちの考え方は共同体中心的であり、このような考え方が「慰安婦」問題を今まで引きずってきたのである。

韓国政府は、国家という共同体の名をもって、政治・経済的手段で「慰安婦」問題を利用した。

韓国挺身隊問題対策協議会(挺対協)は、女性という共同体の名前をもって、性奴隷被害者女性を単一集団として統合しようとしたが、女性一人ひとりの違いを見過ごして被害女性の苦痛を増大させた。十把ひとからげに被害女性と呼ばれても、一個人としての歴史と判断によって相異なる声が出得るという点を見逃したのである。

韓国人は「被害者」という共同体の名前で呼ばれて来た。しかし、韓国

人の中にもその当時の女性の苦痛を利用して経済的利潤を得た者もいたであろうし、貧しさ故に娘を売った場合もあったであろう。被害者である韓国人は、いまだに外部の加害者にのみ目を向けている。

長い間沈黙させられて来た性奴隷被害女性問題に、なぜそのような長い時間、私たち（韓国人）はこの問題を見逃し、傍観したまま解決することができなかつたのか？ 一個人として身を強奪されたのであれば、貞潔ではない娼婦となろうが、国家的には、国土を侵されたことになる。

家族と社会に背を向けられた昨日までの「娼婦」が、60年が過ぎた今日「民族」の娘に昇華されて、今はもうお婆さんになってしまった人々を受け入れ持ち上げる。そうといっても、そのときに今の私が住んでいて、彼女たちを受け入れていたわけでもない。民族の娘という以前に、人間としての尊厳性を持った人々の問題に、民族主義的な観点では、国土に喩えられる女性の身を侵した他者に、お前らの国の女性を犯せと言える。これらの人権蹂躪が国家という名の下に再び容認されて、同じ問題を繰り返すであろう。

問題は、女性が暴力の対象とされやすいという点である。家父長制、軍事化、軍国主義、民族主義は「女性に対する暴力」を安易に認めるという共通点がある。このような、あらゆる集団主義的側面を、人権的な側面で乗り越えなければならない。

外部に他者をつくり出して利用し、外部の他者（日本）を批判する前に、内部のアイデンティティをしっかりとつって来た歴史（強者）の論理の上で、自らを反省する態度と視線が必要である。

加害者国家＝日本、被害者国家＝韓国という公式は間違っていた。他者というのは外部（日本）ではあるが、内部（私たち）の中にもある。共同体中心的思考を捨てて、人権的な接近でこの問題を解決しようとする試みが、この問題を解決するための最初のスイッチである。

2. 人と人が出会えば

ここに集まった両国の学生らは、フォーラムと交流活動を通じて個人の

声に耳を傾け、他の人の声にも耳をかすプロセスを経た。もちろん声は様々だった。個人的に私は、韓国の学生らとの意思疎通からして難しかった。日本の学生だから意思の疎通が難しいというのは真っ赤な嘘だ！

以前の私は、日本に対する反感、偏見のために、韓日間での意思の疎通など想像することができなかつたのだ。しかし、直接人と人が出会うこの度の機会によって、日本の大学生たちと「慰安婦」問題・韓流問題に対して意見を出し合う席を持ちながら、違いよりは同時代を生きていく若者としての共通点と結びつきを見いだした！

国家という大きな垣根の中で、国家のアイデンティティを本人自身でも分からないまま、身体化された個人にヘゲモニーとイデオロギーを乗り越えることは難しいことである。しかし、この度のフォーラムで私が一番うれしく感じたことは、両国の学生たちがこの境界を出たり入ったりしているという発見だった。国家、男性、女性という大まかなアイデンティティではない個人として、個人が持つ弱点を認識し、もしかしたら強要されていたり歪曲されているかもしれない国家、メディア、巨大資本の論理を疑う姿は、両国の大学生みんなが持つ共通点であった。国家や男性、あるいは女性ができない勇敢な想像を繰り広げる人々（個人）に、私は韓日和解の可能性を見る。

日本は正しい歴史教育を、韓国は未来志向の教育を

漢陽大学校経営学部4年

金光日 キム・グァンイル

『軍隊慰安婦問題と日本の市民運動』（＝『「慰安婦」問題とアジア女性基金』韓国語版）を読んで、軍隊慰安婦に関わる日本市民社会の努力を知ることができた。歴史部の専攻でもなく、関心もあまり持っていなかったため、日本の市民団体が軍隊慰安婦問題のために多くの努力をしているということを知らなかった。またメディアからもそのような報道を目にした

り耳にしたりしたことはなかったと思う。アジア女性基金とともに、彼らが軍隊慰安婦として被害を受けたハルモニとその家族に少しでも日本国民の心を伝えようとする努力も初めて知った。軍隊慰安婦問題と補償問題をどうすべきかということについては、私自身として情報の限界を感じる。両国間で相互に締結された過去請求権問題もあって、また何回かお詫びを言及した日本総理らの発言もあって、こうだと断定するには難しさを感じる。もう少し専門家と関連機関に携わる方々の努力に関心を持って見守ろうと思う。この文を通じて、歴史教育と未来の協力を通じた両国の親善関係を模索してみようと思う。

1. 歴史教育

韓日間の歴史問題は、解放後60年が経った今日でも多くの問題点を抱えている。日本の人々は韓日両国に対してどのような考えを持っているのかわからないが、大韓民国の人間であるならば、日本には絶対に勝たねばならないと思っているものである。運動競技を含めた国際的な大会で日本と対戦するときは負けてはいけない相手として多くの人々が思っており、実際に韓日間のサッカー戦ではそのような実態をよく目にする。

単に運動競技だけのことではない。半導体を作って日本に勝とうと思い、某大企業とその研究員は条件や待遇が不利であるにも拘わらず韓国内に戻ることに急ぎ、そのような考えと気持ちが集結して、半導体メモリー分野では日本を追い越すようになった。

このような考えと気持ちは被害を受けた民族だけに可能なことで、これにはそれなりの歴史教育が存在した。この場には、日本の侵略から直接に被害と苦痛を経験した人々ではない、その子孫らが参席している。自分との直接的な問題ではないが、家族主義社会で家族の長年の痛みをそのまま乗り越えて行くことはできず、また歴史教育がそのような気持ちをつくってきたと思う。

長い歳月を経て、日本の侵略で受けた物質的被害と精神的被害は資料として保管され、独立記念館のような施設などに展示されている。ここには

毎年多くの人々が訪れ、主に青少年向けの歴史教育をさせる場所として活用されている。日帝から受けた歴史上の被害を、世代を越えて教えているのである。そのような教育は人々の頭の中に精神的な敵をつくり、彼らを一つに、同じ被害を受けた存在であるということ一つだけで団合せせようとする。

北朝鮮の場合も、90年代初めを始まりにして、軍隊慰安婦問題が大々的にハルモニの証言を通じてTV生中継で放送された。(北朝鮮では韓国と異なって「従軍慰安婦」と呼称されて来た。)多くの学生たちを座らせて、ハルモニらは彼らに日本軍の蛮行を告発し、学生は彼女らから多くの精神的な衝撃を受け、日本といえばすべてを呪うほどになった。これは短期間ではあるが北朝鮮住民たちの団結を形成するのに役に立ったと思う。

このような南北朝鮮の歴史教育は、日本を過去植民地支配国家として、彼らから受けた被害に対する教育だけに限っていて、新しい両国関係のための教育は欠けている。従って、歴史教育は韓日間の冷戦教育にのみ偏っていると思う。

2. 未来の協力

朝鮮半島は日本植民地から精神的・物質的な被害を受けたが、その後、経済において日本から多くの技術的影響を受けた。これは今日の韓国の経済成長をつくるのに大きな助けとなって来た。しかし、韓国が日本の植民地的に経済を成すようになったのではないと思う。国家的なレベルにおいて、お互いの協力が韓国の発展に影響力を及ぼしたと思う。現在も、日本から輸入される部品と素材は韓国ブランドをつけて再輸出されている。これは、歴史問題は歴史問題であり、経済発展においては韓国と日本の間で長年の経済技術的な協力があってやってきたということを教えてくれる。

200億ドルを超える対日貿易収支赤字は、韓国の日本技術依存性をよく表している。韓国は日本から部品と技術を輸入し、そこに応用技術を利用して国際的な製品を生産し送り出している。反対に日本は、韓国に部品と素材を輸出してそれなりの所得を得ている。このような両国関係が、歴史

問題にしばられイシュー化されて、人々の間の異質感を形成させることは間違ったことであると思う。経済的に連携の多い状況にあって、もっと両国が親しくなる方法を模索しなければならない。

その方法は両国ともよくわかっている。実行に移すには負担が大きく、責任問題がついてくるので、お互いに様子をうかがっているのだと思う。日本は日本として過去歴史に対する教育を正しく行い、責任を認めなければならないことについては成熟した姿勢で認め、受け入れなければならない、償わねばならない。しきりに過去にそんなことはなかったと言ったり、妄言を言ったりすることは慎まなければならない。そのような努力を通じて日本が経済大国としてアジアでの地位を高め、それをアジアの国々が認めて日本をリーダーとして従うようになることが望ましい。

韓国は、被害意識を強調する教育よりも、もっと両国が未来志向的にもに発展するための教育をしなければならない。新しい世代に過去のことを教育することも重要であるが、これからどのように両国が協力していくのかも教えて、隣国である日本をどの国よりよく理解できるように教育をさせなければならない。両国は、お互いに対して知らないことが多く、関心も少ない。

最近、韓流がブームとなっている。韓国のスターが日本と台湾を含めた東南アジアの多くの国々で人気をあつめている。特に日本での韓流は大きく広がっている。このようなきっかけを利用して、両国間の文化交流を拡大しなければならない。過去歴史問題は歴史問題として、国民の間にお互いに親しみを感じさせるきっかけをつくらなければならない。同時に、軍「慰安婦」問題によって精神的被害を受けたハルモニが、余生をもっと健やかに送ることができるように、国家的な思いやりが必要である。ハルモニたちには精神的な安定がとても必要であると思う。

アジア女性基金への誤解を助長する政府、メディア

梨花女子大学校政治外交学科 3年

金 河 羅 キム・ハラ

1990年代の初め、数十年間の沈黙を破った「慰安婦」ハルモニの勇氣ある声は、私たち国民に日帝時代の痛恨の過去を今一度思い起こさせる火種となった。「慰安婦」問題は他の韓日間の植民地時代清算問題と同様に、韓国民の固執的な反日感情とオーバーラップされて問題解決に対する要求が激しくなり、さらに進んで韓日政府間で外交的な摩擦にまで飛び火した。このような状況に至って国際的な注目を引くようになると、日本政府はこれ以上対岸の火事のように知らぬふりをするにはできない立場になり、これに対する対策として1995年に村山総理（当時）が財団法人女性のためのアジア平和国民基金（アジア女性基金）という機構をつくって日本社会で広範囲な募金運動を展開し、日本の「慰安婦」問題解決に対する意志を表そうとした。

アジア女性基金が設立された政治的な背景をはじめとして、財団の設立目的と実体に関する意見は未だにまちまちのようである。本に紹介されているように、国家が責任を回避して民間人に補償金を支払おうとする小児病的な外交手段だと責める人がいるかと思えば、一方でアジア女性基金が政府の下部機関ではない独立、かつ自発的な民間組織だと言う人もいる。

はたして、どれが、アジア女性基金の真実を言っているのであろうか。私自身としては希望的な期待とともに、後者の意見が今のアジア女性基金に関するより正確な解釈だと思う。このように判断した理由は、日本軍から被害を被った韓国を含む12か国の女性たちに支給された賠償金*の大部分が、政府の強要ではない日本国民の自発的な募金の結果であるという事実のためだ。ハーバード大学の入江昭教授が紹介したように、アジア女性基金の募金は、日本国民が自発的な意思で参加したもので、日本人一人ひとりが国家や政府に任せることなく、自らの行為として行動して自分たちのお金を出し、戦争を反省しお詫びの心を表明した結果物であった。そ

*賠償金 韓国では「基金」がいう「償い金」に当たる語彙がない。当初「基金」も韓国語で「賠償」（償い）とし、政府の賠償ではないため後「謝罪金」と呼称した（98年共同宣言文書での謝罪による）。また「基金」が個人に支給したのは韓国、台湾、フィリピン、オランダ。

の過程と結果は皆極めて重要かつ意味のあることであるのは明らかだ。「慰安婦」ハルモニが本当に願っていることは、屈辱と羞恥に金銭的な賠償金ではなく、自分らの苦痛を本当に慰め、名誉を回復してくれる真正な補償だからである。従って、ハルモニには、政府賠償や国家補償よりも国民の真心のこもる意識の変化を教えてくれたアジア女性基金の募金は、政府の公式会見や国家補償よりもずっとありがたいことであろう。

しかし、韓国政府やメディアは、アジア女性基金に対する誤解を一層助長しているという感じさえする。ハルモニがアジア女性基金の賠償金を受けようとする、挺対協と政府ではハルモニに「あなたたちがそのお金を日本から受ければ娼婦になる。絶対に受けとるな」と言い、アジア女性基金側に対しては「韓国政府が（慰労金を）受けとって、記念館と慰霊塔を建立するから政府に（慰労金を）よこせ」というようなことを言ったという。内容の真偽についての可否はともかく、このような話が流出したということ自体に政府の問題解決への意志に今一度疑問を感じさせられる。

政府は何をしているのか。もちろん、アジア女性基金の賠償金が苦痛の歴史に対する免罪符となることができないことは明らかだが、金銭的な支援はハルモニらの苦しみの歴史と生に対する至極当たり前の補償だと思う。しかし、このように政府が補償金の受け取りを責める態度は、むしろ問題解決の本質的な歩み寄り方から脱することだと思う。またこの本で台湾のある弁護士が言及したように、両国の政治問題を「慰安婦」問題に集中させることは、韓日政治の脈絡において優位を占めるための政治的術策に過ぎない。韓国政府が「慰安婦」問題を日本に対する政治的圧迫手段として、あるいは反日感情を誘発する手段として悪用することは、ハルモニらに更に大きな苦痛を抱かせることになるということを指摘したい。

これ以上、「慰安婦」問題が、政治的立場によって必要なときに動員される素材とならないことを願う。ひいては歴史教科書問題、(靖国) 神社参拝問題など韓日間の多様で複雑な問題も一時的、一過性の事件ではなく、韓日間の包括的な歴史問題解決の脈絡で、一つずつ検討して行かなければならない。そのために韓日学生フォーラムが韓日歴史問題解決の飛び石と

なって、未来の新しい韓日関係を開いて行く賢明なスイッチボタンになることを希望する。

現在は未来を変えることができる

全北大学校国文学科 4年

盧永來 ノ・ヨンレ

1. 「近くて遠い国日本」——日本といえば、まず先に思い浮かぶ言葉であろう。それもそのはずであろうが、上にある北朝鮮を他の国だと称して韓国のみを描く人はいないであろうし、西側の中国は敵対する対象ではない大国だが、東側の日本は韓国の近現代史において韓国に致命的被害を与えた点がそのような評価にさせた理由の一つであろう。

韓日学生フォーラムを準備して、我々の歴史認識と私の歴史認識、否、正確に言うならば、過去と現在のいくつかの現象において韓日関係について考えて見ようと思う。

2. 日本は加害者なのか？朝鮮は被害者なのか？——「従軍慰安婦」を強制で動員したことが深刻な犯罪行為であるということは明白だ。しかし、これは「日帝」の犯罪行為であって日本人の犯罪行為と言うことは正しい観点ではない。日本人の中にも「従軍慰安婦」として連行されて行った例をたびたび目にすることができるし、反対に韓国の「慰安婦」の連行においては、日帝の下部構造を形成していた朝鮮の巡査や学校の先生、地域の有志たちが相当な役目をしていたことが明らかになっている。

もちろん、そうだからといって「慰安婦」自体や、戦時に合法的な強姦が成り立つことを受け入れえないことは明白だ。しかしそれは「日帝」の過ちであり、現在の日本人の過ちではないということ、即ち過去の過ちをもって日本人の全体を十把ひとからげに攻撃することは、むしろ逆効果をもたらし、各国の民族主義のみを拡大させる結果を生み、緊張状態を維持せざるをえなくなる。

3. 教科書——一部で推進している教科書問題を持ち出して日本人全体をおしなべて責めてはならない。

「金」という姓の人が、それなりの理由なく私をいじめてけなす事件が発生した。私は「金」の姓を持つ人は好きではない。

こんなこともあった。ソウルに住んでいる人に詐欺にあったことがある。それでソウルに住む人は誰もが「詐欺師」である。

私たちは、このようなことから教訓を得なければならない。右傾的な教科書を積極推進する人は日本全国民の中の極少数で、これを積極支持する人も少数である。しかし、教科書問題が起こった時に韓国人たちの見せた反応は日本をおしなべて罵倒する形であった。これは正しい態度ではなく、決して良い結果を出すことができない。

私たちが、歴史教科書問題を持ちだして日本政府を批判することはできるが、日本政府は教科書問題において核心的な部分ではないように思う。日本は「国定教科書」制度ではない「検定教科書」制度を採択しているから、日本政府から修正を指示することはできるが、史観が違うからといってハナから許可をしないということは極めて難しいことに思える。

問題の教科書とその内容に対して、そしてこれを主導する個人やその団体に対して、日本国内外の進歩的知識人らが粘り強い思想闘争をすることは切実に必要かつ重要なことではあるが、日本政府に対して「許可するな」と要求して圧迫を加えることは、時代発展の趨勢（すうせい）にも合わないし、容易に反感を引き起こしうる問題であることを悟らなければならない。

反対に、韓国の教科書ではどうであるのかを考えてみる問題である。

韓国でも日本でも、青少年に歴史の真実を教えなければならない。歪曲された内容ではない真実を明確に教えなければならないし、その時代的背景や原因、教訓までを詳らかに教えなければならない。

しかし、韓国は被害者であり日本は加害者であるというように教える現在の韓国の歴史教科書は、ことによっては歴史的事実を歪曲するよりも大きな間違いを犯しているかも知れない。日本の帝国主義が朝鮮人と中国人

におびたらしい被害を被らせたように、日本帝国主義とこれを主導した人々が日本の人民にどれだけの被害を被らせたかということに対しても詳らかに教えなければならない。「韓国は被害者であり、日本は加害者である。」との図式でのみ教えるのであれば、韓国の次世代にも間違っ導かれた歴史認識を植えつけてしまう道筋となり、これはひいては東アジア全体の未来のために望ましくない道である。

4. 過去・現在・未来——二重規定をとり除いて、未来に向けてともに出ていかなければならない。

現在は未来を変えることができるが、過去は現在に影響を及ぼすだけであり、未来は現在が支配する。

今一度強調するが、「日帝」の過誤を不問に付そうというものではない。そしてこのまま容赦しようということでもない。また、昔の事を持ち出して明らかにすることで日本に対する憎悪心を鼓吹しようというのではない。それではだめである。現在の日本人や日本の未来の世代は、私たちとともに人類の新しい未来を開拓して行かなければならないパートナーであると同時に友である。日本や日本人を敵視することは誰の役にも立たない。

今は20世紀ではなく21世紀である。変化した時代には変化した時代の価値観がなければならない。

21世紀を20世紀的観点で見ようと思っはいけない。「朝鮮」は侵略を受けた国だったかもしれないが、21世紀の大韓民国は政治、経済、軍事などで総合的にみた時、全世界230か国余りの中で15位内に必ず入っており、OECD会員国でも11位圏である。過去に縛られて、未だに弱小国のイメージを持っているが、これは早く捨てなければならない劣等意識である。

日本もまた日本の軍国主義を主導した「日帝」時代の人々は大部分世を去り、戦争期に下っ端兵士として最前線で弾の当たり役をした人々も多くは亡くなり、もしくは人生の黄昏時を送っている。現在日本を主導しているのは戦後に教育を受けた世代であり、日本の未来を担って行く現在の日本の大学生は彼らの息子や娘、換言すれば戦後2世たちである。

民族主義が根深い両国が、お互いに悪感情を持つことは、東アジアなどの国のためにも良くないことであり正しくないことである。

漸進的に発展に向けて進まなければならない。

21世紀はすでに国家の障壁を超えている。世界化、民主化、知識情報化社会に進まなければならない。過去を清算するのではなく、過去を正確に話さなければならない。

誰がよくやったとか間違ったとか、是非を選り分けるのではなく、過去の過ちが二度と繰り返されることがないようにお互いに認め、踏襲しない成熟した市民社会のためにお互いに努力しなければならない。日本の「中村」さんと韓国の「金」さんが、お互いに手を取り合って笑えるようにならないといけない。

日本と韓国において、そして東アジアの問題において、過去を現在の足枷とするのではなくお互いの教訓にして、より良い明日のために手を取り合わなければならない。

20世紀の「日帝」と「朝鮮」ではない、成熟した21世紀の「日本」と「大韓民国」になることを期待して止まない。

日本軍慰安婦問題とアジア女性基金

延世大学校経済学科4年

申 熙 石 シン・ヒソク

初めに、この行事がアジア女性基金の後援で行われるという話を聞き、参加するかどうかと、かなりためらいました。アジア女性基金に対して聞いていた曖昧な認識はあまり良いものでなかったからです。その認識とは、日本政府が何としても日本軍性奴隷被害者に対する国家賠償を避けるためにつくった民間機構というものでした。『軍隊慰安婦問題と日本の市民運動』という本を読み、実際にフォーラムに参加して基金関係者の方々と話し合ってみながら、アジア女性基金に対する考えが少し変わりました。こ

の事業を日本の左派の人々が主導し、当時与えられた日本の政治現実の中で、慰安婦被害者のための最善の選択だったという主張も聞きました。保守政党が半世紀を越えて政権を担う日本の政治の壁に対しても今一度考え、私があのような状況に置かれたらどうしただろうかと悩みもしました。

私を悲しい思いにさせた話の一つは、韓国内の「慰安婦」関連市民団体や関係者がアジア女性基金から「補償金」を受けた7人の「慰安婦」被害者に対して取った態度でした。基金側で韓国側のパートナーとの事前協議なしに事業を一方的に推進したことが問題を招いた理由であるし、基金に反対するわけも理解しますが、7人のハルモニを「売国奴」扱いしたことは我が国の歪んだ民族主義を端的に見せている例だと思います。現実的に、多くの被害者にとって急を要することは金銭的な支援であって、自分たちの名誉回復や日本の国家賠償ではなかったと思います。

これらを柳寛順（ユ・グァンスン）や金九（キム・グ）のように現実問題を超越した民族の闘士や正義の守護者としてつくりあげようとした人々を見ると、多くの韓国人にとって日本軍性奴隷問題は人権問題ではなく愛国心の問題ということ、今更ながら悟るようになりました。金学順さんとともに韓国政府の支援金さえも拒否して日本の国家賠償を要求しながら闘争する方々の勇気と根強さには敬意を表しますが、そうかといってそれ以外の性奴隷被害者らを批判する資格は誰にもないと思います。彼女らが経験した人権蹂躪と、その後故国に帰って以来、数十年間を耐え忍ばなければならなかった苦痛を思えば尚更です。これらを守りも、抱き寄せもできなかつた我が国の社会と政府が国家の自尊心を打ち立てることは不合理であると思います。

とは言っても、アジア女性基金に対する私の考えが肯定的に変わったのではありません。基金創立から10年近い歳月が経ち、解散を目前にした今日、基金から補償金が支給されれば性奴隷問題は終わったと見なされるであろうという当初の憂慮は、不幸にも現実になってしまったからです。もしかしたらば、これは基金を後援した人々の多数が正確に意図したこと

かもしれません。時間がすぎて一時沸き上がった国内外の世論もだいぶ沈静化し、性奴隷被害者たちに対する法的な救済、日本内での慰安婦問題に対する共感体の形成などとは遥かに遠い状態です。日本政府を相手にした訴訟は皆敗訴で終わり、加害者ひとりひとりの処罰は完全に論外であり、右傾化して行く日本社会ではかなり多数の政治家と国民が性奴隷の存在自体さえ否定しています。

どうしてこんな結果となったのでしょうか？多くの理由があるでしょうが、根本的にこれは「国民基金」という極めて曖昧な性格自体に問題があったのではないかと思います。最大20万人にもなる女性の人権を踏み躪った国家行為に対して、国家の責任を認めて賠償することは当たり前の事です。厚生省でHIV 肝炎血液を過って管理し、血友病患者たちがAIDSにかかって命を失ったら政府で補償をして責任者を処罰しなくてはならない、過ちをしたことは政府機関なのに民間基金で償おうと言ったとしたら、常識的に納得することができますか？不利な政治の現実や保守的な司法界が言い訳をすることはできても、これを正当化することはできないと思います。

アジア女性基金と国家賠償は別個であり、基金はあくまでも年老いた性奴隷被害者に対する生計支援が目的という見解もありますが、大多数の人々はそのように思っていないようです。大沼保昭教授も著書で明らかにしたように（46/33 ページ）、基金に関与した人々でさえその多くが政府賠償は国際条約などを通じてもう解決されたから不可能で（勿論、できないというよりもしたくないということが本音でしょうね）、国民基金が唯一の方法であると考えた人々でした。実際には、大沼教授が説明するように国際条約は該当国政府が個人の被った被害に対して政府レベルで日本に請求することができなくなったことであって、個人請求権が消滅することではないと日本外務省も認めています。また、日本政府がその気になれば立法手続きを通して国家補償に乗り出すことができる事案でした（228/219 ページ）。ともかく、このような人々の立場から女性基金から「補償金（償い金）」が支給されれば問題はすべて解決されると思えたのでしょうか。基金

から「補償金」を受けた性奴隷被害者たちの中で、訴訟を提起した人がいなかったことも驚くべきことではないと思います。さらに「補償金」という用語や日本総理の手紙も基金の性格をもっと曖昧にさせました。事案に対してよく知らないとか、元々賠償に反対した一般人が聞けば、すでに被害者に数千万ウォンを与えたのに、なぜ国家補償をしてあげねばならないのかと言われるのが明らかではありませんか？結局、基金は日本政府が法的責任を負わなければならないという国内外からの圧力を何とか避けようとしていた人々に、上手に利用されたのだと思います。

民間基金が国家賠償よりも意味があるという大沼教授の見解（47/33ページ）もまたもっともらしいですが、同意することはできません。実際に寄付に参加したのは、1億2千万人の日本人の中で極少数に過ぎないです。だから“国民基金”という用語自体も不正確な表現ではないかと思えます。しかもこのような募金は過ちに対して自らが責任を負うというよりも被害を被った人が可哀想だからお金を出すという場合が大半です。まるで台風罹災民たちのために助け合い金を集めることのようにです。それに、公務員も基金に寄付するように通達があったといいますが、果してこんな方法でお金を出しながら性奴隷に対してどれほど深刻に考えていたのだろうか疑問です。また、自国の政府が法的責任を負うことを拒否するのに、事案についてよく分かっていない国民ひとりひとりがこれに対する責任意識を持つのを期待することは無理ではないでしょうか？「国益」のかかった事案においては常に一致団結する姿を見せる東アジアの人々の「愛国的性向」を考慮すれば、多くの日本人が慰安婦に対する意識がないことも驚くにあたりません。秦郁彦日本大学教授が日本軍性奴隷を「慰安婦伝説」（207/197ページ）と呼んでも社会的批判は皆無で、麻生太郎は堂々と外相に就任しました。性奴隷被害者たち前でこれらを公娼と呼んだ奥野誠亮元文部大臣のような人がアジア女性基金から金を受ける女性たちを見て「それみろ。この連中は娼婦ではないか？皆金をもらって食うためにあのショーをしたのではないか」と高笑いする姿を思えば本当に苦々しく思います。

勿論、被害者が単に金をくれと言うのに対してそうしてあげて問題を解決すれば良いではないとも言えますが、法と正義の観点でこれは望ましいことではありません。これはまるで強姦被害者に金一封を与えながら訴訟を取下げろということと何が違うのでしょうか？韓国と日本は強姦罪が軽犯罪に適用される親告罪として残っている数少ない国であることも偶然ではないと思います。これは、被害者の名誉と尊厳のためだと言いますが、実際は加害者が法の審判を金や強迫で買うことのできるようにする制度ではないのでしょうか？殺人や強盗罪のように必ず処罰しなければならない深刻な犯罪とは見做さないという意味にもなりますね。一般の人々が慰安婦問題に対する法的解決の必要性を感じていないことも、女性の人権蹂躪を深刻な犯罪と見ない社会意識が根底に敷かれているという下村満子さんの指摘（230/220ページ）に同感します。事実、そのような面では強姦被害者を罪人扱いする視角が依然としてある韓国社会も誇れはしません。数十年間性奴隷問題が表沙汰にならなかったこともこれと無関係ではないでしょう。

被害を被った被害者のみではなく、今後発生する被害者たちを思えば問題はもっと深刻です。強姦をしても金で法的責任を避けるように免罪符を与えれば、同じ事が繰り返されることを奨励するのと同じではないでしょうか？人間というのは社会的動物で、上からの命令に弱いものです。また、権威の前で人々がどれほど無責任になれるかはアメリカの心理学者であるスタンリー・ミルグラム（Stanley Milgram）の服従実験で克明にされました。そして法的義務と道義的義務が衝突する場合、シンドラや杉原千畝のような極少数の勇ましい人々を除いて前者を選びます。しかも命令不服が銃殺刑である軍隊で、不当な命令は不法であり、処罰される可能性があることを確かにしないまま道義的判断に任せておけば、個人がどのような行動をとるかは火を見るよりも明らかです。第2次大戦以後、国際社会で上官の命令が犯罪に対する免責事由とならないという原則が確立して合議され、ヨーロッパ各国が人道に反する罪（crimes against

humanity) については公訴時効を廃止し、今でも関連者を追跡して法の審判にかけることはこのような理由からです。私は来年から兵役に服する予定です。そのためか、このような事は他事ではありません。

残念ながら日本政府は性奴隷連行、慰安所運営などに関与した個人に対する刑事責任を問うための調査に乗り出せというNGOの要求と国連の勧告を無視しています。1994年2月、東京地方検察庁は性奴隷連行と慰安所運営に関与した者を調査せよという挺対策の陳情に対して、公訴時効超過と容疑者を特定しなかったという理由で拒否しました。日本政府が個人補償とともに責任者を処罰することを明示して勧告したクマラスワミ報告書(E/CN.4/1996/53/Add.1)とマクドゥーガル報告書(E/CN.4/Sub.2/1998/13)が国連人権委と人権小委で採択されましたが、すべて無視されています。証拠や証人がいなくて無罪放免となったのならば仕方ありませんが、捜査もしないということや第2次大戦以後に確立された公訴時効不適用原則を法制化しないことは、国際法上の義務不履行であると思います。大沼教授は「行為当時に犯罪ではなかったことは事後法で処罰してはならない」(5ページ/I)と言いますが、国際法の話を取り上げる前に日本国内法のみを見てもそうではないように思います。私は明治刑法をよく知りませんが、その当時にも詐欺、拉致、強姦、殺人罪があったであろうと思います。ただ、国家の命令があったという法治に反する理由一つで加害者たちが起訴を免れたことだけでしょう。

韓国政府もこの問題については自由放免されません。1965年に被害者実態把握も進んでいない状態で韓日基本協定を結ぶことで日本政府の主張に問題の種を提供したことは勿論で、戦争中、韓国人の中にも確かに性奴隷の連行や慰安所運営に関与した者がいたであろうに、今までただの一回も戦犯裁判を行わないことは理解できません。1999年10月、フランスの裁判所は2次大戦中、高位官吏でありながらユダヤ人1,590人を収容所に送ったモリス・パボン(Maurice Papon)に対して人道に反する罪で懲役10年の刑に処しました。戦後、レジスタンスに化けてパリ警察局長と予算部

長官まで勤めた彼は判決当時 87 歳でしたが、法の審判を免れることはできなかつたのです。勿論、フランスでも大多数の犯罪者は処罰を免れたのも事実です。見方によればパボンと一緒に捕まった連中に運がなかつたと見ることもできますね。しかし少数だとしても法審判の可能性を残しておくこととそうでないことが後世に及ぼす影響は全然違います。

果たして、基金は不可避な選択だったのでしょうか？ ただ神のみぞ知ることです。ただ、私が見たところでは日本のいわゆる進歩的政治家と法律家が望ましい解決のために十分な努力を注いだように思えません。村山内閣が議席のより多い自民党との連立政権だったことは事実ですが、国家補償が必要だと思ったら (6 ページ/ ii) 総理の座をかけてでもこれを貫徹させなければならなかつたと思います。田中宏教授が言及したように、日本政府は日本人に対する援護政策では 14 個の法律で年間 1 兆 5 千億円の援護金を計上しているのに (189/178 ページ) 過ぎ去った事だから忘れようということに説得力がありましようか？ これ以外にも性奴隷被害者たちの陳述などを想起させて世論を味方に付けて反対者たちを説得し圧迫することが即ち政治力ではないのでしょうか？ 小泉総理も自民党内の多くの派閥と事実上の連立政権で出発しましたが、反対を押し切って絶対に不可能と言われていた郵政民営化を推進し、成功させました。日本の国際法専門家も国家賠償が必要だと信じるのであれば被害者側の法律諮問や証人として法廷攻防に参加するべきではないのでしょうか？ 他の人ならばいざ知らず、法律家は法的な問題解決のために努力しなければならないのではないのでしょうか？ してみてもどうにもならないのと、してもみずにだめだと言うことは全然違うと思います。

横田洋三教授の場合は、国連で「基金活動は法的責任に対する解答ではない」という点と政府のお金が補償金部分に含まれていないという点で不十分だ」とみていると認めながらも (115/100 ページ) 実際には日本政府の立場と基金の弁護にだけ重点を置く印象を受けました。シャベズ特別報告官が「まず道義的な立場で」迅速な対策を備えることを注文し、(113/98

ページ)クマラスワミ特別報告官が基金自体は良いと言ったことは事実ですが(114/99ページ)、これは法的救済措置が従うということを前提にしたものでした。しかも4年間国連人権委のミャンマー人権特別報告官まで歴任した横田教授が国連人権委で採択されたクマラスワミ報告書に対して法的拘束力がなく、従う義務がないという図式で話すことに対しても(112/96ページ)驚きを禁ずることができません。読んで見た方々は分かりますが、クマラスワミ報告書とマクドゥーガル報告書は日本政府が被害者たちに対する個別補償と関連者処罰に乗り出す法的義務があるという国際法上の根拠を条目別につけています。国連での報告書採択はこのような日本政府の国際法上の義務を確認することで、日本政府が1996年第52回人権委員会でクマラスワミ報告書が採択されることを阻むためにあそこまで力を注いだこともまさにその理由からです。横田教授の論理通りであるならば北朝鮮も安保理決議がない限り人権委決議に従う必要はないということではありませんか？

2002年8月の第54回国連人権小委でも、小委の委員だった横田教授は国々が武力紛争中の性暴行に対する刑事処罰及び補償を行って、歴史的事実を正確に知るための歴史教育を実施することを勧告した「武力紛争の中で組織的強姦、性奴隷と類似行為に関する決議案」(E/CN.4/SUB.2/RES/2001/20)に対して日本メディアが日本政府の是正努力を促したことで過って報道したと発言して論難を起こしました。独立された位置で人権問題を論じなければならない小委委員が会議中、自国政府を代弁するような発言をした問題は二の次にして、特定国家が明示されていないとしても慰安婦と歴史教科書問題を抱えている日本政府に、本当に該当の事項がないと思ったのか首をかしげざるをえません。日本の著名な国際法学者であると同時に基金運営審議会委員である横田教授の言動を見ると、基金設立者が最初から国家補償や関連者処罰、過去に対する覚醒は関心の外で、ただ基金を通じて日本政府に対する非難を緩和しようと思ったのではないかと言う疑問を持たざるを得ません。

政治的妥協も妥協次第だと思います。不可避に妥協をするならば、これ

は次の段階の解決策を履行することを容易にすることでなければならないのに、むしろ基金は今後の法的解決を求める道を封鎖してしまうという点で最大の問題があると思います。南米チリで長年のピノチェト政権の独裁が終わり、民主政府が立ち上げられて過去事問題に火がついたと言います。保守勢力が人権蹂躪者処罰や被害者補償に反対すると新政府リーダーたちは一応中立的な人権専門家たちで構成された真相調査委員会を構成するようにして真実糾明をすることとしました。独裁政権統治下の人権蹂躪事例を一つ一つ記録した報告書が出されると反対派も証拠を出せという話がこれ以上できず、被害者補償法案は可決されたと言います。南アの真実と和解 (Truth and Reconciliation Commission) もまた、政治的妥協の産物でしたが、赦免の付与に厳格な条件をつけてすべての犯罪行為を公開的に述べるようにし、赦免を受けることができない者は今後の刑事処罰対象になりうるという点を明らかにしました。日本でもこのように創意的な案を出すことはできなかったのかと問い返さざるを得ないです。

少し違う話ですが、韓日関係改善の観点でも基金の提唱者は一つ重要な事実を見逃したと思います。日本に日本の現実があるのであれば、韓国には韓国の現実があるという点です。基金に対する話を初めて聞いた時、私を含む大多数韓国人が思い浮かべたことは1965年の韓日基本協定の悪夢でした。「慰安婦」ハルモニの余生があまり残っていないから、今すぐお金から渡さなければならないという日本側の論理は40年前に韓国で春の端境期に飢える人々のためにどうしてもまず日本と国交を樹立して、お金をもらうことからはじめなければならないという論理と別に差がないからです。しかも、否認で終始一貫していたが、吉見義明教授の史料発見以後、やむを得ず事実を認め始めた日本政府の態度で、韓国の日本政府に対して信頼や善意は全く持つことができません。それで、数十年ぶりに初めて政権を握ったという社会党が国家補償の代わりに基金案を選ぶと、韓国では何でも金で解決しようとした以前の政権と何が違うのかという世論がおこるほかなかったのです。韓国のナショナリストにしてみれば大人しくして

いられるはずがなく、尽きることなく出続ける日本の閣僚による卑劣な言葉も重なって、基金が韓国民の支持を受けたり韓日関係改善に寄与することは初めから不可能だったと思われます。個人的には基金が性奴隷被害者たちの人権侵害に対する法的救済に寄与したらば両国関係問題と無関係に基金を支持するけれども、先に述べたように実際のところ、それはできないであろうというのが私の見解です。

人権というものは人間である以上誰もが享受しなければならない権利です。韓国人、女性であるという以前に、一人の人間としてです。性奴隷被害者が韓国人ではなく日本人であると思いながら彼女らの証言を読んでみてください。あなたのお姉さんや弟（妹）が被害者だったらば日本政府の態度を納得することができますか？ 残念ながら戦争中の深刻な人権蹂躪は今日も世界各地で起きています。旧ユーゴ、ルワンダ、シエラレオネなどでの裁判記録などを見てみると、人間の残酷さに改めて今更驚かされます。このような悪循環を断ち切るために法的責任を確かにすることは是非とも必要です。ところで世界第2の経済大国であると同時に民主国家であるということを標榜する日本が、今まで国際社会が苦勞して確立してきた国際人権法を無視して、政治の現実を理由に最小限の法的責任さえ回避することを認めたらば、日本よりもっと不安定な政局に置かれている過渡期の国々に対して、危険な先例を残すのではあるまいかと憂慮されます。

大沼教授は韓国の性奴隷被害者支援団体関係者に「あなた方の言うところの正義を追い求めることは結構だが、それでは十年かかっても解決が出ない」として、被害者がすべて亡くなってしまったらどうするのかと問い、「ハルモニが死ぬことがいったい何の問題であろうか。百年かかっても正義を追求する」と言う答を受けたとして、問題の本質が個人の幸せから民族の正義に変質されたと嘆いています（241ページ／233ページ）。私も「民族の正義」などは信じておらず、事案を韓日両国家間の問題として見る視角には同意しません。しかしながら、それでも人権が単純に個人の幸せや生計保障レベルの問題とは思いません。そうであるのならば、過去の韓国

の軍事独裁も人々を幸せに暮らすようにしてくれたのだから、法的責任を問う必要はないと言えましょう。しかし人権蹂躪にあった被害者に対する補償と再発防止のための関連者処罰など、普遍的正義の実現なしで真の人権と法治主義の定着は成り立ちえないと思います。責任意識のない民主主義、法のない人権、正義のない平和は長く続かないのが現実です。

間もなく日本の平和憲法が改正されて「普通国家」になるのは時間の問題だと思えます。自衛隊のイラク派兵など、何年か前までには想像もできなかったことが一つ二つと現実化されていることを見て、そのように感じます。南北韓間の対峙、中国と台湾との間の対立などを勘案すれば、日本を含むこの一帯は戦争危険地帯に分類されます。残念ですが、半世紀を越えて続いて来た日本の平和主義は、戦争を起こして他人に被害を及ぼしたことに対する加害者としての反省ではなく、日本が無駄な戦争で莫大な犠牲者を出したという被害者としての悔しさに根拠を置いているという印象を受けます。南京よりは広島が、731部隊よりは神風特攻隊が、強制徴用者よりも戦争孤児が日本人の戦争記憶を支配しています。第2次大戦に参戦してシベリア抑留まで経験した画家の香月泰男はシベリアに連れて行かれる途中で、戦争中に残酷行為を業務として行った後に中国人たちからリンチを受け、皮が剥がされた日本人兵士の遺体を見つけます。後に日本に帰って来た香月さんは、その遺体を広島原爆被害者の真っ黒に焦げた遺体と比べながら、「戦争の本質への深い洞察も、真の反戦運動も、黒い死体からではなく、赤い死体から生まれ出なくてはならない」と言いました。

これはなにも日本にのみ当たる話ではありません。ただ、日本軍性奴隷は日本の社会が過去の戦争に対する認識を赤い死体の観点で再確立することのできる絶好の機会であったのではと思います。黒い死体に根拠を置いた平和主義は、結局自分が被害を受けまいと判断されれば簡単に放棄することができるのです。不安定な東アジア情勢の中で、このような平和主義の入り込む余地は狭小です。また、このような被害意識に土台を置いた平和主義は憎悪と不満を生むようになります。小林よしのりの極右

マンガなどを見る度に優越感を装ったアメリカや中国に対する被害意識を見いだしたところで、驚くに値しません。アメリカインディアンの諺に、「お前が一度私を騙せばお前の恥だが、お前が二度私を騙せば私の恥だ (Fool me once, shame on you. Fool me twice, shame on me)」という言葉があります。日本に負けまいと、韓国、中国などの各地で被害意識をもとに固く団結したナショナリズムが派手に復活していることを見ながら、果して私たちは過去の戦争から何を学んだのかを心配せずにはいられません。

日本軍慰安婦被害者の方々はこれから数年後のうちに皆お亡くなりになるでしょう。そうなったらば、この方々に対する戦争の記憶は、永遠に歴史の中に消えますね。60、70年代まで日本の街をウロウロしていた退役傷痍軍人たちが消えたように。性奴隷被害者の方々が最も心配することは、自分たちが忘れられてしまうのではないかと思うことであると聞きました。この方々の記憶が忘れられないようにすることは、その方々だけではなく私たち自身の未来のためにも是非とも必要だ思います。そのような意味で、大衆教育と広報は残された数少ない道だと思われまます。勿論、多くのNGOや活動家が努力していることは知っていますが、簡単にはいかないであろうと思います。今日は60年代のように社会変革の風が吹く時期でもなく、基金が設立された10年前に比べても右傾化が大勢を占めています。韓国でさえも「慰安婦」問題や徴用者遺骨発掘、及び送還問題、未公開戦争関連公文書などについて、どれほどの関心が残っているのか疑問です。しかしあらゆる変化は結局一人、一人の変化から始まることだと思い、私も一から努力しようと思います。やはり、やってみてだめだったことと、やってもみないでだめだと言うこと、0.01%と0%可能性の差はあまり大きく思えないが、その0.01%が人類の歴史を変えて来たというやことに、私は希望を見いだします。

*筆者注 用語問題と係わって会議中に李ヒョンスンさんが指摘したけれど時間の関係上そのまま飛ばしてしまったことについて。日本人がしば

しば使う「従軍慰安婦」という言葉ですが、「従軍」は「軍隊に付いて行く」と言う意味なので、これにはある程度自発性が含まれます。被害者の証言と史料を見ればこれは不正確な表現なので、軍隊慰安婦や軍隊性奴隷という表現を使うのが望ましい。慰安婦(comfort woman)、慰安所(comfort station)という言葉も原則的にはUNなどの公式機関で使うように、性奴隷(sex slave)、強姦集結所(rape center)と呼ぶのが客観的ですが、旧ユーゴ内戦で民族浄化(ethnic cleansing)という言葉のように、特定事件を示す言葉として定着しているので、文脈上使っても構わないと思われます。

「慰安婦」問題—日本国民の動きはうれしいが

関東国際交流センター助手

朴美姫 パク・ミヒ

私が「慰安婦」問題について初めて認識したのは1990年代初めにテレビで放映されて人気のあったドラマ「黎明の瞳」であった。日帝時代から朝鮮戦争以後までの「時代」と「イデオロギー」を描いたドラマで、女主人公が「慰安婦」に連行され、望まない性的奉仕を強要される様子を見ながら、それまで本から学んでいた「従軍慰安婦」というものが「あんなことだったのか」と知ると同時に、ドラマで描かれた姿を見ていて、当時の女性がとても可哀想で、あのようなことまでほしいままにした日本政府にひどく憤慨した。恐らく、そのドラマを見ながら私のように感じた人々はかなり多かったであろうと思う。これ以外にも「従軍慰安婦」問題を描いたドラマはあったが、見るたびにドラマではあっても歴史的事実を土台にしたものであったから、女性たちの残酷な生き様がまだ目に焼き付いている。

当時、可愛らしい16歳、17歳の若い少女たちを対象にして、どうすればあんな蛮行を繰り返すことができたのか、その女性が自分の国の国民であったとしても、戦争のためならばそうしたのであろうか。もちろん、

そうではなかったはずだ。

実は、私は「従軍慰安婦」問題とえば、過去の我が国の暗鬱な歴史の一部分だけとして認識していた。その時代を経験していないから、その問題がどんなに深刻だと言われも身に迫って来なかった。そして国家間で解決しなければならない政治的な問題だとだけ思っていた。しかし、当時、慰安所がどんな所であるかも知らないまま連行され、またそこで女性として羞恥の極みを味わわされても誰にも言えず、それで故郷にも帰ることができなかったというハルモニの涙にくれた話を聞きながら、「従軍慰安婦」問題が私に迫り始めた。

その当時に苦痛を経験したハルモニが「従軍慰安婦」問題を掲げてマスコミに登場した時、日本政府の反応は冷淡だったと記憶している。そして、「慰安婦」問題自体を認めない態度も目にしたと思う。『軍隊慰安婦問題と日本の市民運動』という本でも言及されたが、1941年に日本が太平洋戦争を起こした時、参戦していた軍人を対象に相当数の女性が慰安所に徴集されて、性的奉仕を強要されたという。日本政府は当時軍に慰安所を設置したのは民間業者がしたことであって、政府のあずかり知らないことだと言ったが、政府がそれをどうして知らずにいられようか。恐らく暗にそれを黙認したのであろうと見当がつく。1945年に戦争が終わっても、「従軍慰安婦」だった女性らは自分の境遇を恥ずかしく思い帰国を諦めたとか、自らの過去を隠したまま生きて行くしかなかったという。

問題はこのような「従軍慰安婦」問題を何でもないことと見なしてきた日本政府にあると言える。なおかつ戦後補償問題において、自民党内では政府間の賠償は皆終わり、「従軍慰安婦」問題を含めて戦後補償は必要ないという意見もあったと言う。

事実、重要なことは、被害に対する補償に先立って政府レベルでの「慰安婦」事件に対する真相の糾明と謝罪ではないかと思う。日本政府のこのような立場に比べて、日本国民たちの態度は、ひとりひとりの真心と気持ちを集めてアジア女性基金に後援をするなど、心のこもった補償の気持ちを伝えようとする努力につながっているという点で、まことにありがたい

と言うほかない。

実は私は、日本政府が「慰安婦」問題に対して冷淡な反応を見せたとき、日本国民も同じなのだろうと思った。しかし、自分たちの政府を代りに謝罪と補償の気持ち心伝えようとする国民の姿を見て、すぐに政府もこのような動きに同調するであろうと小さな期待をした。

一方でこのような補償の努力が、「慰安婦五百問題」が頭をもたげた時、直ちに日本政府レベルでまず始まっていたのならよかったのにという苦々しさも感じる。政府は否認して、国民はお詫びの心伝えようとする姿は本当に皮肉としか言いようがない。もちろん、政府レベルで過去における自らの蛮行を認めて公開することが易しいわけがない。国家的イメージの失墜と非難を考えざるをえないから、一層隠したくもなったであろうが、歴史的事実を否認するからといって覆いつくせる問題ではあるまい。実のところ、アジア女性基金も「慰安婦」問題が日本国会で何年にもわたって論議され続けられながらやっと誕生したもので、それも国家補償ではない民間の力を借りた基金だと言う。ともあれ「従軍慰安婦」被害女性に対する補償の動きが起きているという点ではうれしいことであると言えよう。

私も韓国国民の一人であるが、戦争世代であるためか「慰安婦」被害女性の苦痛を理解し、その問題に対する深刻性を感じるまでに相当時間がかかった。日本の国民も大多数が私のように戦争を経験していない人々であろう。そのような人々がアジア女性基金を後援してお詫びの気持ちを伝えている。その中である若者の手紙を紹介しよう。「23歳の学生です。戦争を全然知らない世代の一人です。しかしあの50年の戦争について「分からない、構わない」では解決されないと思っています。50年も経ってからの謝罪は確かにあまりに遅すぎます。お金が全てではありませんが、それでも私は募金をします。」…「従軍慰安婦」の補償と責任問題は、もう世代を越えて扱われている。

もちろん「従軍慰安婦」に対する補償問題がこのように鈍いことを、日本政府の責任にだけ付することはできないだろう。過去、朴正熙時代に国民の強い反対にもかかわらず無償3億ドル、有償2億ドルで韓国とその国

民が持ったすべての請求権を完全に放棄することで合意したという。多分それによって日本政府は、補償はもうしたのでからこれ以上することはないと出てこよう。過去にこのような事件はあったが、あくまでも国家の間でのことであって被害者ひとりひとりに対する補償はなかったから、これについて日本政府にもっと強硬で積極的な立場表明のできない韓国政府の不充分さも認めなければならないと思う。

ともかく「従軍慰安婦」問題は歴史的事実であり、社会倫理的とか人権的な問題で見た時、あつてはならぬことだから、国家的立場での事実糾明と謝罪、個人に対する補償は必ずなされなければなるまい。これを民間や国民の手に任せることは責任回避にしかならないことを悟らなければならない。また、過去の歴史的恥部を見せることが国家のイメージを失墜させるという考えからも脱して、すでに明らかにされた問題がきれいさっぱりと糾明された時にこそ、国民は自国の政府の道德性を高く評価し、一層信頼をおくことができよう。

初めての街を歩き日本文化を感じた日々

関東大学校警察行政学科 2年

金 宰 勛 キム・ジェフン

私は、この度の韓日学生フォーラムを機会に、初めて海外に出た。最初、今学期を終えて軍隊に行くつもりであったので、韓日学生フォーラムへの参加を考えていなかったが、軍隊に行く前に旅行をたくさんしようと思っていたので、丁度よい機会だと思い申し込んだ。日本に行く日程と試験が重なって、軍隊に行くサークルの同期をみな誘うことが出来なくて申し訳なくも思う。

12月6日の前までに試験の代わりとなるレポートの準備を慌ただしく進めて、待望のその日が来た。

夜明け6時に起きて半ば夢うつつのまま空港行きのバスに乗った。私は

兵役申告をしなければならぬので他の人よりも早く向かったが、9時半になろうとしてもバスが空港に着かなかった。

ちょっと焦りを感じていたところに李元雄教授が電話をくださったので間もなく到着すると伝えた。しばらくして、初めて仁川国際空港に到着した。規模がすごかった。バスから降りたら3階だった。チェックインをして免税店を見て回った。目の高さを免税店の看板の高さに固定してぶらぶら歩き回った。普段から話に聞いていた duty free shop を実際に立ち寄って見た。不思議な気ばかりがした。

のどが渴いた。しかし飲み物を売る店がなかった。尋ね回って捜した。学校ならば200ウォンで飲めるコーヒーを4000ウォン払って飲んだ。気持ちが悪かわれていたからなのか、惜しくはなかった。

ゲートに入る前にヒョンスン先輩が声を掛けてくれた。いろいろと話をしながらゲートに入った。ボーディングブリッジを通して飛行機に乗った。そばの席にはジュヒが座り、前の席にはユヨン先輩が乗った。間もなく出発する。生まれて初めて乗ることにワクワクして、飛行機が離陸する時、低い声で歓声を上げた。その時は恥ずかしいとも思わなかった。そうしているうちに日本に到着した。

初めて日本の電車に乗った。横には数日前に知りあったミヒ先輩、前には力強い印象のチイン先輩、そしてチャンホが座った。初めの何駅かはちょっと疲れてしまっていた。だんだんと東京に近くなるにつれて、高い建物が見え始めた。窓の外を見ながら乗っているうちに日暮里駅に到着した。日暮里駅で降りて旅館に行った。

教授がホテルと言う単語を使われたからなのか、細い道ばかりを進んでいくうちにちょっと心細くなった。心細かった私の予感はそのままぴったり当たってしまった。

旅館を見上げた。うーん…しかし日本に寝に来たわけではないから、まあ…。旅館の一階に仲間が集まった。原田さんと教授そして通訳をしてくださる柴田さんと仲間が一階のロビーに集まった。これからの日程についてなどを簡単に聞いて私たちは新宿に向かった。

初めて日本の地下鉄に乗った。切符には金額と日本語が書いていた。金額が韓国に比べてとても高かった。地下鉄に乗って私たちは新宿に向かった。駅を下りて歩き回るうちにすっかり日が暮れ、とても高い建物と様々な色の電球を身にまとった木木が沢山あった。歩き回って私たちはとある見晴らし良い高層ビルに登った。とても高い階で降りた。私たちはそこからきれいな夜景を見下ろした。しばらく夜景を楽しんでいるうち先に出発した他のチームがやってきた。そうやって20分ぐらい写真を撮ったり夜景を楽しんでいたが、そこにプリクラがあるのを見つけた。たまたまその場にいたキソン先輩、ウニョン先輩、ミンジョン先輩がプリクラのブースに集まった。自然と撮ろうという雰囲気になったので撮ることにしたが撮し方が分からなかった。韓国にもプリクラがあるが、私たちはコイン投入口を見つけられずユヨン先輩を慌てて捜した。

ユヨン先輩さんはこともなげに横にコインを入れる口があると言った。私たちはやっとコインを入れた。初めは100円ずつ入れる事にしたがキソン先輩が先にお金を変えた。そしてまず一度撮してみようとウニョン先輩が言った。キソン先輩の言うままに私たちはポーズを変えながら撮し、日本の文字も知らずにそのまま撮った。幸いに私の満足出来るような写真が出てきて、4人で一枚ずつ分けた。そしてそれでステッカー写真も終りになった。

高層建築物が印象的な新宿の日程を終え、疲れた身体を引きずって旅館に帰って来た。たたみ部屋が特徴である旅館だったが、韓国では見かけない厚ぼったい綿布団をかけて初日は終わった。

翌日はフォーラムの準備で日本学生に会った。そこで司会者や記録者などと発表方法を決めて、日本の学生と二言三言話をした。まだまだ日本の学生と馴染みが亡くてほんの少ししか話ができなかった。午後には渋谷と原宿に行った。

渋谷はとても賑やかだった。若者が多くイルミネーションを巻き付けた街路樹も多かった。韓国の有名な繁華街を凌駕していた。私ばかりがそうなのかは分からないが、私たち一行は首を上に向けたまま前に行く人につ

いて行った。一駅離れた原宿に歩いて行った。

渋谷が賑やかさが特徴ならば原宿は高級さが特徴だった。ひと目見ただけでも高いとわかるほどの豪華な売場が列をなしていた。渋谷と原宿を歩いたが、何か買おうとは誰も思わなかったと記憶している。しかし、ユヨン先輩は他の学生が立ち止まって食事の場所決めをしている際に何かの売場に入って、あれこれと選んでいた。他の学生が出発しようとして駆け寄ってきたから、カバンを買えなくて残念な表情をめいっぱい浮かべながらしきりに残念がっていた。

このように日本文化を少しずつ理解して行った。二日目はそのように暮れていった。

三日目もフォーラムの準備のために日本の学生と会った。一日だけがフォーラムで、残りは単なる観光をと思っていたのであまりうれしくなかった。しかし私の勝手にすることはできなかった。フォーラムの準備は「慰安婦」問題と文化の二つの分科会に分けられたが、私は文化を選んだ。それぞれの会議室に私たちは二つに分かれて別々に準備をした。色々な話をしてから司会者、方法などを決めて、フォーラム前日だけに昨日よりは具体的に話をして終えた。

私たちは靖国神社に向かった。ニュースで見えてきた神社を目で見るということがとてもうれしかった。賑やかな日本の繁華街を散策するのと同じくらいよかった。私たちは靖国神社に着いて、あちこちを見回しながら「基金」の人の熱っぽい説明を聞き、写真も撮った。思ったほど規模は大きくなかった。小泉総理に会いたかったが来なかった。四日目は本当のフォーラムをした。同時通訳が可能な所で、(取材で韓国の)放送局も来た。テレビの教養番組より見れば、運が良く私の顔を見られるかも知れない。

皆フォーラム会場にいた。前日の和気あいあいとした姿はほとんど見られなかった。なぜかわからない緊張感がグルグルと回わり、そんな気持ちは私一人だけではないようだった。慰安婦問題から始めたが、この主題は両国間の敏感な問題なので少しずつ興奮してきた。

私はこの主題担当でなかったので発言をしなかったが、皆活発に議論し

た。実は私は韓国で「慰安婦」問題に対してサラッと触れてみたがよく分からなかったし、同時通訳も場所も不慣れだったので緊張していたのかも知れず発言はしなかったが、両国の立場の違いについて多くのことを知った。特に東大の学生が、「国際法的に賠償は既に終わっていて、一部の日本の政治世界は右翼によって左右されるとしながら、この問題は大学生という身分である私たちが声高に論議する問題ではない」と言って客観的に日本の立場を代弁する話をしたが、反駁する言葉が思い浮ばなかった。私が属した文化に関する問題は比較的話しやすい主題だったので、みな容易に歩み寄れたようだった。

今度のフォーラムの目的は、両国の若い世代である私たちが会って気楽に話を交わし立場の違いを縮めようというものだ。そのような目的に適切な主題であるためか、私も一言発言したのだが、緊張して震えていたためかよく思い出せない。フォーラムは思ったより硬いものではなく、時間が定められていたからか退屈ではなかったし、日本を理解するのに大きく役立った。

フォーラムが終わった後、飲食店で日本の学生と交流会をした。両国の学生が混ざって座ったが、お互いに和気あいあいとした雰囲気、ビールや日本食を味わった。私は話の内容も重要だったが、日本の学生と話したこと自体が良かった。そして日本語を韓国語のように楽に話せたらいいのになとも思った。

最後の朝、まず上野公園に立ち寄ったが、秋の陽気で道の両側が楓並木だったためなのか、きれいだった。上野公園について鴨や何種類かの鳥たちが多くいる池の周りを歩いた。韓国ではあまり見られない所だったが、都心の中に自然と一緒にあるという考えに、韓国も環境に対してもう少し気を配らなくてはとも思った。買い物もしたが韓国よりも安い所だった。私たち一行は忙しい日程のために約束時間になったら決まった場所で会う事にして忙しく動き回った。私はそこでお酒と香水を買った。特に香水の値段が気に入った。振りかけてみたら、香りも良かった。軍隊に行くまで使いきれないかもしれないが…。

そして私たちは飛行機に乗った。ニュースを見たら大韓航空がストライキをしていて、多くの便が欠航になったと言っていたが、運良く1時間早い飛行機に乗ることができた。

仁川空港に到着した。夜だったし肌寒かった。なぜとは知らず惜しい気持ちがあった。親しい誰かと別れたときのようにだった。しかし楽しかった。5泊6日にすぎなかったが仲間たちと過ごした時間は忘れることはないであろう。軍隊できついときには日本での思い出が慰めになったらよいだろう。日本と韓国の学生は皆忙しいと思う。しかし、私たちが一緒に過ごした時間を忘れず、韓国と日本がお互いを理解していくように少しずつ気を配っていったらよいだろう。

最後にとってもよい経験を与えて下さった李元雄教授に感謝し、次回は皆笑みを浮かべた姿でもう一度、今回のような時間を一緒に過ごせたらばと思う。

過去を直視しながら未来を解いて行かねば

関東大学校政治外交学科3年

李 洙 昇 イー・ヒョンスン

1. はじめに

この文を書き始めるに先立って、『軍隊慰安婦問題と日本の市民運動』を読み進めながら、多くの歴史的事実が人々の記憶の中でだんだんと消えつつあるということを知り、胸の痛みを感じています。

初め『軍隊慰安婦問題と日本の市民運動』という本を読みはじめた時は、大韓民国国民の一人としてハルモニの恥ずべき過去の話とだけ思いました。本の中程までは「慰安婦」についての内容が出ていたので、ますます怒りを抱くほかなかったのです。

1944年が恐らく最後の軍隊慰安婦が連行されて行った時であると思います。当時に15歳以上の女性だったのならば、今は最も若くても78歳以

上になります。日本軍人に5, 6年間身体を捧げさせられたらば、78歳以上の高齢も手伝って健康であるわけがないというのが「慰安婦」ハルモニの証言です。特に精神的苦痛と性病、及びその他の疾病で健康がひどく損なわれ、身動きに不自由があると言います。

これらの「慰安婦」被害者には、日本人の気を損ねたとか日本に反抗した家の女性、まだ結婚していない女性、ご飯を炊いている途中で、のりをあぶっていて、洗濯をしていて、あるいは教室で勉強をしている途中で連行された女性も含まれていると聞きました。この女性たちこそがもっとも悔しい思いをさせられて連行されていき、日本軍人に輪姦された女性であり、そのために日本を憎悪する気持ちがますます深くなったようです。

そこに韓国でおこったイ・スンヨンによる「慰安婦」ヌードの起こした波紋のせいで、「慰安婦」を経験した方々の怒りは極まったであろうと思います。イ・スンヨンのヌード事件では、様々な意見が出ました。高齢な上に時間の流れでだんだんと忘れ去られてしまうから、その前に皆の意識に刻みつける証拠となりえる何かを残すためにヌードを撮ったと言い、また一方の意見は性的快楽にすぎないというものでした。

韓国では、この事件によって「慰安婦」ハルモニの怒りが市民にまで伝わり、結果的にイ・スンヨンのヌード事件は我が国の恥ずべき歴史に拍車をかける行動であったという話まで耳にするようになりました。

では、「慰安婦」ハルモニはどうだったでしょうか？母国に帰って来たといっても周りからの揶揄や村八分、汚れた身という恥辱に満ちた言葉まで耳にさせられたのです。甚だしくは一人で放浪生活をして精神病にかかり、結局は自殺までに行きつく場合が大部分であったことでしょう。

日本の政府が過去の過ちを悔やまず、後世に誤った教育を行うことによって、これから正しい歴史観が崩れはしないかとまで考えました。また我が国は日本政府に抗議ばかりするのではなく、市民団体の活動と支援が国家レベルで進めなければならないと思いました。

2. 「慰安婦」問題の本質

本文に入るのに先立って、「慰安婦」はなぜそうだったのかという疑問を解いてみることにしました。

それは軍隊という特徴のためです。私も、大韓民国海兵隊という特殊部隊出身である24歳の壮健な青年です。軍隊の中にいて出る話といえば、主に女の子の話です。テレビで女性の芸能人が出れば、視線がそちらに向くのが軍隊での実情です。特に人は、戦時状況下には相当な不安感が押し寄せると言います。軍人は一番血気盛んな年ではありませんか？ そうであるならば、人間なら性欲を償むことができますが、極度に不安な状態でその不安を軽減させ、性欲を解消させるために「慰安婦」制度をつくったのだらうと思われます。古代であろうが近代であろうが、戦争で見れば、占領地では女性を極めて厳格に扱います。その理由はまた何だったのでしょうか？

女性を、それぞれが手にしようとして、軍の規律が崩れることもありえます。軍隊というものは軍律が一度崩れればもうそれで終りなのです。それで杓子定規の統制が必要であったから、日本では「慰安婦」をつくったのであろうと思います。

しかし自国の「慰安婦」だったら、お金を与えて正当な関係を結び、拒否した人々にはそれ以上の性的奉仕行為を強要しなかったら、今のような悲しみはなかったのではと思います。もしあなたのお姉さんや妹を私が拉致して暴行をはたらき、性上納の目的で閉じこめて快樂を貪ったらば？ はたしてみなさんはどのような反応を見せるでしょうか？ 私をその状況においたらば、前後の見境なく拳骨が飛んでくることでしょう。過ぎ去った昔のことであるという点でもう一度考え、胸の痛みを感じながらも問題を解いて見ようと思うのです。

3. 慰安婦問題解決のための努力

韓国側の公開手紙要求項目は、「従軍慰安婦」の真相を糾明し真相を公開して、謝罪し、慰安婦追慕塔を立てること、本人とその遺族に賠償すること、教科書に正しく記載して新しい世代に歴史を正しく教えることなど 6

個項目でした。

しかし「慰安婦」問題の解決方法については、サンフランシスコ条約、韓日条約などの条約が既にあるから政府補償は難しいという立場です。多くの人々が、事実はこの問題と直接的な関係のないことだと言えます。しかし、実際に私の兄弟が、私の家族がそうだったとしたらきっと大きな衝撃を受けることでしょう。

赤松良子さんは基金に参加する理由として、被害者がつらい記憶を忘れることをできたとしても加害者としての責任は忘れてはいけないと思い、戦時下に強制、あるいはだまされて戦地に連行されていき、日本軍のための慰安婦になった女性がいたという事実、その人たちが長い年月の間、事実を訴えることもできないまま静かに耐えて、年を取った今では貧困と傷ついた心を抱いたまま生活しておられるということを知った以上、何もしないことは人間として許されないと感じたからだそうです。私も同じです。直接関係してはいないけれども、自国の過去を反省して責任を感じる日本の人々の心が真心と感ぜられるようになりました。

では、こう考えてみたらどうでしょうか？ もうこれ以上、羞恥と恥辱としてのみ見るのではなく、私たちのハルモニ、「慰安婦」女性たちは当時の日本軍人の安息先だった、戦争が恐くて韓国のお母さんたちに会って楽しみ、それを慰めとしてまた戦争に向かっていくことが出来たのではないか？ ウーン、そう思ってみても苦々しい気持ちはたやすく解きほぐされないことでしょう。

また、「慰安婦」は我が国だけの問題ではないのです。フィリピンの「慰安婦」女性に「お金をもらって日本軍を許すか？」という質問をしたら「私はもう日本を許した。私が日本を許さなければ神さまが私を許さない。」と返事をしました。人を許すことができる人々、フィリピンの人々は立派だと思おうという内容を読みながら、恐らくすべての「慰安婦」の方々がこのような考えをしているのではないかと思います。許すということを知っている人はそれだけの愛と忍耐力を持っていたから、今討論しているこの瞬間が一層重要なのではないかと思います。また、韓国と日本の学生のみ

のフォーラムではなく台湾、フィリピンの学生も参加することができたらよいとも感じました。

また国民ひとりひとりの謝罪する気持ち、深い反省が被害者の胸に伝わる瞬間、よりもの悲しい涙を流すであろうと考えました。

尾道市（「アジア女性基金関係者と後援者の声」の中）に住むある女性は、「70~90代の男性は恥を知ってください。若い時の過ちを子や孫に償わせるなんて、何と言って糾弾すればいいのでしょうか。」という言葉とともに、「獣にも劣った人間なら存在するな」と強調しました。自分の父親が犯した過ちを謝罪する姿は本当に正直だと思いました。全体的に、被害者の高齢化問題があるので一刻も早い対応が必要だといえます。このままでは、被害者が皆世を去ってしまい、亡くなってからいくら贖ってもお詫びの言葉を述べても、賠償はしてもそれは無駄だということです。

特に現在の論争と「慰安婦」ハルモニに対してどのような補償がなされなければならないかという問題は、第2次大戦が今後どのように記録されるかという世界的規模の運動の一環として扱わなければならないでしょう。公共教育と政治的行動が合わせて推進されなければなりません。これは人間性を甦らせる闘いでありましょう。すでに戦争で亡くなった方や生きておられる方が、皆ともに反省し努力しなければならない問題でありましょう。

4. 日本の市民社会の努力

韓国NGOの努力も相当なものですが、苦悩を世界に知らせた日本の市民社会運動に対して、多くの惜しみない賞賛を送らざるを得ないことも事実です。人種・性・階級の障壁は消えて、特に加害者という立場で反省し、市民皆が参加する姿は本当に大切なことです。常に未来のみを展望するのではなく、過去に対する誤った点を率直に認識し、直して行こうとする努力のみが韓国人の心を振り向かせることができると思います。

このように文章を書きながら、政府で働く専門家やいろいろな市民団体による文を読んで、それぞれの筆者の見解に追随はしませんでした。今の

私の感情、私の感じていることが「慰安婦」問題を展望する普通の韓国人の視角ではないかと思えます。

どんな問題でも微弱な点が多いものです。しかし、少しずつ努力しながら話し合っていけば、いつかはともに笑いながら暮すことができる日が来るであろうと思えます。

「慰安婦」。本当に胸の痛む悲しい過去です。決して日本のみの努力で解決される事ではなかろうと思えます。政府レベルでの支援と補償が必要だと思えます。

国防が弱くて植民地支配にあい、自国の国民さえ保護することができなかった韓国政府にも責任があります。「慰安婦」のために医療施設を作り、福祉施設を広げることで、これまで大変な苦勞をしてきた方々の、過去の傷を癒してあげなければならないと思えます。

お金だけで済まそうとは決して思わずに、少しずつでも賠償体系をつくらなければならないと思えます。

日本もまた、あらゆる国民の持つ謝罪の気持ちほどに総理の真心のこもった手紙を慰安婦の一人一人へ誠実にお渡しして、韓国政府とともに福祉事業と支援事業を少しずつ広げていくことを追求したなら、両国ともに一歩進んで全世界の良い事例になるのではないかと思えます。

5. 読み終えて

「私ではない私」として暮さなければならない苦痛が終わる日、誰かは知らなければならないし、誰かは知らせなければならない、誰かは忘れてならない、彼女らが誰なのかさえ知らうとしないこの地の多くのお母さん、お父さんが多くなったら、再びこんな悲劇は起きないという保障がどこにあるのでしょうか？ 平和で余裕のある時、私たちは痛みを持つ人々を慰めてあげるべきです。私のハルモニである彼女らは、戦争の商魂を身で体験し、その傷が癒されることのないまま、生涯を孤独や懐絶な記憶と戦いながら生きています。いまだに妄言を吐いて事実を歪曲する人々が存在する限り、私たちはもっと多くの記憶を想起しなければならない理由がある

と思います。反省されない歴史は必ず正さなければならないということを知らしめなければなりません。それが私たちの世代が引き受けるべき歴史的課題ではないかと思います。

国力が弱くて「慰安婦」ハルモニの方々が味わった苦衷を思えば、後代の私たちは、ただ恐縮するのみです。「私ではない私」として暮さなければならない痛みが解消される日、世の中は平和だと言うことができるでしょう。

今このように文章を書いて読む瞬間、私自身から「慰安婦」問題に一步より近づいたのではないかと考えます。まさにこの瞬間が「慰安婦」問題を解いて行くための良い時間だったと思います。

民族主義を越えて女性的な疎通をしよう

西江大学校中国文化科3年

鄭多訓 チョン・ダフン

日本——。私の中の複雑で微妙なある感情が、この二つの文字の前にまぎれ立ちふさがる。親しいようで親しくないようで、羨ましく思いながらもそれを認めたくなくて、知りたいくせに知ろうとしない、論理的に説明しにくいアイロニーを常に伴って近づく国、日本。私があれば軽蔑し振り払いたいと思っている私の中の民族主義感情が、この日本という二文字の前では何故にかくも鮮かに現われるのだろう。もはや百余年が過ぎようとしているのに薄まらずに、むしろ深くなって行くようなこの歴史的感情のゴール。その根源的な問題を解決するための代案は本当にないのだろうか。

近いのにあまりにも遠い日本。私は両国間の距離間隔を明らかにするよりも、その間隔を狭めるための実質的な代案を見つけたかった。両国の間に存在する「歴史」は、2005年を生きる今日までも両国を一層遠ざけ、「民族」という名で凝集させる。しかし歴史を少し後回しにして「文化」の名のもとで日本と韓国を展望すれば、思いのほか緊密になっている日本を見

るようになる。漠然たる偏見の山の間に中国が登場してより緊密になることができた理由が、ドラマの中のとある男性主人公という「幼稚な」理由だったことを思い出す時、私は難しかろうが韓国と日本もやはりそのような「幼稚」が「偉さ」に再誕生することができると思える。これからの韓日両国の関係は「歴史」を中心にした支配権を取るための「男性的疎通」ではなく「文化」で括られる「女性的疎通」にならなければならなからう。私はそのきっかけとなりうる、とある試みをこの度の釜山エイペック(APEC)国際学術会議を通して、少しではあるが覗き見ることができた。

東アジア共同連帯を模索するこの度の国際学術会議で、タイのチュラロンコーン大学のウボンラット教授は「文化的疎通」に焦点を当てて、東アジア問題の解決案を提示している。彼は21世紀の東アジア共同の文化は可能かという発題で、世界化の支配談論を越える「国家的でも全地球的でもないリージョナリズム」を提示しながら、同時に「私たちは自身のエリアを堅く守りながら、周りの多様な文化を理解して受け入れる均衡を取ることがどのようにできるであろうか」という質問を投げた。彼はまたアセアン(ASEAN)や東アジア首脳会議の(EAS)などは、自由貿易及び新自由主義談論のフレームに合わせて国家単位に近づいた”リージョナリズム”であると批判した。安保や経済協力に基盤を置いて国家を単位にしたリージョナリズムは文化を排除し、その結果、企業等にのみ国境を開いて各人間の文化的国境はむしろ遮断しながら、消費主義にかたよった個人を誕生させているというのだ。

彼の言葉を要約してみれば、これからは「非国家的主体」を中心にリージョナリズムを新しく定義づける時であるというものだが、重要なことは「国家間の疎通だけではなく、東アジアの個人がお互いに異なる個人と疏通すること」であるというのだ。彼は、東アジア地域のコミュニケーションでの複合言語使用が必要であり、土着語と公用語の境界を結ぶ「新しい言語教育」を強調する。幾多の言語的資源を持った東アジアで、自由な疎通のための言語の問題を解決することは、個人のネットワーク形成と交流を促進することができるからだ。

私はここに付け加えて、韓日関係改善のための「女らしい疎通」を提案したい。暴力の文化から脱して、奪ったり統制しないで同等な立場で疏通しようとする「女らしい疎通」を通じて、新しい観点で東アジアと世界を眺めなければならないというのである。「従軍慰安婦」問題はそのような意味で女らしい疎通の糸口にならなければならない、軋轢のもとにはならない。しかし、二つの国の間で共同の歴史認識がまだ定まっていないこの時点で、ややもすると文化に焦点を置いた交流は新たに他の不信と軋轢の火種となりうる。

そのような意味で、去る5月発刊された韓・中・日の共同歴史教科書『未来を開く歴史』は三国の市民社会が成しえた一つの成就であると思う。この教科書は、歴史認識の共有を通じて東アジア共存と平和を実現しようとする努力を象徴しているのだ。韓・中・日共同歴史教科書が話題になったエイベック国際会議の二日目、太田修仏教大教授もやはり「東アジアの歴史問題において、最近起こった出来事の中で一番注目されるものは韓・中・日の三国の学者と教師らが『未来を開く歴史』を出刊したこと」であると言った。『未来を開く歴史』が「国際連帯と平和を志向する歴史相を提示して、民衆と少数者の観点から近代史の侵略と植民地支配を正面から扱った」という点で、東アジアの平和に向けた「偉大な一歩」を成したというのである。

もちろん、この教科書がどの程度実際の教育現場で使われるかはまだわからない。ペク・ヨンソ延世大教授は、「質問を投げかけてその答えを提示する教科書の叙述方式を選んだ結果、学生たち自らが歴史問題を考える機会を提供できなかった」と批判したし、この教科書が三国の歴史の構造的連関を説明することができないまま、単純な羅列にとどめた点、侵略と抵抗という観点にだけとどまって歴史解釈があまりにも単純になった点なども挙げられた。

しかし私たちがここで注目しなければならないことは、歴史認識の共有が東南アジアを含めて真の意味での東アジアとして地平を拡大するきっかけになったということである。私は、私たちの韓日学生フォーラムもこの

ような延長線上で成り立たなければならないと思うし、これからは韓日から韓中日の三国になって、各国の学生がともに歴史的認識を共有して、文化を中心とした連帯を作っていかなければならないと思う。

これからの東北アジアの平和と安定は、国家次元の協力にだけ寄り掛からない。むしろ国家を越えた市民社会の連帯が重要な役割をすることができる。国連武力紛争予防のためのグローバル・パートナーシップ(GPPAC)の支援をもらい、韓国と日本、フィリピン、マレーシア、台湾、モンゴルなどの市民団体が集まって結成した「北東アジア地域会議」がそのような事例である。この会議は昨年2月に武装解除及び非軍事化を通じた平和共存システムの構築、人道主義的援助、及び開発サポートなどを勧告する北東アジア行動議題を採択した。1年6か月あまりの作業の末にあげ出たこの議題は、「北東アジア市民社会が平和と安保のために協力するという誓約」である。

しかし、北東アジア市民社会は相変わらず、この地域の根深い国家優位と冷戦体制の遺産である同盟関係、最近になって一層強化された民族主義の影から脱することができない。北東アジアの大部分の国々が処した国家と市民社会の関係の中で国家が優位を占めている現実、市民社会の進む道が相変わらず険しいことを示唆している。なおかつ北東アジアの市民社会は、20世紀の帝国主義的侵略と支配の歴史が残した民族主義のくびきから自由になっていない。北東アジア安保の地形を支配している同盟体制の堅固さも、この地域市民社会の連帯に邪魔をしている。

しかし、これは決して乗り越えることのできない制約ではない。フローリアン・クールマスドイツ日本学研究所所長は、軋轢が甚だしかったヨーロッパでも、民族主義的色彩を減らして共通の歴史的合意を導き出したと指摘し、北東アジアでも感情を排除した冷静な対話を通じて歴史的合意を導出できると楽観視している。国家権力は、市民社会の要求に応じるか同意を受けなければ、絶対的な力を行使することができない。なおかつ情報技術の発展による市民社会内部における疎通方式の変化は、国家権力に一定の制限を加えている。私たちはこの点を想起して、民族主義

を越えた北東アジア市民社会の連帯を模索しなければならないだろう。このような流れの延長線で韓日学生フォーラムの持つ意義はとても大きいと言えよう。相互でもっとも排他的な民族感情の本山である韓日両国間の疎通。その中で21世紀を生きて行く主役となる韓日両国学生たちの交流は、これ以上過去の間違いを犯さず平和と共存の時代に和合として結ばれる「女性的疎通」の中心的な場になろうと信じる。

——日本の学生から——

「かわいい、おいしい」…同年代としての共通点

中央大学法学部政治学科3年

井口 弘美

韓国と聞いて、ヨン様、キムチ、チヂミ、ビビンバ……といったものを真っ先に思い浮かべてしまう私が、日韓学生フォーラムという大それたものに参加してしまった。今まで表面的にしか韓国に接していなかったため、今回のフォーラムで韓国の学生と直接歴史問題や、より深く文化というものについて議論を交わすことに大きな不安を抱いていた。今日多くの日本人はテレビ番組、俳優、歌、食べ物などを通して意識的に、または無意識的に韓国文化を取り入れている。私も日常的に韓国料理を食し、韓国旅行にも行き、日本に留学している韓国人の友人もいる。しかし自分たちにとって魅力的である＝都合のいい面だけに目を向けていることに後ろめたさを感じる部分もあった。そのような中で今回、このフォーラムのお誘いを受け、私の中の薄っぺらな韓国観にピリオドを打つために、不安を抱きつつも参加させていただくことにした。

フォーラム中では、過去＝慰安婦問題、未来＝文化・交流問題について、最終日の公開フォーラムに向けて分科会で議論を行った。ここでは詳しい議論の内容というよりは、その場の雰囲気や、それ以上に議論以外の場を

通して韓国の学生と接してみたの素直な感想を書きたいと思う。

私はまず、顔合わせの時点で面食らってしまった。学生が自己紹介をしたのだが、韓国の学生は皆すごそうな肩書きを持っている人ばかりで、これまでかなり主体的に活動をしてきて、きちんと問題意識を持っていることがうかがえた。議論を進める中でも彼らの頭の良さを実感していく。とにかく韓国の学生は物事を論理的に考えることに長けているのだ。問題を深く分析した上で自分たちの意見をきちんと持ち、議論の全体を把握して的確な発言をする。それに触発されるように日本の学生からの意見も次々と出され、議論は充実したものになっていった。

このように若干韓国の学生の能力の高さに面食らいながら彼らと交流が始まったが、一旦議論の場を離れてしまえば、やはり同年代の学生同士である。初めは言葉が通じずもどかしさを感じたが、あっという間に他愛もないことで大笑いするようになった。同じものを見て「かわいい！」と喜び、同じものを食べて「おいしい！」と笑顔になる。その日初めて会った韓国人と一緒に歩いているのだが、日本の友達といるのと同じ感覚なのだ。細かいところでお互いの国独特の考え方の違いもあったが、それを知るのがまた興味深かった。外国人と接する一番の魅力はここにあると思う。育った環境が全く違って、実際接してみるとその共通点の多さに安心感を覚える。と同時に、やはりそれぞれの国が持つ特別な雰囲気が良い刺激にもなる。

フォーラムの最終日にある韓国の学生が、「私の力の源泉は韓国人であること。そのことに誇りを持っているし、だからこそ頑張れる。」と話してくれた。一般的に、日本人は日本人であるという意識が薄く、アイデンティティが曖昧だと言われるように、私もこうした感情は持っていなかったのが大変興味深かったのをよく覚えている。その学生があまりにも真っ直ぐそういうのを聞いて、羨ましくもあり、また私たち日本人が海外に出た時の弱さの一因がこれではないかと感じた。このように共通点と相違点を肌で感じることは、国家レベルでの良好な関係を築く上でも必要不可欠ではないか。人間は自分と違うものを毛嫌いし、自分から切り離そうとする傾

向があるが、どうしてそこに共通点があることに気が付かないのだろうか。これは韓国人と日本人という関係に限らず一人の人間と人間の間の中にも当てはまることで、完全に同化する必要も無ければ全く相容れないものだと区別する必要なんてないはずだ。

議論の場でも靖国問題、文化問題に関して日韓で異なる意見が多く出たが、今回のフォーラムの目的はひとつの答えを出そうとするものではなかった。それがフォーラムを意味あるものにしたと思う。結論が出ないと前に進まないと思う人もいるかもしれないが、結論ばかりを急ぐから意見の食い違いが大きくなり、議論が平行線を辿るという現実もある。ほんの3日間という短い期間ではあったが、直接韓国の学生と接し、友達同士ではなかなか話すことのない話題について真剣に議論する場に参加できた私は本当に運が良い。相手と自分の違いを認識し、それを知った上で共通点の多さを実感できた素晴らしい機会だった。

こうした活動が、すぐに国家同士の問題解決につながるわけではないが、人と人との相互理解という草の根レベルでの交流は、長い目で見れば必ず国の方向性を決めていくことになるだろう。こうした場を提供して下さった方々、そしてなにより良い刺激を与えてくれた日韓両学生のみんな、

反発と自省——歴史を直視して未来をつくる

早稲田大学教育学部3年

嘉村 真裕子

私は今回のフォーラムに参加するまで、「慰安婦」問題について全く関心を持ったことがありませんでした。日本が今までにしてきた歴史について関心を持っていなかったというのは、日本人としてとても恥ずかしいことですが、今までの教育の中でもほとんど触れてこなかったし、目を向けるのが恐ろしくて無関心を装ってきました。けれども、その中で韓国に対しひょんなことから興味を持ち、そして韓国を好きになり、相手の国・自分

の国の歴史について知っていかなくてはならないという意識を持つようになりました。そんな時、この「日韓学生のフォーラム」に出会うことが出来たのです。

フォーラムに参加するにあたって、不勉強な面がとて多く、本番のフォーラムの時には韓国側の学生の発言に圧倒されるばかりで自分の中で考えもまとまらず、発言することが出来ませんでした。そして、フォーラムの最中は、私の中では過去の歴史であって、現在の私たちには全く関係のないのになぜこんなにもさも自分たちに関係あることのように、私たち現在の若者までも罪があるかのような口調で責め立てられていたことに対して反感をもつ部分が少なからずありました。もちろん、日本は加害者の国であり、責められるのは当然のことかもしれないけれど、被害者の国が加害者の国を責めるだけではなんの解決もないし、加害者の国が反省以外の言葉を述べられる訳はないじゃないか、という気持ちがありました。それよりも、現在の日韓関係についてもう少し柔軟に考えていった方が両国にとってもっと有効的なのではないかという思いすらありました。実際、現在では韓流ブームもあり、文化の面から両国の友好関係はもっと築いて行けるのに、という気がして仕方なかったです。

しかし、フォーラムが終了した後最近、自分で「従軍慰安婦」に実際にされた方々の証言を集めた本を読みました。その中には、私が今まで知らなかった世界がありました。私がこれまで目を背けてきた日本の過去です。知らなかった、というより、むしろ知ろうとしなかった世界ですね。読み進めるうちに、日本のとても残酷な行動の数々を知りました。女性として、自分が実際にその立場に立ったらと考えると恐ろしく、そして許すことの出来ないこととして感じられました。日本軍はほぼ拉致同然に朝鮮やアジア各国の女性たちを連れ去り、「慰安婦」にさせました。これは、紛れもなく日本が過去にしてしまったことです。しかしながら、私たち現在の若者の多くはこの事実について詳しいことはなにも知りません。フォーラムに参加して、「慰安婦」について考える機会など大抵の人間にはありません。そして、私がフォーラムに参加し、本を読む以前に持っていた反感をもつ

気持ちをもってこの問題に対していると思います。けれども、私はこの問題は過去に関わらず、現在にも通じた問題なのだと思うようになりました。

韓流、韓流と、ただ騒いでいるだけでは、真の友好関係は築けないと思います。私は韓国と日本は、いずれアジアを代表する国として共にアジアを引っ張っていく国になっていかななくてはならないと思います。その中で、友好関係を築くことは重要であるし、そのためには過去の歴史も知らなくてはなりません。お互いの非は認め、和解の方向へ向かって行こうという姿勢は持たなくてははいけません。韓流も、互いの歴史を理解した上でその上に立ってこそ意味のあるものだと思います。現在のこの風潮を利用するのでも良いし、歴史から入るのでも良い。どちらにしても、日本の多くの人が韓国、そしてアジアの歴史に興味を持ち、共に歩む姿勢を見せていける世の中になることが私の望みです。さらに、自分の中でもっともっと歴史、そして現在、未来のことについて考えていきたいです。

「日韓学生のフォーラム」に参加したことにより、私が今まで目を背けてきた問題に真っ直ぐ目を向けることができ、そして終わった後も自分なりにそのことについて考えるようになりました。このフォーラムは、私の中で一つの“きっかけ”だったと思います。自分が今までに考えてこなかったことについて、同じ年代の韓国人の学生の意見を聞き、自分でもそのことを受け取り今後につなげて行こうという意識を持つことが出来ただけでも、一歩前進出来たことであり、感謝しています。本当にありがとうございました。

韓国の友人たちへのメッセージ

早稲田大学3年

高木 理

「近くて遠い国」。日本と韓国の関係は、長い間この一言で表現されてきた。歴史的、文化的に深いかかわりを持つ隣国同士が「遠い国」であり続

けてきたのはなぜなのだろうか。三十六年にわたった植民地支配によって生じたわだかまりは、その倍の時間が経った現在でも解消することはできないのだろうか。小泉総理の靖国神社参拝に抗議する韓国の人びとの様子を伝えるニュースを見ながら、漫然と考えていた。そんな日常を過ごしているときに、今回のフォーラムの存在を知った。一人でぼんやり考えてもわからなかったが、韓国の学生と実際に話をしてみたら何かわかるかもしれない。そう思ってこのフォーラムへの参加を決めた。

「私たち大人は、日韓の友好的な関係を築くことに失敗した」。期待と不安を感じながら参加した初日の、李元雄教授のこのことばが印象的だった。なぜわれわれの親たちの世代は、韓国の人びとと互いに心を許しあい、信頼しあえる関係を築くことができなかったのだろうか。その答えを教えてくださいましたのは韓国の学生たちだった。

彼らとともに過ごしたのはほんの数日間だったが、その短い時間を惜しんで、われわれは本当によく話し、よく笑い、そしてよく飲んだ。何時間話しても話題が尽きることはなかった。流行っている音楽やドラマについてや学生生活、恋の話、そして時々、過去の不幸な歴史についても語り合った。ささいな交流ではあったが、韓国の学生が何を想い、何を大事に思っているのかということを感じ、理解することができたように思う。きっと韓国の学生も、日本の学生とのふれ合いを通して、同じようなメッセージを受け取ってくれたはずだと信じている。テーマ別での討論会や公開フォーラムの場では、互いの価値観、歴史観が衝突することもあった。しかし、それでも対話を続け、互いの立場や考えに想いをめぐらすことの大切さを、韓国の友人たちは教えてくれた。

われわれの親の世代が、韓国の人々と信頼関係を築くことができなかったのは、まさにこのように触れ合い、意思を通じ合う機会がなかったからではないだろうか。親身の交流がなければ、相手への想像や寛容、共感はい生まれないだろう。それ以前に、相手の存在にさえ気付かないかもしれない。かつて「核兵器は人類全体の不幸」だと言った日本の多くの国民に、韓国・朝鮮人被爆者の存在がほとんど見えていなかったように。親身のふ

れ合い、この最も基本的なものが欠けていたからこそ、日本と韓国は長い間「近くて遠い国」であり続けてきたのだろう。

われわれの世代は心を許しあえる関係を築くことができるのだろうか。日本と韓国の間には未解決の問題が多く、価値観、歴史観の相違がその解決を困難なものにしている。しかし、こうした相違を対立の種にするのではなく、そこに多様性や可能性を見出していくことが大切だと考える。そのためには、今回のフォーラムのように、日本と韓国の学生が相互にふれ合い、対話を続けていくことが不可欠であると強く思う。

最後に、今回このような貴重な機会を与えてくれた李元雄教授やアジア女性基金の職員の皆さんに、心から感謝している。そして何よりの喜びは、自分に新たな発見と展望とを与えてくれた韓国の友人たちと出会えたことである。私たちの手で、日本と韓国の関係を、「友人のいる近い国」にしていく努力をひとつずつ積み重ねていきたい。

私たちの時代の日韓交流

中央大学法学部政治学科

小宮 輝子

私は、今回の日韓フォーラムに参加するまで、隣国であるにもかかわらず韓国について知識が浅く、「慰安婦」問題も本を読んで経緯や歴史について改めて知ったこともあり、新しく学んだこともあった。韓国と言えば、祖父が植民地時代に韓国に住んでおり、以前から祖父から韓国の話を聞いたりし、祖母がキムチを作ってくれたので、韓国には小さい頃から興味があった。

反日デモで沸いた2005年春、再び教科書問題や靖国問題などで日韓の関係に亀裂が入った。教科書や世論、メディアで日韓関係の過去が見直され、私は、その過去を背負って私たちはこれからの将来へ向けて何ができるか、何をしなければならないかに注目した。現在もなお進行形である日

韓問題について同年代の学生の意見を交換できたのは、本当に貴重な体験だった。

2日間にわたって行われた分科会で、「慰安婦」問題などの日韓両国の過去と、文化を通じた将来の日韓友好の2つのテーマについて話し合われた。私は、反日感情や深い関係の歴史があるなか、「進まなければ何も変わらない」という思いと、今韓国の学生は日本をどのように見ており、日韓関係をこれからどのように発展させたいかという着眼点から、後者の文化を通じた日韓の将来を考える分科会に参加した。

分科会では、日本側と韓国側の両者から問題提起が出され、主に韓流ブームや韓国の儒教社会、反日報道に関する世代間の考えの差異や、さらには靖国問題にまで議論が発展した。「文化」というテーマ設定の下、韓国で起こった反日デモや日本での韓流ブームについての議論の中で、世代間の違いが目立った。日本での韓流ブームは主に熟年層の女性に受け入れられており、若者はあまり興味を示さないことが指摘された。実際に、私の母も韓流ブームの流れに乗って、『冬のソナタ』のファンになった一人だ。確かに、韓流ブームは年代層に偏りがあると感じる。しかし、重要なのは、受け入れられる年代層の偏りではなく、“関心意識を持つこと”である。韓流ブームの矛先が主婦層であると言われているが、その韓流ブームがもたらした効果は大きい。元々は『冬のソナタ』というテレビ・ドラマが日本でヒットし、それにより韓国の食文化やメディア、観光を通して、双方への関心が高まった。

2002年の日韓ワールドカップを機に、政府は日韓の友好を全面的に押し出していたが、『冬のソナタ』を始めとした文化を通じた日韓の友好は、地域市民を中心に確実に広がっている。

しかし、一方で、韓国の学生から、「韓国人は今の日本に対して2つの視点から見ている」という二重構造を表す意見が出た。それは、“日本への憧れ”と、過去の歴史上から来る“日本への対抗意識”という見解である。対立的な二重の見解により、彼らは複雑な表情を見せた。

私は、以前から韓国人の中には日本に対して二重構造という意識が存在

していると予想していた。それでなければ、2005年春に騒がれた反日暴動はあんなにも表面化しなかったであろう。しかし、予想していたにもかかわらず、今の学生の心の中にも、未だに歴史から来る日本への不信感があるという事実を実際に耳にして少しショックを受けた。それと同時に、相互が納得するまで真実を掘り下げなければ問題解決には至らず、今後も日韓の溝は埋まるはずがない。両者が共に和解し、関係をより良くするためには、双方の引っかかりを解かなければなるまい。しかし、そもそも現段階では、その引っかかりさえも食い違っており、更にメディアや情報化社会の拍車がかかり、真実が絡みあっている状態にある。

最後の意見交換会では、一番大事な何よりも相手を“知る”こと”であり、一人一人が互いに関心を持ち、自分の目で真実を見ることによる相互理解の重要性を説いて今後の日韓友好に向けての意見が一致した。

私は、今回、日韓フォーラムに参加して一番感じたことは、教科書や文献、メディアによって予め知っている韓国や日韓関係のことも、韓国の学生から実際に直に聞くと違って聞こえるということだ。言い換えると、媒体によってもたらされ自分の頭の中で想像し理解して処理する知識と、実際に当事者の口から聞いて頭の中で処理するのでは、例え同じことを言っているのであっても、自分の頭の中での捉え方が違うということだ。義務教育の教科書で勉強した日韓関係の過去の一点のことであっても、実際に韓国の学生から話を聞くと、その声と共に彼らの感情や気持ちが重なり、より強い線となって私の中に入ってきた。直接の対話がいかに大切であるかと、その対話を重視することで誤解は決して生まれてはならないと思った。

緊迫した分科会や議論が終わると、日韓の学生たちは共に東京の観光をしたり、私生活について語り合ったり、杯を交し合い、お互いにすぐに打ち溶け合った。話の内容も分け隔てなく、笑うツボもあまり変わらないため、同じ話で笑い合えるたびにお互いの心を徐々に開かせた。例え、韓国の学生が分からない冗談があっても、普通にネタを明かすように説明してあげるとすぐに笑いが起こった。

現在でも、私は韓国の学生とメールなどで連絡を取り合っているが、住んでいるところも文化も習慣も歴史も言語も違うが、今という時間を同じような話題や冗談で笑っているのかと思うと、例え離れていても嬉しくなるし、笑っている姿が想像できる。そしてどんなに離れていてもお互いのメールにはいつも末尾に再会を願う文字が書かれている。

日韓国交回復40周年という記念すべき年に、韓国の学生と出会い、日韓の関係を再び問い直すという素晴らしい機会を与えてくださった、中央大学法科大学院の横田洋三教授、関東大政治外交学科教授の李元雄教授、そしてフォーラムを主催してくださり、終日お力添えを頂きましたアジア女性基金の皆様にご場をお借りして心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

会って話して、たがいの偏見に気づいた

早稲田大学2年

岸 加那子

この3三日間、私は本当に貴重な経験ができたと思う。今まで日本の中だけで、韓国との歴史や現在の韓流ブームを捉えてきたのだが、それを反対に韓国の学生から見た意見を聞いたことがとても新鮮であった。また今回は話し合いに通訳が付いたため、学生間では普段あまり話し合うことのない歴史問題について、言葉の壁を越えて率直にお互いの意見を出し合うことができた。

私自身、韓国人の友達がたくさんいるが、日韓に関わる歴史問題について話したことはなかった。しかし、今回、韓国の学生とこういった問題について話し合ってみて、知らないではすまされない、問題を解決するためにはまず相手をよく知ること、そして理解することが不可欠だと感じた。議題であった「慰安婦」問題についても、私はそれほど多くのことを知らなかったため、韓国の学生からの質問に的確に回答することができなかつ

た。「慰安婦」問題は、韓国の問題というより日本の問題である。補償に関する複雑な問題もたくさんあるが、まずは問題の本質を知らなくては何も始まらないと思った。韓国の学生から、「二度と同じことを起こしてほしくない」という意見が出されていたが、私も同感である。二度と起こさないためには、このことを語り継いでいかななくてはならない。忘れ去ってはいけないのである。しかし忘れる以前の問題に、日本人はもっと多くを知らなくてはいけない、そのことを痛感した。

今回、両国の学生たちは、ひとつの目的に向かい、力を合わせることによって国の差を越えて友情を深められたと思う。中でも私が一番大きな成果だったと思うことは、互いに相手国に対する偏見に気づき、それを払拭できたことである。韓国の学生の中には、日本に来る前に、「日本人はみんな靖国神社に参拝する」、「日本人の心の中には常に天皇の存在がある」と思っていた人もいたそうである。しかし、それが偏った見方だったということに気づいてくれた。また日本の学生側からは、韓国では反日デモが頻発し、反日ドラマなどもたくさん放映されているのでは、という意見が多数あった。しかし、これも韓国の学生の説明によって、偏った捉え方だとわかった。このように、実際に人と人が話をすれば、見えてくるものがあるというのが、今回このイベントに参加して強く感じたことである。

三日間の最終日は公開フォーラムという形式をとったので、両国の学生以外の会場の方も話し合いを聞くことができた。今回取り上げた問題は、多くの人に知ってもらいたいことだったので、たくさんの方が聞きに来てくれてとてもよかったと思う。一般参加者からの発言もあったため、私たちも様々な方面から意見を聞くことができ、勉強になった。

ただ、歴史問題などはとても難しい問題であるため、これを話し合うには三日間という時間は少し短かった。もっと多くのことを話し合いたかったし、韓国の学生の意見ももっと聞きたかったと、フォーラムを終えて思った。また歴史問題に関しては、日本の学生と韓国の学生の知識面でのレベルに多少差があったという事実は否めないと思う。私自身も事前にもう少し準備ができればよかった。そして分科会やフォーラム以外など同時

通訳がつかない場では、お互い日本語、韓国語がわからない学生が多かったため、意思疎通が難しかったことが残念であった。

今回、日本と韓国の歴史やこれからのことについて色々考えたが、やはり一番感じたことはお互いを知る努力をすること、そして、お互いを理解することの大切さである。日本と韓国の間には、いまだに歴史問題など難しい課題が山積みになっているが、地道な一般市民の交流というものを通じて、その山を少しずつ切り崩していくべきだと思う。そのときに必要となることはお互いの信頼関係である。信頼関係を築くためには、相手の国、そして人を知らなくてはならない。”百聞は一見にしかず”——まずは人と人とのつながりから始めていくのが大切だと痛感した。今回、この「日韓学生フォーラム2005」に参加した経験を生かし、これからの日本と韓国の未来に向けて、私も何かできることを探していきたいと思う。

国と歴史認識の対立を超える市民

中央大学法学部

河西 智美

私が今回の日韓学生フォーラムに参加した理由は二つあります。ひとつは、2005年夏に欧州国連本部で行われた人権小委員会に参加したことをきっかけに、“人権”に興味を持っていたこと、そしてもうひとつは、もともと「慰安婦問題」に興味があり、また日韓問題にも同様に興味を持っていたことが挙げられます。特に中学二年の歴史の時間に担当教師が、教科書には載っていないが、事実として知っておかなければいけない出来事として「慰安婦問題」を教えてくれたことが印象に残っていました。その後、中学三年での自由研究課題のテーマにも選び、いくつかの文献を読むなどして自分なりに「慰安婦問題」を調べた経緯もありました。

今回の分科会のテーマは『過去に関する問題』と『日韓文化・交流問題』の二つでした。私は前者のグループに属し、分科会を進めていきました。

このテーマは反日デモや韓流ブームが広がる中、過去と現在の相反する状況をどのように我々は認識していくべきなのかという、今を生きる私たちが直面している問題を解いていく上で重要なものです。

まず、2日目の分科会で韓国側の発表者キム・ハラさんは「慰安婦問題」などの日韓間の厳しい歴史問題について「慰安婦問題は制度自体の問題であり、国家レベル・市民レベルの解決策を進めていくべきだ」と発表しました。つまり、日本政府に謝罪だけでなく、真相究明と適切な救済措置を要求し、国単位ではない市民の団体、つまり国家を超えた団体の必要性を訴えたのです。それに対し、私たち日本側は、①慰安婦対処の評価 ②評価の結果をふまえ、過去に何ができたはずだったのか ③慰安婦問題をどうとらえ、今後の両国の関係発展につなげていくかという3つの論点を提案し、議論はお互いがどのような歴史教育を受けてきたのかという話になりました。そこで私が驚いたことは、韓国では、一種類の教科書しか使用されておらず、日本の植民地時代は日本強制占領期と称され、「慰安婦問題」に関しては、1ページにも及ぶ記述と深く考えさせるコメントも記載されているという事実でした。一方、我々日本の学校教育では「慰安婦問題」は教科書から削除され、日本は原爆を受けた被害国であるということが強調されています。

私たちは、まず、このような両国の歴史認識・歴史受容の態度の違いから問題の相違が生まれたのではないかと考えました。韓国側の学生からも「国定教科書は韓国独裁政権の名残であり、これは変えるべきである。」という声も聞きました。また、「韓国では儒教思想が強いので『慰安婦』問題は長い間誰も口にしなかった。しかし、時代の流れ、自由な時代の到来により日本と同様に90年代初めに問題視され始め、話題になった。だから、市民レベルでは無関心の人も多く、いわば、日本と同じであるかもしれない。」という声もありました。私は、韓国の人々は、歴史教育にとっても熱心で、特に「慰安婦問題」は幼少期から教えられてきているものだと思っていたので、この声はとてとても意外でした。そして私たちは最終的には、①どのような歴史教育を受けてきたのか ②どのようにこれから歴史認識をし

ていくか ③どのようにアジア女性基金は評価できるか、という三つの争点に加えて、今後の方向付け、解決策を考えていこう、という結論を出しました。

今回のフォーラムで、私は共通認識を持つことの大切さを学びました。特に、フォーラム終了後に、ともに肩を抱き合い、飲んだり話したりする中で、私たち学生同士の感覚は全く同じであり、こんなにも近い存在だと実感できました。なのに、歴史認識の相違という壁のせいで遠い存在になってしまっているということはとても悲しいことだと痛感しました。最後に「私たち大人はわかり合えなかったが、君たち若者には共に話し合い、理解し、新しい関係を築いていってもらいたい。」という李元雄先生のお言葉が今も胸に響いています。歴史認識の違いは国家主権の違いとも言えるでしょう。国家対国家で解決しようとするといつまで経っても解決はできないと思います。個人で、市民レベルの取り組みこそが今の私たちには必要なことだと今回のフォーラムで身にしみてわかりました。自分の住む地域から意識改革に取り組めるよう教育を進めていったり、多くの人と話し合っていく機会を広げていきたいです。言葉で言うことは簡単です。せっかくこのようなすばらしい機会を得たのですから、私たちは行動に移して、両国の今後の関係発展に貢献していかなければいけないと感じています。

最後に、今回このようなすばらしい機会を与えてくださった先生方、アジア女性基金関係者の皆様へもう一度感謝の言葉を申し上げます。

真剣に議論、でも打ち解けた付き合い

早稲田大学教育学部2年

唐木 優衣

「日本人は結婚したらみんな靖国にお参りに行くんでしょ？」と真顔で聞かれ、私は心底驚いた。緊張の顔合わせを終え、昼ご飯を食べながら少し

ずつ親しくなり始めていた初日。翌日の分科会分けと話し合い方を決め、フィールドワークで靖国神社に歩いていったときのことだった。私は以前にも一度フィールドワークで沖縄の友人と一緒に靖国を訪れたことがあり、そのときにもなんともいえない違和感のようなものを感じていた。少なくとも私の世代で、靖国に親近感を持つ人々はほとんどいないだろう。

そこにきて、先ほどの質問なのだった。彼女は韓国のテレビでそうしているのを聞いたと言っていたが、私はなんとか韓国語で、それは違うと説明して自分たちの世代が靖国に対してどう思っているのかをできる限り話した。韓国の学生たちと話して感じてきたことは、日韓両国でお互いに持っているイメージというものが多分にメディアの影響を受けているということだった。それは、歴史問題にしる、韓流ブームにしる、同じである。そして今回このフォーラムはそういったメディアによるお互いの「知っているつもり」を自覚する絶好の機会を与えてくれた。

大学入学後、第二外国語として選択した韓国語が好きになり、2月からはソウルにある高麗大学に留学予定の私は、今までたくさんの韓国の学生と出会う機会があり、友達もいる。ただ、普段からこのような微妙な日韓関係に関わる問題を話したことはあまりなく、また無意識のうちに避けてきたのかもしれない、と今回気づいた。そういったいつもはあまり話さない（話せない）歴史問題や文化の問題について、出会って3日足らずでお互いの意見をぶつけられる関係ができたということは、このフォーラムでの一番の収穫であった。

「慰安婦」問題に関しては軍事政権下における過去の歴史問題の真相究明を行っている韓国のように、日本も国家としてこの問題に取り組むべきであり、民間で「免罪符」として行われたアジア女性基金は必ずしも評価することはできない、という韓国側の意見と、アジア女性基金の働きをある程度評価し、この問題に対するアプローチとして市民・個人としてできることを「知り、考え、行動する」ことが重要なのではないかという日本側の意見があり、対立とまではいかなくとも意見に違いが出た。私は日本・韓国両方の考え方の違いでこの問題に対するアプローチがこれだけ違って

くるということがわかっただけで、とても有意義な話し合いだったのではないかと思う。政府間で歴史問題を話す際に、お互いの考え方やバックグラウンドの違いをこれだけ認識しているだろうか。お互いの意見をはっきり言いながら、相手の意見にも耳を傾け、歩み寄ろうと努力することに関しては今回のフォーラムがより進んでいるように思えてならない。

また、文化の問題に対しては、特に日本側から韓流ブームに乗っているのは中高年の世代が中心で、若い世代はそれを冷ややかな目で見ていて、という意見が、実際にその世代である私たち日本側から出された。しかし、そうはいつでも、やはりそれまで「近くて遠い」国だった韓国が「近くて近い」国になったことに関して韓流は大きな役割を果たしており、ドラマ・映画や韓国料理など様々な形態で私たちの生活になじんできていることは確かである。ただ、韓流と歴史問題を取り上げる際のマスコミの態度は全く異なり、日本では韓国に対するイメージに「ダブル・スタンダード」があると私自身は考える。そのように、メディアを中心に盛り上がった韓流ブームでも埋まらなかった日韓の溝を埋めていくのが、個人対個人の対面の出会いであり、まさに今回のようなフォーラムではないだろうか。

今回、私は初日に「一応韓国語もなんとかできるし」という軽い気持ちで司会を引き受けてしまい、特に本番は緊張の連続で経験不足からフリーディスカッションにおける司会というもののいかに大変かを痛感させられた。それでもフォーラムがなんとかうまく進行したのは、いつも話の方向性を決めてリードし、ユーモアを交えてまとめてくださったノ・ヨンネさんのおかげである。彼には本当に感謝したい。また、韓国語漬けになりながら、韓国の学生たちの話す話を司会として一足先にわかるように必死に聞き取り、通訳さんがいない場では決してうまいとはいえない韓国語でがんばって話したのは、とてもいい経験になった。そしてそんな私の韓国語に耳を傾けてくれ、日韓の現実にある問題を話し合うときは真剣にお互い躊躇や遠慮なく意見を出し合い、それ以外の時間は同じ世代の大学生として一緒に笑ってなんでも話せる、そんな一人一人が魅力的な両国の大学生たちに会えた私はとても幸運だったと思っている。

相手の立場になって考え、尊敬する大切さ

中央大学法学部国際企業関係法学科

野田 真理

期待に胸を膨らませ、四ツ谷駅へ向かう。混雑した電車から降り立つと、素敵な冬空が日韓の学生を歓迎しているようであった。

日韓フォーラムに参加する以前に、様々な視点から物事を考えようと試みたが、果たして私は、韓国についてどんな面を知ってきたのだろうか。歴史や地理で習った知識と、メディアによって手の加えられた情報、また在日コリアンや韓国人の知人を通しての印象によって描いた韓国像は、もろく不透明なものであった。

初日、自己紹介をして対面した後、昼食をともにした。今まで韓国語を学んだことがなく、全く理解が出来ないのだろうと予想していた。しかし、我々の言語はとても共通性があって、少しならば分かる言葉もあった。日本語、韓国語を話せる学生が数人いたので、自由時間に行動を共にしても、お互いの感覚を知る事ができて、とても有益であった。

二日目、「慰安婦」問題の分科会へ参加した。根底には複雑な問題が存在していたために、親の世代では互いの国について語る事がタブーであり、現在でもそのしこりは完全には消えていない。李教授は、その対話に失敗したとおっしゃっていたが、60年たった今になり、我々が話し合うことになったのはなぜだろうか。日本と韓国の関係性について考えのゆく人は少なかったのだとうかがった。世代が交代していく中、60年前に目と気持ちを向ける責任が我々にもあると実感した。しかし私にはまだ至らない点多く、本当に自分自身の勉強不足を思い知ることとなった。歴史では習っていない、では済まされない。しかし、何も知ってきてなかったがゆえ、自分の国の人間が加害者意識を持つべきであるという意見を聞いた時に、何故か戸惑ってしまった。自分には直接関係ないと一蹴してしまうこともできるが、本当に必要なのは、相手の立場に立って柔軟に物事を考える事であると実感した。

教科書が問題に挙がる事が多いが、これを例えに検証してみたい。種類はあれど、日本の社会科の教科書に「慰安婦」の記述は少なく、個々の認識に差が出る。対して、韓国は国が定めた教科書は一種類しかなく、情報性や多様な視点の選択肢に欠ける。日韓共に、教科書を情報源にするには疑問を感じるのは当然である。現代では、教育現場で使用される教科書だけでなく、祖父母や両親の世代の話、文献や身近なメディアから手に入られる情報を自分で選び、読み解くことができないと、偏った情報に流されてしまう。

また、日本の学生であっても韓国の学生であっても、「慰安婦」問題に関して関心の度合いは人それぞれである。その中で、互いの意見を聞くことができたのは新鮮であった。伝えたいことが沢山あるのに、うまく伝えられない。思っている事が上手に言葉にできない。悔しいと思うことが何度もあった。憤りを感じることもあった。なぜ自分がこのような事実を知る機会が無かったのか。「慰安婦」にさせられていた方々は、ちょうど今の自分たちの年頃であったというのが、考えていても何ともやりきれない気持ちになる。

歴史的背景から、日本に対しての印象が良くない韓国の人々がいるのも承知していた。しかし好意的な人もいるし、自分の目の前にいる韓国の学生と接していると、互いに何の違いのない若者だということが分かる。唯一の違いと言えば、育ってきた環境が違うのである。ゆえに、その差異を知った上で、互いの共通点を見つけて歩み寄ることもできるという可能性を発見できた。日本・韓国の学生というカテゴリーがあっても、それぞれの持つ国籍や、教育を受けてきた場所、信仰する宗教、家庭環境によって個人の人格形成は異なる。そのことを十分に理解した上で対話をしていかないと、発展的な話はできないと思う。

もし自分が韓国で生まれ、教育を受けていたらどんな考えを持ち、発言していただろうか。常に自分は相手の立場にもなりうるのだと言うことを自覚して、フォーラムにのぞめていただろうか。自問自答を繰り返し、最終日を迎えることとなった。

三日目、パネリストとしてフォーラムに参加した。司会とパネリストが模索しながらも、論理的、かつ合理的に議論を進めることができたと思う。実際に三日間を過ごす前までは、つたない英語でも、意思の疎通は図れるものだと思っていた。交流を図るにはそれで問題は無いが、議論の場では、ちょっとした表現の違いで大きな誤解が生まれるほど言語は繊細であり、通訳を介しても、思ったことが十分に伝わらず、もどかしい思いをした。お互いの言葉を教えあい、会話を進めていくうちに、互いの言語で彼らと もっと対話をしたいと切に願うようになったこともあり、同時通訳の存在は大きかった。

もっと議論がしたい、時間を共有したいと思うと同時に、時間の大切さも感じた。コリアンタイムもあってか、集合時間通りに集まるのが難しく、時間が押してしまうこともあり、とても残念に思う。

全体を振り返ると、三日間という期間は、終わってしまえばあっという間だった。だからこそ、この限られた時間で互いを知るために、熱くなれたのではないかとも思う。最大の財産として、かけがえのない友人ができた。真面目に語った後も、休憩中は他愛のないお喋りをすることができた。李教授はとても温かい方で、常に場はなごんでいた。

フォーラムの方向性として、結論を見つけるための議論ではない点がとても良かった。真剣な話題で対話をするだけで計り知れない労力を費やし、自宅に帰ってからも頭を悩ませていたが、雰囲気を良くしようという皆の努力のかけがえがあって、気をつかうことなく話ができたととても良かった。

日韓フォーラムが終了した後、自らも情報を発信する立場にあるのだと思い、友人たちにこのフォーラムのことを話してみた。しかし、問題に興味があったとしても、参加する機会に恵まれるとは限らない。

アジア女性基金の方々、李元雄教授をはじめ多くの方のご尽力で、このフォーラムはあると思う。参加させていただいた事に、改めて感謝したい。

これからは、大事なこの経験をもとに、自分に与えられた機会を活かして自らも勉強をし、活動を進めていくべき立場にあるのだと思った。

韓国と日本の未来

法政大学法学部法律学科

古山 亮太

私が第3回韓日学生フォーラムに参加するきっかけは法政大学で在日朝鮮人研究をしておられる高柳（俊男）先生から、お誘いを受けたことでした。急なことでしたので、満足に準備することができませんでしたが、私自身韓流ブームにはまっている（!?）こともあって、元々韓国に対する関心も強く、両国の学生が席をひとつにして話し合うことで、私自身何かを得られればと思い、参加させていただきました。日程は分科会からの参加となりましたが、フォーラムを終えての率直な感想を報告させていただきたいと思います。

今回のフォーラムでは「慰安婦」歴史問題と韓流について意見交換を行いました。「慰安婦」歴史問題では両国の歴史認識に大きな差があり、特に歴史教科書では「慰安婦」や韓国支配についての記述が、日本は韓国に比べて圧倒的に少なく、その歴史に対する両国の姿勢の差に驚かされました。実際、日本の朝鮮半島支配について興味や知識を持っている日本人は非常に少ないのではないかという印象を日常のなかで覚えます。逆に韓国では日帝支配について歴史教科書のなかで数十ページを割いているという話を聞きました。私はこうした歴史認識に対する温度差が、韓日友好に影を落としているのではないかと思います。そうした意味では、やはり歴史に対する偏見ではない、正確な理解を両国が形成することが大事になるのではないかと考えます。

韓流については、ドラマや音楽、書籍などメディアやその他文化交流が盛んでありますが、それについて各人が意見を出し合い、特にそうした交流について憂慮する意見が聞かれたことは大変参考になりました。しかし、私としてはこうした交流は概ね良いものと評価できるのではないかと考えています。こうした交流が韓日関係の隠れみものとして政治的に利用されるようなことでは問題ですが、こういった形であれ、韓日理解の第一歩とし

て評価できるものと思います。「千里の道も一歩から」です。

今回のフォーラムを通じて感じたことは、「韓国と日本の未来は明るい！」ということです。これまで両国間の意識は低く、ともあれば予断と偏見の塊でした。「近くて遠い国」でした。しかし今はどうでしょうか。人、物の往来は激しく、直接文化に触れることのできる機会が飛躍的に増えました。文化交流も盛んです。そして何よりこのフォーラムを通じて、皆が真剣に意見を言い合い、友人になれたのです。

歴史、靖国、独島など問題は多いです。これまではこうした問題を真剣に話し合う場や雰囲気がありませんでした。しかし今はできます。お互いの認識に差があり、喧嘩になってしまったとしてもそれはたいした問題ではありません。双方が違った環境にいる以上、理解できないことも多々あります。それは問題ではなく当然のことです。大事なことは理解することではなく、理解するように努力することではないでしょうか。上辺だけの理解は要りません。たとえわからなくてもそうした姿勢を示すことはきっと「理解」を得られるでしょう。

そうした意味では今ある様々な問題も、「問題」としての側面だけでなく、「始まり」と「発展」の可能性を秘めているのです。そう遠くない将来に韓国と日本が「近くて近い国」になるのだと私は信じています。

最後にこうした素晴らしい場を提供してくださったアジア女性基金の方々にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

「イメージ」でなく、新しい関係に踏み出す

早稲田大学政治経済学部政治学科3年

杉本 優

「大人たちは日韓の新しい関係を作るのに失敗した」という李元雄教授の言葉が非常に印象的であった。これは今までの日韓関係を表すシンプルかつ的確なものであり、今回のフォーラムなど、さまざまな試みによって次

のステップへと乗越えなくてはならないものでもある。私は現在、大学で中国、韓国など東アジア国際政治のゼミに所属しており、特に韓国をテーマにした勉強をしていることもあり、今回のフォーラムでの議論のテーマにはとても関心があった。

現在の日韓関係を形成する基となっているものには、やはり歴史認識という問題がある。歴史という過去に起ったひとつの真実に対し、立場の異なるところからの見方によって、どうしても認識には差が出てくるであろう。今回、フォーラムでは「慰安婦問題」を中心とした歴史問題がテーマとなった。分科会は別の方に入っていたため、分科会での議論ではどのようなものがあったかについては、私にはわからないがフォーラム本番でもやはり日韓の立場の違いにより、議論は白熱し、時には感情的になってしまった部分もあったように思う。もちろん史実から見て行けば、日本が過去に韓国、そしてアジア諸国に対して行ったことは反省するべきものであり、この点については異論はない。また、この時代を生きていた当事者の方々もまだ多数健在であり、この方々の声を聞き、今後それを伝えて行くことも重要である。しかし、それと同時にお互いが理解しあって新しい関係を作って行くことも重要である。この「過去を直視し、未来志向で」といったような意味の言葉は、さまざまところで何度も耳にしてきたのではないだろうか。このように言葉でいうのは非常に簡単である。それをどう実行に移すか、ということだ。日本においても、過去の日本政府のまずい対応への批判をするグループも多数ある。確かに、先ほど述べたように過去の責任を明白にし、その事実を伝えて行くことは重要であるが、残念ながらこのようなグループの多くはそれだけで終わってしまい、次のステップへと進むことができなかったように思えてしまう。ここでやはり、一番初めに出てきた李元雄教授の言葉を思い出してしまった。では、これからどうして行くべきなのか。

私は何度か韓国に行き、そして韓国の大学生と議論や交流をする機会があった。どうしても、そのような場に来る学生は日本語を学んでいたりと、日本に関心があったりなど、話をしやすい雰囲気があった。しかし、今回

は日韓ともに皆、専門がばらばらであり、必ずしも韓国や日本に対して専門的に勉強していたり関心があったりするわけではない大学生が集まったことで、さまざまな話ができよかったと思っている。もちろん、みんながみんな「韓国や日本に対して関心がなくてはならない」などということがあるわけではない。やはり関心がある人たちはお互いに自分から動き、交流できると考えるからである。私が日本で今までぶつかってきたことには、「特に韓国などに関心のない普通の人たちにどのように韓国のことを伝えるか」ということがあった。これはお互いに「韓国を好きになるべきだ」であるとか、「日本を好きになるべきだ」ということではない。現在の日本と韓国の間、また中国をも含めた関係でも言えることであるが、盛んに言われている相互理解ということ以前に、人々の中にある「相互誤解」を解かなくてはならないということである。

このフォーラムでもあったが、例えば教科書問題について「扶桑社の新しい歴史教科書を読んでいない、韓国の歴史教科書を読んでいない」といったようにお互いに「イメージ」で理解していることが問題である。このようなイメージが誤解を生むものになってしまう。文化などについて、日本人と韓国人は外見上似ているため、たがいに相手が自分と似た生活や考え方を持っていると思いがちであるが、異なる点が多くある。例えば、それは友人関係への考え方や、食事の習慣であったりするだろう。韓国流の親密な友人との付き合い方はあまりプライベートなことを聞いた話したがらない日本人にとっては負担に感じることもあり、逆に「親しき中にも礼儀あり」などという日本流の付き合い方は韓国人にとってよそよそしく友情を感じられないと思うこともあるとのことだ。食事の習慣に関しても日本では茶碗をテーブルの上においたままご飯を食べたり、ご飯とスープを混ぜて食べることはマナー違反となるが、韓国では全く反対であるということもある。

私は、この韓国流の友人関係を韓国で実際に体験し、最初は戸惑ったもののすぐに慣れることができた。夜中まで一緒に遊んでもホテルまで必ず届けてくれたり、地方に住んでいる友人が5時間かけて会いに来てくれた

こともあった。皆がここまでの体験をすることは困難であると思うが、今回のフォーラムで会った人たちと、遊んだり一緒に飲んだりとすることで「友達」という関係になることができる。そして、この「友達」という関係は日本でも韓国でもそうであるが、早い時期、つまり学生の間にはかなれないものであるとも考えている。お互いを「友達の住む国」というように今後思えていける関係が理想であろう。そして、このように思える人自体が増え、その人たちが一般の人たちの誤解を解消していけるようになればと思う。

これを踏まえて、現在の韓流の大きな波は韓国に対する関心を持ってもらうという意味で歓迎されるものと考えている。特に韓流に乗っている大部分が、もともと韓国に対し良いイメージを持っていなかった中年世代が多いということも意味が大きい。そして、若い世代はまずお互いを今回のような機会で知ること。その上で関心が生まれれば、もっと踏み込んでいけばよいと思うし、また、先にも述べたように、周囲の人々の誤解を解消していけるようになれば、これからの日本と韓国の関係は大きく前進することになるだろう。最後になりましたが、今回のフォーラムでは韓国・関東大学の李元雄教授、そしてアジア女性基金のスタッフのみなさんには大変お世話になりました。ありがとうございました。

学びと笑いの3日間——きっと韓国に行くぞ～

中央大学法学部政治学科 3 年

吉濱 しずか

私にとって、今回の学生フォーラムが初めての韓国体験だった。それまでは、行ったことはないが、キムチやチヂミもわりとよく食べていたし、母と一緒に「冬のソナタ」を見ていたし、大学で国際政治を学んでおり、特に今年度は靖国問題の研究をしていたので、韓国についても調べたりしていた。だから、なんとなくではあるが、韓国をイメージすることもでき

た。

だが実際彼らに会って、学んだことがたくさんあった。中でも特に私の中で印象的であったものは大きくわけて3つある。1つは、彼らとは国こそ違うが、同じ若者なのだとしたことであった。純粹に思いめぐらせてみれば簡単にわかりそうなことなのだが、彼らに会い、話をしてみて、ようやく私は想像力が乏しかったのだと気づいた。彼らも私たちと同じように、ファッションや恋愛に興味を持っていたし、将来について考えていた。また互いに自国に対しての様々な感情を持っていた。それは時に愛国心であり、時には権力に対する批判の目として存在していた。国や宗教、言葉が違うだけで、そんな単純な想像さえも妨げてしまうのかと、少し絶望に似たものを感じもした。だが、だからこそ私たちは分かり合えるのではないだろうか、という希望の芽を見つけることが出来た。

2つ目は、彼らの年上や人を敬う心である。これは「冬のソナタ」でも見て取れたし、韓国について調べたことでもわかったことであった。しかし、実際に触れてみて、本当に彼らの先生や年上の人たちに対する姿勢には、頭が下がる思いだった。私もそれなりに気をつけている方だとは思っていたが、甘かった。

彼らと電車に乗った時に、ちょうど目の前の席が空いたので、隣にいた彼女に席を勧めた。すると、彼女「ここは優先席ではないの？ 私が座っているの？」としばらくためらった。私も普段は優先席には座らぬようにしている。だが、それ以外の場所では普通に座ってしまう。彼女に勧めた席は優先席ではなかったので、「大丈夫だよ。」と言うと、ためらいながらも座ったが、終始申し訳なさそうな彼女の様子を見て尋ねた。すると韓国では、「若者は座りません」と言うCMがあったこともあり、若者が座ることが見直されてきているのだという。なんと心優しい、気配りのできる人たちなのだ！ と感心した。たしかに、本当に具合が悪い人や座りたいと望む人は、なかなか自分から「座らせてください」とは言いにくいものだ。優先席でなくても、それほど自分が疲れていない時なら、疲れて乗ってくる誰かのために席を空けておく気持ちを、私は素敵なことだと

思った。私だけでなく、なにか日本は大切なものを無くしているような気がしてならなかった。

3つ目は、互いに相手のことをあまりに知らない、ということだった。私は本や新聞、テレビなどの媒体を通してしか、韓国を知らなかった。自分の目で見、手で触れた韓国ではなかった。なのに、私の中ではなんとなく韓国はこんな感じの国だろう、という像が出来上がっていた。私の中の韓国は、非常にまじめでかつ勤勉で、固いイメージが強かった。しかし先述した通り、彼らは私たちと何ら変わらない、普通の若者だった。このギャップを作り上げているのは、相手を自分と違うとみなすことから来る、無関心なのだろうかと思った。これほど近い国で、これほど身体的特徴も似ている韓国と日本で、なぜ相互に無知であるということが起きるのか。とても悲しいことだと思った。

以上のことを知った私たちは、最終日に行われた公開フォーラムで、次のことを提案した。それは「私たちに出来ること」として、相手のことを「自発的に知る、想像する、発信する」ということだ。これからを担っていく私たちに必要なのは、受け取るだけの知識でなく、自ら動くことで得る自分や相手についての知識である。より理解しようとすることで、「知る」ことが出来るものが必ずあると信じる。また、相手の立場になって考えるという意味での「想像」は、非常に大切であると考えている。私たちはやはりそれぞれに国というアイデンティティを持っており、そこから離れて物事を捉えることは困難かもしれない。しかし、これからの世界ではその枠を超え、人として、アジア人として考えることが必要になってくるであろう。そして、何らかの行動を起こすという意味での「発信」である。自ら動き知りえたことや、想像を通して分かったことを、そのままにするのではなく、伝えていこうというのである。それは家族や学校の友達など、本当に身近な人でいい。韓国の学生たちは、心優しかったとか、私と同じだったというように、簡単なことでもいい。ほんの少しでも私たちが伝えていこうとすることで、何かが変わるはずだ。

今回の経験は、私にとって非常に刺激的だった。だから、この経験をた

だ過去にしてしまうのは勿体無いので、日記にも書き留めた。家族や友達にもたくさんの思い出を話した。私がフォーラムのことを話した相手は皆、口をそろえて言った。「韓国行ってみたいね！」と。「発信」することの意味はここにあるのかもしれない。「発信」することで、1人でも多くの人が相手に興味を持ち、行ってみたいと思う。そして注目するようになるし、実際に行くこともあるかもしれない。そこで初めてその人にとってリアルな経験が出来る。それは、日本も韓国も本当に似ている国なんだ、ということかもしれないし、韓国は素晴らしいところがたくさんあるな、ということかもしれない。より多くの人が、実際に相手を知り、相手の立場になって考え（想像し）、それを身近な人に伝えていく。そこから両国はよりよい未来が築けるのではないだろうか。

最後に、韓国から素敵な友人を連れてきてくださった李先生、フォーラム全体をリードしてくださったアジア女性基金関係者の皆様、今回のフォーラムを紹介してくださった横田教授、そして、日韓両国の大切な仲間たちに心からお礼申し上げます。

たった3日間で、あんなに仲良くなれるとは思ってもいなかった。3日間を通して撮った写真を、あれからすぐに現像した。自分でも驚くくらい笑って写っていた。この写真はずっと大切に持っていよう。そして、近い将来韓国に行くぞー！



公開フォーラムを終えて記念撮影- 2

資 料

日韓は相互に420万人が往来

◆日本からの訪問者は2004年、合計243万人——韓国法務部

日本から韓国へ243万人（+36%）、うち女性が37%から43%に増。
韓国から日本へ174万人。

韓国出国者914万人 +12.7%、

韓国入国者575万人 +23.5%。

日本人の入国者が03年の179万人から昨年36%増の243万人。訪問先は中国（235万人）で、続いて日本（174万人）、タイ（76万人）、米国（71万人） 2005.01

◆国籍（出身地）別入国者数 2004 ——日本・法務省

外国人入国者を国籍（出身地）別に多い順に見ると次のとおりである。これを前年と比べると、中国（香港）が8位から6位になり、タイが英国（香港）と入れ替わり10位に入ったが、それ以外では大きな変動はなく、上位5か国は前年と同順位である。

韓 国	1 7 7 万 4 , 8 7 2 人	（ 構 成 比 2 6 . 3 % ）
中国（台湾）	1 1 1 万 7 , 9 5 0 人	（ " 1 6 . 5 % ）
米 国	7 8 万 5 , 9 1 6 人	（ " 1 1 . 6 % ）
中 国	7 4 万 1 , 6 5 9 人	（ " 1 1 . 0 % ）
フィリピン	2 3 万 6 , 2 9 1 人	（ " 3 . 5 % ）
中国（香港）	2 2 万 6 , 3 2 1 人	（ " 3 . 3 % ）
英 国	2 2 万 2 , 2 8 4 人	（ " 3 . 3 % ）
オーストラリア	1 9 万 7 , 9 4 0 人	（ " 2 . 9 % ）
カ ナ ダ	1 4 万 6 , 1 0 9 人	（ " 2 . 2 % ）
タ イ	1 2 万 1 , 9 6 3 人	（ " 1 . 8 % ）
そ の 他	1 1 8 万 5 , 5 2 5 人	（ 構 成 比 1 7 . 5 % ）
合 計	6 7 5 万 6 , 8 3 0 人	（ " 1 0 0 . 0 % ）

（注）「英国（香港）」は、香港の居住権を有する人で、英国政府が発給した

BNO旅券を所持する人である。「中国（香港）」は、中国国籍を有する人で、香港特別行政区旅券（SAR旅券）を所持する人である（有効期間内の旧香港政庁発給身分証明書を所持する中国国籍者を含む。）。

国籍（出身地）	別新規入国者数	2004	——日本法務省
韓	国	1 4 1万9, 7 8 6人	（構成比 2 5. 8 %）
中国（台湾）		1 0 5万1, 0 2 2人	（ " 1 9. 1 %）
米	国	6 9万5, 3 3 7人	（ " 1 2. 6 %）
中	国	4 1万1, 1 2 4人	（ " 7. 5 %）
中国（香港）		2 2万2, 8 6 6人	（ " 4. 0 %）

韓国のイメージが向上、韓流ブームが理解深める

2005/10/20 20:02

【ソウル20日聯合】韓流ブームの追い風を受け、韓国に対するイメージが改善している。

KOTRAが海外貿易館を通じて70カ国・地域の100都市に住む5287人を対象にアンケート調査を実施したところ、韓国に対する好感度は中国で82.2%、日本で77.8%となった。昨年を実施した同様の調査では、中国が60.6%、日本が67.3%となっており、大幅な上昇となった。韓流とは距離がある欧州では39.4%、北米では30.4%と、韓流の有無により対照的な結果となった。

KOTRAが20日に発表した調査結果によると、「韓国」と聞いてイメージするもの（複数回答）には、キムチやプルコギなどの食べ物を挙げる人が70%と最も多く、次いで自動車（46.9%）、経済成長（43.6%）、オリンピック・サッカーワールドカップ（42.5%）などの回答が続いた。また、回答者の89.5%が韓国の首都がソウルであることを知っており、南北分断については86.7%が知っていると答えた。ただ、韓国が固有の言語を使っているということは74.8%、経済協力開発機構（OECD）に加盟していることは36.1%にしか知られていなかった。

元「慰安婦」の方への総理のおわびの手紙

拝啓

このたび、政府と国民が協力して進めている「女性のためのアジア平和国民基金」を通じ、元従軍慰安婦の方々へのわが国の国民的な償いが行われるに際し、私の気持ちを表明させていただきます。

いわゆる従軍慰安婦問題は、当時の軍の関与の下に、多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけた問題でございました。私は、日本国の内閣総理大臣として改めて、いわゆる従軍慰安婦として数多の苦痛を経験され、心身にわたり癒しがたい傷を負われたすべての方々に対し、心からおわびと反省の気持ちを申し上げます。

我々は、過去の重みからも未来への責任からも逃げるわけにはまいりません。わが国としては、道義的な責任を痛感しつつ、おわびと反省の気持ちを踏まえ、過去の歴史を直視し、正しくこれを後世に伝えるとともに、いわれなき暴力など女性の名誉と尊厳に関わる諸問題にも積極的に取り組んでいかなければならないと考えております。

未筆ながら、皆様方のこれからの人生が安らかなものとなりますよう、心からお祈りしております。

敬具

平成13（2001）年

日本国内閣総理大臣 小泉 純一郎

歴代署名：橋本龍太郎、小淵恵三、森喜朗)

(번역)

근계

이번에 정부와 국민이 다 함께 협력하여 추진하고 있는 『여성을 위한 아시아평화국민기금』을 통해 종군위안부로서 희생되신 분들께 우리 나라의 국민적인 사죄를 표명하고자 합니다.

이른바 종군위안부문제는 당시 구 일본군의 관여하에 많은 여성들의 명예와 존엄성에 깊은 상처를 입힌 문제입니다. 저는 일본국내각총리대신으로서 다시 한번 소위 종군위안부로서 수 많은 고통을 겪고 심신양면에 걸쳐 치유하기 어려운 상처를 입으신 분들께 진심으로 사죄와 반성의 뜻을 말씀드리고자 합니다.

우리는 과거의 무거움으로부터도 미래를 향한 책임으로부터 도망칠 수는 없습니다. 우리나라로서는 도의적인 책임을 통감하면서 사죄와 반성의 뜻에 입각하며 과거의 역사를 직시하며 이것을 후세들에게 바로 전달하는 것과 동시에 부조리한 폭력 등 여성의 명예와 존엄성에 관련된 문제들에 대해서도 적극적으로 임해야 한다고 생각합니다.

끝으로 여러분의 앞으로의 인생이 평온하시기를 충심으로 비는 바입니다.

경구

2001년

日本國內閣總理大臣 小泉 純一郎

アジア女性基金主催・外務省後援 公開フォーラム(歴史・対話シリーズ)開催の経過

1 ◆戦争の記憶と未来への対話～国際的視点から

2002年2月23日

東京ウィメンズプラザホール(東京・青山)

日本とドイツの戦後の行き方を比較

イアン・ブルマ(ジャーナリスト)、木佐芳男(ジャーナリスト)、高木健一(弁護士)、石井信平(ジャーナリスト)、高崎宗司(津田塾大学教授)、伊勢桃代「基金」専務理事

2 ◆日本と韓国—過去の記憶と未来への対話

2002年11月16日

上智大学(東京・四ツ谷)

「歴史・過去」をめぐる日本と韓国での語り方・扱い方を検証し、新しい関係のあり方をさぐった

小倉紀藏(東海大学助教授、NHKテレビ・ハングル講座講師)、道上尚史(外務省課長)、高崎宗司(津田塾大学教授)、饗庭孝典(早稲田大学講師、元NHK論説主幹)、金恵京(早稲田大学大学院・留学生)、李敬宰(高槻市「在日」NGO・高槻むくげの会)、伊勢桃代「基金」専務理事

3 ◆日韓学生のフォーラム2003(第1回)

—日韓関係の現在・過去・未来～新時代に生きる私たちの対話

2003年7月1日

国際連合大学会議場(東京・青山)／国際連合大学・共催

日韓の学生が現在の目で、「慰安婦」・過去の問題と未来への関係づくりを語り合った
韓国学生—18人：関東(KWAN-DONG)大学校学生、西江(SO-GANG)大学校国際大学院生／留学生—2人(韓国—早稲田大学)／日本学生—16人：中央大学、東海大学、津田塾大学、杏林大学、明治大学、早稲田大学学生

アドバイザー—李元雄(関東大学校教授)、横田洋三(中央大学教授)、饗庭孝典(早稲田大学講師)、伊勢桃代「基金」専務理事

4 ◆「だから戦争」の論理と心理—女性、国民、アジアの視点から

2004年3月4日

主婦会館プラザエフ(東京・四ツ谷)

「あたらしい戦争」「戦争の大義」がいわれるなかで、「国家、戦争、暴力、女性」を歴史的・論理的視点から語り合った

上野千鶴子(東京大学大学院教授)、加藤陽子(東京大学大学院助教授)、姜尚中(東京大学社会情報研究所教授)

伊勢桃代専務理事あいさつ



東京・新宿発フォーラム



「だから、戦争」フォーラム

5 ◆日韓学生のフォーラム2004 ―メディアと体験と日韓関係 (第2回)

2004年8月24日

国際連合大学会議場(東京・青山)

23日 訪問:韓国広場、朝日新聞、東亜日報東京支社

▽日韓関係とメディア―歴史問題、北朝鮮、食・文化・スポーツ交流

▽日韓文化の接点―現状とこれからの日韓関係

学生パネリスト:韓国13人、留学生2人、「在日」4人、日本10人／韓国―関東大学校、梨花女子大学校、慶熙大学校、西江大学校、韓国外国語大学校／日本・「在日」―中央大学、日本体育大学、テンプル大学ジャパン、慶応大学、早稲田大学、東京大学、十文字学園女子大学、お茶の水女子大学

アドバイザー:李元雄教授、小倉紀藏助教授、橋本ヒロ子教授、伊勢桃代専務理事・事務局長

6 ◆東京・新宿発―日韓協力の新しい街づくり

(住民、生活次元の日韓関係)

2005年3月12日

新宿・大久保 ホテル海洋「カトレア」

共催 (財)新宿文化・国際交流財団／後援 新宿区 外務省

生活・文化・住民次元での日韓関係発展のため住民が対話

新宿大久保通り、職安通りの日韓事業者・住民・一般、新宿区役所関係者ほか

あいさつ―中山弘子新宿区長、伊勢桃代専務理事・事務局長

基調発言―小倉紀藏(東海大学助教授、NHKテレビ「ハングル講座」講師。韓国哲学専攻)／金根熙(キム・グンヒ、韓国広場社長)

パネリスト:三澤治男 大久保いぶき町会副会長、植木康次郎 大久保いぶき町会環境衛生部長、金根熙(キム・クンヒ) (株)韓国広場社長、森田忠幸 新大久保商店街振興組合理事長、金世煥(キム・セファン) 在日本韓国連合会事務次長、李承珉(イ・スンミン) 新大久保語学院院長、小倉紀藏 東海大学助教授、小柳俊彦 新宿区企画課長

コーディネーター:柳田富美子(財)新宿文化・国際交流財団国際交流担当課長

閉会あいさつ 須磨洋次郎(財)新宿文化・国際交流財団常務理事

*当時の役職、組織名

財団法人 女性のためのアジア平和国民基金
(アジア女性基金)

ASIAN WOMEN'S FUND

102-0074 東京都千代田区九段南 2-7-6

マニユライフプレイス九段南 4階

<http://www.awf.or.jp>

info@awf.or.jp



日韓学生のフォーラム 2005 (東京・S Y Dホール)

財団法人 女性のためのアジア平和国民基金
(アジア女性基金)

ASIAN WOMEN'S FUND

102-0074 東京都千代田区九段南 2-7-6

マニユライフプレイス九段南 4階

<http://www.awf.or.jp>

info@awf.or.jp

